

---

# 魔法少女リリカルなのは2体の魔神を従えし者

辰巳の方角の愚者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは2体の魔神を従えし者

### 【Nコード】

N6666K

### 【作者名】

辰巳の方角の愚者

### 【あらすじ】

高町家に居候している記憶喪失の少年、高町 守には莫大な力が秘められていた。一つのロストロギアにより回り始める物語、その中で2体の魔神が目覚める。

## プロローグ1（前書き）

初の二次作品と自信がありませんが、楽しんでもらえたらいいです。

## プロローグ1

そこには何もない無限の白き闇につつまれた奇妙な空間だった。その空間には1人の十代後半の少年とどこか神々しく威圧感を示した存在がいた

「そんなに“俺達”が気に入らないか!？」

少年が叫ぶがそれに対する返事はなくただ膨大な力の塊が少年を襲った

「ちっ、聞く耳なしか、なら来い!ペルソナ、アスラマキーナ!」

その少年の言葉によって2体の魔神が現れた。

一つは少年の背中から浮かび上がるように現れた。

その姿は背中に一对の翼を持ち、左手には棺を持った白き魔神

もう一つは少年の影を引き裂くように現れた。

その姿は全身を鋼色の装甲に包み左手に巨大な剣を握っている機械仕掛けの魔神である。

そしてその2つの魔神を従えて少年と神々しい何かは戦いを始める

## プロローグ1（後書き）

……………何これ？

いやあまり書くとネタバレにも繋がるから自重して書いたけどなんだこれ？

？「始まりから諦めるんじゃない！！」

うおおおおい！！いきなり来るな主人公高町 守よ。てかそんな説教臭い性格という設定じゃないよお前！？

守「後書きだし、まあいいじゃん」

そっかあ、しかし僕もなんだかな

映画と他の二次を読んで書きたいという情熱に目覚めたのは良かったが大学受験という地獄が僕を襲い受験が終わったらという希望を胸に頑張ったのに終わったら母上の指示で携帯が変えられて使い方が意味不明で悩んだ数日後、やっと執筆できた物がこれだとなあ何だっただらう？あの時間

守「受験生として間違った発言が目立つが（映画見に行くとか、受験の目的がいろいろと間違っている事など）まあこれから書いていけばいいじゃないか」

まあ大学は一応受かったけどね出だしこれだと先がちよっと不安だわ守「でこれはどういうネタ使ってるの？」

主人公である君の能力は僕の趣味MAXのペルソナ3とアスラクラインだぜ！

守「具体的には？」

ペルソナは……………ってネタバレだよ！？

言えるわけじゃないでしょ！！でも知っている人はわかるようにかなりストレートに書いたけどね

さてそろそろというかプロローグとはいえ本文より後書きの方が中身が濃いのはマズイのでまた今度！

守「またな」

## プロローグ2（前書き）

……何かいろいろとはしよった感じが

## プロローグ2

少女……高町　なのはは困っていた。

なのはが困っている原因は家の前になのはと同じくらいの年の男の子が全身傷だらけで倒れているからである。

なのはが恐る恐る近づいて

「あの…大丈夫ですか？」

なのはが訪ねるが返事がない、しかし少年の胸元は規則正しく上下しているの息をしている事は確実である。

今のなのはができる事は助けを呼ぶ事だけであった

「お父さん！お母さん」………

結局その少年はなのはの父、士郎によって病院へと連れていった。

その後、少年は目を覚ますが記憶喪失である事が分かり身元が不明だったため高町家に養子となった。少年の名は唯一手元にあった守と書かれていたペンダントから守という名前になった。この一年後物語は始まる

## プロローグ2（後書き）

……あれ？主人公喋ってなくね？  
まだプロローグだししかたないかな？  
読んでくれた方すみません次から無印の本編始まるので待っていて  
ください

## 設定

高町 守

9才

身長 125cm

体重 23kg

能力

ペルソナ

オルフェウス

アスラマキーナ

鋼

魔力量

AAA

プロフィール(?)

高町家の前でぶっ倒れていた少年。

なののはによって助けられた事が理由で高町家の養子になった。

なののはとは双子の扱いでどっちが年上かと係争中

本人は完全に無自覚だがなののはと同じくリンカーコアを持っていて  
魔導士の才能がある。

ユーノとの接触によりペルソナ、オルフェウスが覚醒する。

守「アレ？アスラマキーナはどうしたんだ？」

いや、始めから鋼使ったらチートだぞお前

わからない人のためにも説明するがな鋼の能力は空間制御だぞ。白銀の空間切断能力と黒鐵の重力制御能力が使えるんだぞ！！

始めから使ったら危ないわボケエ！？

守「……………えつとじゃあ、いつ頃登場するの？」

無印の中盤辺りかなあこれ以上はネタバレにつながるから禁止だまあ使う機会はそんなに多くはないけどね

守「ふ〜ん。なんかリンカーコアがあるとか書いてあるけど魔法使うの？」

それはあくまでもリンカーコアがあるというだけで魔法を使うわけではないので注意

守「最後に質問？」

何？

守「確かペルソナ3でオルフェウスの弱点魔法が雷になっているけどさ」

ふっふっふっふっふ頑張ってね

守「……………不安だ」

## 設定（後書き）

短いとはいえポンポン書くもんじゃないな  
今後は注意しようしかしもうちょっとうまく書けないかな

## 第一話（前書き）

約1ヶ月の放置すみませんでした！！

守「具体的に何があった？」

えっと、一言で言うと大学生活に慣れなくて潰れてた。

守「ただの言い訳じゃん」

いや、まずは履修登録が絶賛不調のパソコンでするはめになって手順に凄く時間がかかって大変だったし、僕少し人見知りする性格でキャンパスにいる間ストレス負荷がかかって家帰ったら寝るだけでした。

守「ダメ人間」

うん否定しない。

そんな感じでGWにやっと書く機会があったけど

文章がめっちゃくちゃになってしまった感じが……本当にすみません。

## 第一話

奇妙に歪んだ空間そこにいる化け物。

近くに白い服を着た女の子と足元にネズミのような生き物がいる。  
そして化け物が俺の方に向かっていって、ぶつかる直前に光が溢れて“ナニカ”が現れた

「また、あの夢か。」

少年 高町 守は呟く。

彼がこの夢を見るようになったのは二週間前からである。

おぼろげにしか思い出す事ができない。

しかも夢に出てくる人物は顔すらわからない。

「まあ別にどうでもいいか。ただの夢だし」

しかし当の本人は特に問題にしていない。

最初の頃は不安もあったが、実害がないので慣れてしまったらしい。

「さて、朝ご飯食べに行こうかな」

「おはよう、父さん、母さん」

「「おはよう、守」

守はリビングにいた。士郎と桃子に挨拶をする。

「なのはと恭也兄さん達は？」

「たぶん道場の方じゃないかな？なのははそろそろ……」

「おはよう、お父さん、お母さん、守」

「「「おはよう、なのは」「」」

士郎の答えを聞く前になのはが降りて来た。

ちなみになのはと守は同じ年なので双子という扱いだ。が守の誕生日（一応、拾ってもらった日が誕生日となってはいるが）がわからないのでどちらが年上かで争う事があるが、家では一度争っていた時に桃子（魔王）が降臨してからは家では平和協定が結ばれている。しかしそれを除けば基本的には仲のいい兄弟だ。

「お兄ちゃん達は？」

「道場の方だって」

「じゃあ行くぞ守」

と守となのはは道場の方へ向かっていく

「「お兄ちゃん（恭也兄さん）、お姉ちゃん（美由紀姉さん）おはよう」「」

「ああおはよう、なのは、守」

「おはよう」

なのはは道場にいた美由紀に向かってタオルを投げる。

「んっありがとうなのは」

「もうすぐ、朝ご飯だっさ」

「わかった。美由紀、朝はここまで」

「はい。続きは学校帰ってからね」

高町家の朝食は必ず全員そろってからとる。  
これだけ聞けば仲がいい家族ですむのだが

「皆あれだぞ、こんな料理上手な母さんがいて幸せなんだからな」

「やだ、あなたったら」

士郎と桃子はいまだに新婚気分であり

「美由紀、リボンが曲がっているぞ」

「え、本当？」

「ほら、貸してみる」

恭也と美由紀も異母兄弟と思えないほど仲がいい。はっきり言って仲のいい家族という風に言いきるのは難しいものがある

「なあ、なのは」

「何？守」

「俺達って…」

「それ以上は言っちゃ駄目だよ」

こんな感じでなのはと守は家族の中でどことなく浮いた存在になってしまっている。

しかし二人とも浮いたいる事を深刻に悩んでいるわけではなかったりする。

「「じゃあ、行って来まーす」」

守となのはは同じ聖祥大付属小学校に通っているので、一緒に家を出る。

「「おはようございます」」

守となのははバスの運転手に挨拶をする。

「なのは、守おはよう」

「なのはちゃん、守君おはよう」

バスに守となのはが乗ってすぐに挨拶をしたのがなのはの友達のアリサ・バニングスと月村すずかである。小学1年の時からなのはの友達で守が高町家の養子になって聖祥大付属小学校に来た時にいろいろと関わる機会があったので、守とも友達である。

「おはよう、アリサちゃんすずかちゃん」

「おはよう、アリサ、すずか」

そして、彼らの日常は始まっていく。

「将来かあ」

昼休みに屋上で弁当をたべながらなのはは呟く。

なのはは今日の授業で聞いた将来の夢に対して悩んでいた。

「二人はもう結構決まっているんだよね？」

「私はお父さんもお母さんも会社経営だし、いっぱい勉強してちゃんと継がなきゃ、ってぐらいだけど」

「私は機械系が好きだから、工学系で専門職がいいなって思ってるけど」

なのはの質問に二人は答える。小学3年にしてはかなり現実味のあ

るしっかりした将来像である。

「そっか、すごいね二人とも」

なのはが少し沈んだ声で言う

「でも、なのはは喫茶翠屋の二代目じゃないの？」

「うん、それも将来のビジョンの一つではあるのだけどやりたい事が何かあるような気もするんだけど、まだそれが何なのかはつきりしないんだ」

「…あ！？守君は何か考えているの？」

話すたびにだんだん暗くなっているのはを見てすかさずずすが守に話をふる

「俺？……まだ考えてないな、何か言い訳はいけど、今は自分の事で精一杯でそんな余裕がないよ」

「でも皆スゴいよね。私は特技も取り柄も特にないし」

「バカチン！」

なのはがまた自分を過少評価し始めるとアリサがなのはに向かってレモンを投げつけながら怒鳴った。

「自分からそういう事、言うんじゃないの！…！」

「そうだよ。なのはちゃんにしかできない事、きつとあるよ」

なのはに対してアリサとすずかが怒る。守に関しては無関係を装うつもりらしい。

「だいたいアンタ！理数の成績はこのアタシよりいいじゃないの！それで取り柄がないとはどの口！」

その言葉と同時にアリサはなのはの方に向かって行き、なのはの口を左右に引っ張っている

「だってなのは、文系苦手だし体育も苦手だし、痛いよアリサちゃん！」

口を引っ張られながらも喋るなのは

「と、止めてあげなよ守君、双子でしょ？」

すずかが自分では止められないと判断して守に助けを求める。

ちなみになぜここですずかが双子という表現を使ったのかは、前に一度

「お兄ちゃんでしょ？」

と言った時は

「私の事そう思ってるんだ？少し頭冷そうか？」

となのはが言い、近くにいたクラスの皆を震え上がらせた。逆に

「弟でしょ？」

と言つと

「俺ってそう見えるんだキミたち？」

と守が言い発言者はボコボコにされて見つかる。

ゆえにクラス内では高町の双子にどちらが上か？という話題はもはや禁句の領域にある。

「別になのはとアリサの事だし、いつもの事だ気にするな」

「そ…んな」

守の言葉になのはは崩れ落ちた。

放課後なのは達は塾へと向かっていき、守は家へ帰って行った。

昼休みはたまたま話題にならなかつたが守の学力はなのはと同じく少し文系科目を苦手としているが理系はなのはを上回るほどである。そのため塾に行つてない。

しばらく守が家でゴロゴロする事にした。

途中助けてという声が聞こえた気がしたがあまり明確に聞こえず気のせいと流した。

その後、夕食になのはが急にフェレットを飼いたいと言い出した。

「うん、フェレットかぁ。ところでなんだぁフェレットって?」

なのはの頼みに対しての土郎の言葉に高町家の子供達は全員ずっこけた。

「黴の仲間だよ父さん」

「だいぶ前からペットとして人気なんだよ」

恭也と美由紀が捕捉する。

「フェレットって確か小さいわよね?」

「知っているのか?」

「えーんとこれくらい?」

なのはは両手で大体の大きさをしめす。

「しばらく預かるだけならカゴに入れておいてなのはがちゃんとお世話できるならいいかも、恭也、美由紀、守どう?」

桃子が大きさを基準としたのか不明だが、なのはに条件を出した上で恭也達に確認を取る。

「俺は特に異存はないけど」

「私も」

「どうしても……なのはお飼いたいと思うならいいんじゃない。」  
恭也と美由紀は素直に賛成したが、守は元々の性格なのか自分にあまり関係なければ、どうでもいいと言って流してしまう傾向にある。しかし前に高町家でどうでもいいと言った時に家族全員からかなり強く注意をくらい極力言わないようにしている。

「うん、だそつだよ。」

士郎が守を睨みつつ、なのはにOKを出す。

「よかったわね。」

「うん、ありがとう。」

そんな感じで結論としてフェレットは高町家で預かる事になった。

夜に守は明日の学校の準備をしつつ明日から預かる事になる予定のフェレットについて調べていた。

取り敢えず飼うのであれば最低限の知識は必要だろうと考えたからである。そして調べている最中

(助けて)

再びという声が聞こえた。

しかしそれは聞こえたというより、自分の頭に直接伝わってくるような感じだった。

しかし具体的にどうしたらいいのか分からずとまどっていると、隣のなのはの部屋のドアが開く音がした。

「おい！なのはお前どこに行くつもりだ！？」

守もすぐに自分の部屋をでてなのはに聞く。

「守！？え〜とえ〜とごめんなさ〜〜い」

守に聞かれてしばらくおろおろした後になのはがとった行動はシンブルだった。

守に背を向けて走り出した。簡潔に言えば逃げた。

「え？……………って待てなのは！！」

なのはが質問に答えなくて急に逃げたので守が少し呆けた後、すぐになのはを追いかけた。

「なのは、お前本当に体力ないよな？」

「はあはあ、ま、守のいじわるー」

なのはがすぐに逃げたのはよかったがあっさり守に追いつかれてしまった。

しかもなのはが息切れしているのに対して、守は元気そうだ。

「でどうしたよ？急に家を出て走り出して、家出とかするキャラだっけ？」

「違うよ！？え〜と急に助けてって声が聞こえて、急いでいたんだけど。」

なのはが少し守の様子を見ながら聞く。

おそらく急に助けてって声が聞こえたと言えば、頭大丈夫か？とか言われる事を心配しているのだろう。だが守にも聞こえたので守がなのはの言う事を否定する事はない。

「OKじゃあ行こうか？なのは案内よろしく」

「信じてくれるの？」

「なのはの性格上、そんな不可思議現象な嘘つかないだろ？後、俺も多分聞こえたし」

「ホント！？」

「ホントだ！ほら行くぞなのは」

「うん！」

なのはと守が動物病院に向かって行った。  
何者かわからない声のために、それが彼らの日常の崩壊に繋がるとも知らずに

「つつ！？」

「また、この音」

動物病院につく直前、耳鳴りのような音が聞こえた。  
それと同時に人の姿が消え、街の一部が奇妙な空間に包まれた。

「これって……」

守は今朝見た夢と同じ歪んだ空間を思い出していた。そして目の前をフェレットが通りすぎた。

「あれは」

「え？」

その後を追いかけるようにスライム型をした化け物が体当たりをしていった。

フェレットは木から飛ぶ事で化け物の攻撃を避けた。

そしてフェレットがこちらを見てなのはのところへ飛んで行った。

「知能高っ!？」

思わず守はつつこんでしまっていた。

「な、何々一体何!？」

化け物は先ほどの体当たりで倒れた木の下敷きになってもがいている。

「来て、くれたの?」

フェレットがなのはに向かって話かけた。

「しゃべった!？」

「フェレットって喋れるの!?!?てか頭の中どうなっているの!?!?」

なのは手をバタバタさせて驚き、守は思考が変な方向に向かっていた。  
とか言っていると化け物が木をどかせていた。

「はい！逃げるー！！」

「う、うんー！！」

そして逃げている途中になのがフェレットに質問をする

「えっと、その何が何だかよくわかんないけど、一体何なの？何が起きてるの！？」

「君達には資質がある。お願い僕に少しでも力を貸して！」

「資質？」

「話が見えないんだけど」

「僕はある探し物のためにここではない世界から来ました。でも僕一人の力では思いを遂げられないかもしれない。だから、迷惑と分かってはいるんですが、資質を持った人に協力して欲しくて、お礼はします！必ずします！！僕の持っている力をあなた方に使ってほしいんです！僕の力を、魔法の力を！！」

そうして一気に説明したフェレットに対する二人の反応は

「魔法？」

「いや、いらね」

なのはは混乱しているようでもう一度呟き、守はかなりなげやり気味に言った。

「ウオオオオ！！」

そんな風に少し呆けていた二人の上から化け物が再び襲いかかってきた。

「はい、なのははあっち。」

守はそう言うとなのはを電柱の影へと隠し、化け物の前にでた。

「さてと、根性で何とかなるかな？」

一方、電柱の影で隠れているなのはとフェレットは

「お礼は必ずしますから」

「お礼とかそんな場合じゃないでしょ？」

となのはが化け物とにらみあっている守を見る。

「どうすればいいの？」

「これを」

フェレットの声を聞いてなのはを見ると、フェレットが首にかけていた宝石をなのはに渡した。

「暖かい」

冷たいはずの宝石が自ら熱を放ってた。

「それを手に目を閉じて心を澄ませて、僕の言葉を繰り返して」

なのははフェレットの言う通りにする。

「いい、いくよー!」

「うん!」

守と化け物はにらみ合いをしていた。

守は化け物がどういふ精神構造をしているのか知らないが、守が前に出てから何故か動こうとしない。

まるで守の価値を見定めているようだった。

その時、急になのはのいる方向から巨大な桜色の光の柱があらわれた。

「はっ!?!」

守が気をそらした瞬間化け物が襲ってきた。

巨大な桜色の光の柱があらわれる少し前、なのははフェレットの言う事を復唱し始めた。

「我使命を受けし者なり」

「我使命を受けし者なり」

「契約の元その力を解き放て」

「えっと、契約の元その力を解き放て」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして、不屈の心は」

「そして、不屈の心は」

「この胸に!!!」

「この手に魔法をレイジングハート、セットアップ!!!」

その言葉と共になのはが宝石を上にかかげる。

「Stand by ready set up!」

その音と共に巨大な光があらわれた。

「何て、魔力なんだ。」

フェレット自身が目の前の人の巨大な魔力に驚いていたしかしすぐ

に立ち直ってなのはに指示を出した

「落ち着いて、イメージして君の魔法を制御する魔法の杖の姿を。そして君の身を守る強い衣服の姿を!!」

「そんな急に言われても、えつとえつと」

いきなり言われたものの、なのはは急いで考え始めた。

「と、とりあえずこれで」

となのはが考えると、なのはと宝石に変化が起きた

なのはの服が普段から着ている制服をベースとし胸元に赤いリボンが付いたものへと変わり、宝石は杖へと変化した。

「成功だ」

なのはの変化を見てなのはの足下にいたフェレットが呟く。  
しかしなのはは

「ふえ、ふええ!?!嘘何なのこれ」

自分の急な変化にかなり戸惑っていた。

「はっ!?!?そう言えば守は!?!?」

なのはが立ち直って、守の方を見るとそこには守と背中に豎琴を背負った青い魔神がいた。

「え〜え」

青い魔神を見てなのは情報処理能力はやや限界を越えたらしく、  
なのはは混乱の極みに入っていた。

なのはが守の方を見る少し前

守が急に表れた光に驚いて化け物から目をそらした隙を狙って化け  
物が襲いかかってきた。

「しまった!？」

守はすぐに己のミスに気が付いたが、もはや手遅れだった。

そして化け物が守に体当りをする瞬間、ソレは現れた。

ソレは白い大きな豎琴を背負った魔神だった。

ソレは化け物の体当りを背負った豎琴で受けとめる。

そしてそのままの勢いで化け物を弾き飛ばした。

そしてソレは名乗り始めた。

「我は汝、汝は我、我は汝の心の海より出でし者、幽玄の奏者、オ  
ルフエウスなり!!」

これが彼らの非日常の始まりである。

少女は魔法という力を手にし、少年は存在するはずのない力を振る  
う。

それがやがて大きなうねりとなっていく事は誰も知らないでいた。

## 第一話（後書き）

前書きでも書いたけど何か文章がかなりぐだぐだしている。

守「まだ慣れてないからじゃね？」

それもあるけど、間が空きすぎた事と一気に一話を全部書いたからだと思う。

守「大丈夫か？」

ちよつとやり方を変えて原作の一話ごとに出さないで区切りのいい部分ごとに書く事にします。

何かうまく書く方法あったら誰か教えてください。

守「何かちよつと弱気な筆者ですが、やるときはしっかりとやる人間なんで温かい目で見守ってください」

## 第二話(1)(前書き)

や、やっと書けた。

守「時間掛かりすぎだよバカ野郎!!理由と言つ名の言い訳を聞こうか?」

かなり長くなるから後書きで書くのでとりあえず本編を楽しんで下さい。

## 第二話(1)

混乱……その場を支配していたのはそんな雰囲気であった。

なのはは自分の変化に意識が追いついてなく、守は急に自分の体から出てきたオルフェウスと名乗った魔神の存在に戸惑っていた。

「来ます！」

そんな中で一番早くに立ち直ったフェレットがなのはと守に警告をするが反応が遅れた。

「ウオオオオオ」

雄叫びとともに化け物がなのはと守に向かって体当たりしてきた。しかし、化け物と二人がぶつかる前に再びオルフェウスが背中に背負った豎琴で化け物を受け止める。

「何かアレだよな？豎琴を武器にするって、音楽家に対して喧嘩売っているよな？」

「にはははは、でもアレって守から出てきたんじゃないの？」

「らしいけどなんだろうねアレ？」

オルフェウスによって護られている。二人はオルフェウスに向かってかなり失礼な発言をしていた。

そして、オルフェウスは腹のスピーカーの様な部分を振動させて衝撃波を放った。

その衝撃波を受けて化け物はバラバラになった。

「すごい！バラバラにしちゃったよ守！！」

「あらら、とりあず問題解決？」

「まだです！！」

なのはと守が少し気を緩めたがフェレットの忠告を聞いてバラバラになった化け物の破片を見ると

「うそ！？」

「そりゃズルいだろ」

破片が少しずつ集まって戻ろうとしていた。

「説明をするので一度離れて下さい。」

二人はフェレットの言葉に従って一度離れた。

「僕らの魔法は発動体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式です。そして、その方式を発動させるために必要なのは術者の精神エネルギーです。」

なのはと守は化け物から距離をとりながら、フェレットの説明を聞いていた。

「そして、アレは忌まわしい力の元な生まれてしまった思念体。

アレを停止させるにはその杖で封印して元の姿に戻さないといいけないんです。」

「なんとなくわかった。」

守はフェレットの説明で大雑把に理解したらしい。

「よくわかんないけどどうすれば?。」

なのははフェレットの説明でわからなかったらしく解説を求めた。

「「「……………」」」

瞬間、沈黙が2人と一匹(?)の間に走った。

「なんで(わかる)わからないの!?。」

「あのなあ、こんな状態で話を聞く時は話の全体を理解しようとするんじゃないくて取り合えず今、重要な部分だけ聞けばいいんだよ。取り合えずアレ止めるにはその杖でなのはが頑張るっていうのでいいだろ?。」

守がなのはにかなり大雑把に説明してからフェレットの方を見た。

「…えっと大体それであってます。」

急な話の展開にフェレットは呆然としていたが、守に話を振られてやっと我にかえた。

「で、具体的にどうするの?。」

「それ私のセリフー!!」

守が勝手に話を進めようとしていたので、なのはが守を止めた。

「えっと攻撃や防御等の基本魔法は心に願うだけで発動しますが、より大きな力を必要とする魔法には呪文が必要なんです。」

「呪文？」

「心を澄ませて、心の中に貴方の呪文が浮かぶはずですよ。」

そうフェレットが言うとなのはは目を閉じて集中し始めた。

「ウオオオオオ」

「もう再生したのか!?!」

守が再生した化け物に驚いていた。

それと同時に化け物は守となのはに向かって触手のような物を飛ばした。

「オルフェウス!!」

守の指示によってオルフェウスが守に向かって飛んでくる触手を叩き落とした。

しかしオルフェウスが叩き落としたのは守に向かっていた触手だけでなのはには触手が向かっていっていた。

「げっ、なのは逃げる!?!」

しかしなのはは逃げようとせず、急に目を開くと手に持っている杖を前に出した。

「Protection」

杖が言うとなのはの目の前に桜色の壁が現れて触手を防いだ。そして化け物が怯んだ隙を狙ってなのはが唱え始める。

「リリカルマジカル」

「封印すべきは忌まわしき器ジュエルシード」

なのはの呪文にフレットが重なって言う。

「ジュエルシード封印!!」

「Sealing Mode Setup」

なのはの持っている杖が伸びその部分から翼が生える。そして杖から帯のような物が化け物を包み込みんだ。そして化け物の額に21の数字が浮かび上がった。

「Stand by ready」

「リリカルマジカルジュエルシードシリアル21、封印!!」

「Sealing」

その言葉とともにさらに大量の桜色の帯が化け物を貫いて、化け物はひし形の宝石に変わった。

「これがジュエルシードです。  
レイジングハートで触れて」

「もしかして俺メチャメチャ必要なかった。」

「にやはは、ごめんね守」

そう言いながらなのははレイジングハートをその宝石に近づけると  
宝石はレイジングハートの中に入っていった。

「R e c e i p t   n u m b e r   2 1」

宝石が杖の中に入ってからなのははの服が普段の私服に戻り杖が赤い  
宝石へと戻っていった。

「あれ、終わったの？」

「みたいだね。」

「はい、貴方達のおかげであります。」

その言葉とともにフェレットが倒れる。

「あ、ちょっとねえ！大丈夫！？ねえ！？」

「この音……！！？なのははもっと別の事を気にしろ！！」

「えっ？」

守に言われて、なのはが耳を澄ませると聞こえてきたのはパトカーのサイレン音だった。

「も、もしかしたら私達ここにいたら大変あれなのでは？」

「うん、あれだよな。」

そう言っつて二人はお互いを見ると

「と、とりあえずごめんなさ〜い！」

「壊したのは俺達じゃないので修理よろしく〜」

なのはは謝りながら守はかなり無責任な事を言いながら逃げ去った。

.....

その後、体力のないなのはが走り疲れて警察に見つかりかけたり、守がテンパってオルフェウスを呼び出しかけたりするという紆余曲折を経て、なのはと守は何とか公園に隠れる事に成功した。

「はあはあはあ」

「いや、アレは危なかった。」

守となのはは息を整えながら公園のベンチに腰をかけた。

「守がいきなりあの変なの出すから。」

「変なのとはなんだ。」

アレはオルフェウスって名乗っていたぞ。  
しかも俺がアイツを呼びかけた原因はお前が警察に見つかりかけるからだろ。」

でも警察がオルフェウス見た時に『お化けだああ!？』って言って逃げたのはラッキーだったかも、アレで捕まったらいろいろと不味かったしな。」

「すみません」

とかなのはと守が言い争っていると、急にフェレットが割り込んで来た。

「ん?」

「あ、起こしちゃった?」

「ごめんね乱暴で、怪我痛くない?」

「怪我は平気です。」

「もうほとんど治っているから」

「そう言うとフェレットは自分に巻かれた包帯をほどいた。」

「本当だ怪我の後がほとんど消えている。」

「怪我とかあったんだ?」

「うん。」

「助けてくれたおかげで残った魔力を治療にまわせました。」

「よくわかんないけど、そうなんだ。」

「器用だね、魔法って」

二人がそれぞれ思い思いの感想を言っていた後

「ねえ自己紹介してもいい？」

「あつうん。」

「えへん 私、高町なのは小学校3年生。家族とか仲良しの友達はなのはって呼ぶよ。」

「俺は高町 守なのはと同じ小学校3年生で、なのはとは双子だ。」  
双子と言った時になのはと守の間に火花のような物が見えたのは気のせいだとフェレットは思う事にした。

「僕はユーノ・スクライア、スクライアは部族名だから、ユーノが名前です。」

「ユーノ君か、かわいい名前だね。」

「名前にかわいいとか基準があるのか？」

守がなのはにツツコムがスルーされた。  
急にユーノは頭を垂らした。

「すみません、あなた達を、」

「なのはと守だよ」

ユーノが言い切る前になのはが修正をする。

「なのはさんと守さんを巻き込んでしまいました。」

その言葉を聞いて、なのはが寂しそうにしていたが、

「えっと……たぶん私、平気」

「同じく」

「そうだユーノ君怪我してるしてるんだしここじゃ落ち着かないよね。」

とりあえず私の家に行きましょ、後の事はそれから、ね?」

「その前に恭也兄さんの説教が待ってると思うけどどうやって切り抜けるの?」

「ううゝ守、嫌な事思い出させないですよ。」

そんな感じでどういいう風に説明をするか二人で考えたりしながら家に帰っていった。

.....

「なのは、中に恭也兄さんは?」

「大丈夫みたい。」

「よし、入るぞ。」

なのはと守はかなり用心して家に入ろうとしていた。

なぜなら前に守が調子にのって、夜遅くまで裏山で探検をしていたら（その際、カラスの大群と戦って勝った事を伏線として書いておく）帰ってきた時に恭也からかなり厳しく叱られて、ちょっとしたトラウマになっている。

「お帰り」

終わったと守が心の中で呟きつつその声が聞こえた方を見ると恭也がいた。

「お、お兄ちゃん」

「きよ、恭也兄さん」

「こんな時間にどこにお出かけだ？」

なのはと守に少し声を低くして恭也が聞いてくる。

「あの、その、えっと、えっと」

「あー」

なのはと守が恭也の怒気に触れて声も出せないでいると

「あら可愛い〜」

急に美由紀がフェレットを見つけた。

「お、お姉ちゃん」

「美由紀姉さん!？」

なのはと守が美由紀に驚いていると

「あら、何か元気ないね。なのははこの子の事が心配で様子を見に行ったんだね。」

「あの、えっと、その」

「で、俺はなのはを追いかけていったんだよ!」

「はいはい。守も偉いね」

美由紀がなのはのフォローをだけをするので守が焦って理由を言っているが軽く流されているようだ。

「気持ちにはわからなくてもないがだからといって、内緒でというのはいただけない。」

「まあまあいいじゃない。こうして無事に戻って来てるんだし、それになのはは良い子だからもうこんな事しないもんね?」

恭也が注意を続け始めるが、美由紀が再び“なのは”のフォローを始めた。

「その…お兄ちゃん内緒で出掛けて、心配かけてごめんなさい。」

「ん」

「はい。とりあえずこれで解決」

なのはが謝って美由紀が言う。そして美由紀がなのはが持っていたフェレットを持ち上げた。

「でも可愛い動物ね。母さんがみたら可愛すぎて悶絶しちゃうんじゃない？」

「その可能性は否定できんな。それと守、お前は後で話を聞かせてもらっぞ。」

「うっ！？了解です。」

美由紀と恭也が話している間に逃げようとしていた守は恭也の一睨みで逃げるのを諦めた。

美由紀がフォローしたのはあくまでも”なのは”だけであって前科のある守を庇う気はないらしかった。

その後、ユーノを見て桃子が悶絶したり、恭也が守を道場の方へ連れて行って説教と言う名の木刀と素手の虐めがあったりしたが、とりあえずユーノを飼う（？）事に関しては許可が出た。

## 第二話(1)(後書き)

守「さあ、言い訳タイムだ。覚悟はできてるな。」

自業自得というだという事を承知で言うよ。

僕さ、受験の時に教師の進め(?)でよく知らない学校にセンター試験で受験して受かったんだ。

守「それはそれで問題があるような気がするんだが？」

問題はそこからでさ。

僕は理系何だが、高校の時のカリキュラムと時間の都合で理科が物理、化学、生物の内生物しか習ってないんだけど、とりあえずセンター試験では数学と英語と生物を使って入学したんだけど

守「何かオチが見えてきたな。」

授業まず化学から勉強する事になったんだけど、最初のガイダンスの時先生が“基礎”から勉強するから頑張りましょう的な事言ったのにかなり基礎じゃない。

守「……………」

で今、化学に追われる日々娯楽はほとんど我慢してる。

守「……………それってもしかしてこの先も執筆遅くなるって事？」

……………「こ、これからも頑張るので見守って下さい。」

守「凶星かい!!」

## 第二話(2) (前書き)

つ、疲れた。

守「約1ヶ月ぶりの更新お前ホントに大丈夫か？」

な、成せばなる!!

守「お前が言つと何か信用ないな。」

なのは「と、とりあえず始まります!!」

守「何でいるの!？」

## 第二話(2)

朝、高町家の道場にぼろ雑巾のように倒れている守がいた。

「痛て〜理不尽だよ畜生〜。次、なのはに何かあったら無視してやる。」

等とぼやきながら守はリビングの方へ向かって行った。

「おはよう、父さん、母さん」

「おはよう守」

守がリビングにつくと何時ものように土郎と桃子が守に挨拶をしてきた。

「…………アレ？昨日の事怒らないの？」

「怒らないわよ。守はなのはの事が心配で追いかけて行ったんでしょ？」

「母さん…………」

守が桃子の言葉に少し感動していると

「それとも怒って欲しかった？」

「大丈夫です！！」

その後、放たれた桃子の目が笑って無い笑顔に守は震え上がった。

その後、なのはから念話を教わったりして、学校に向かって行った。

……………その後、学校にてアリサとすずかにユーノをあづかった事を話した際に

(嘘は言っていない、ちょっと、ちょっとと真実をぼかしているだけ)

(なのは、悪いが人はそれを嘘と言う。)

(だ、だよな)

などとくだらない事に念話を使っていた。

(ジュエルシードは僕らの世界の古代遺産なんだ……………)

授業中、なのはと守はユーノからジュエルシードについて聞いていたが、

(あれ？、眠いな)

守は急な眠気に襲われていた。

(昨日の疲れがきたのかな？悪いけどなのは、お前が話聞いておい……………)

(え！？ちょっと守)

急な発言に驚きながらなのはが守の方を見ると

「ZZZ」

守はすでに寝ていた。

(えつとなのは、もしかして守は寝ちゃった？)

(うん、守は後でちょっと“お話し”しないと)

何か守本人の知らない所で守の説教が確定した。

しかしユーノは知らなかった。

このなのはの「お話し」という単語が後に危険な意味合いを持つことを、

寝た守であったが目を開けると、そこは全体がベルベット色の奇妙な部屋だった。

そして、そこにいたのは

「ようこそベルベットルームへ」

鼻がやたら長い老人だった。

「ふっふっふ、そうご心配めさるまい。

今、あなたを少し夢でお呼びしただけです。

それにしてもおひさしぶりですね。」

「俺を知っているのか!？」

茫然としている守に鼻の長い老人が守の事を知っているような素振りを見せたので守が反応した。

「ええ、知っていますとも、ですがそれはあなた自身が思い出さねばいけない事です。

自己紹介がまだでしたな、私の名はイゴールにてございます。さて今私がお呼び立てしたのは、今のあなたの現状についてでございます。」

イゴールが手をかざすと守の体から一枚のカードが出てきた。

「ほう、やはり目覚めたのはオルフェウスですか。なるほど興味深い。」

イゴールがオルフェウスの姿が描かれているカードを見ながら言った。

「あの、何の話をしているんですか？」

守が少しイゴールの姿（主に鼻）に怯えながら聞く。

「これは失礼しました。

ではあなたがお目覚めになった力についてお話ししましょう。あなたがお目覚めになった力は“ペルソナ”でございます。」

「“ペルソナ”？」

守がイゴールに聞き返す。

「さよう、ペルソナとはあなたがあなたの外側の物事と向き合った時、表に出てくる人格  
様々な困難に立ち向かっていく為の仮面の鎧と言ってもいいでしょう」

「仮面の鎧？  
何ですかそれ？」

イゴールの説明がわからなかったらしく少し投げやり気味に守は聞いた。

「ペルソナ能力とは心を制する力。  
この“世界”で貴方は様々な困難と戦う事になるでしょうが、そこから逃げるのも戦うのも貴方の自由でございます。  
さて、これ以上引き止めはしません。  
ではまた会う時までごきげんよう」

「は！？ちょっと待て爺さん！？まだ…ッ！」

守は自分の意識が急に遠のいていくように感じた。

「ちょっと待てー鼻長ジジイ!？」

「……………はあ!？」

急に起きた守の口から飛び出てきたのは謎の言葉だった。

「……………えつと守どうしたの?」

クラス全員を代表してなのはが守に聞いた。

「鼻の長いじいさんがいた。」

「……………はい?」

守からの答えは常識を逸脱してもはや意味のわからない領域にあった。

放課後、守はなのはとユーノにイゴールから聞いた事を話し、ジュエルシードについてなのはとユーノから聞いた。

(仮面の鎧ってどういう事なんだろう?)

(俺は知らないよ。てかユーノも知らない?)

(いや、守にもなのはと同じで魔法の才能はあると思うけどアレを使っている時は魔力は感じなかったからたぶん僕らの魔法とは違うと思う。)

(そっかぁー。まあこのオルフェウスを使えばジュエルシード集めも手伝えるみたいだから別にいいかな。)

(その事だけど二人供別に手伝わなくても、僕の魔力が戻るまででいいし。)

ユーノが守となのはをジュエルシード集めから遠ざけようとするが、

(ストップそれはもう聞きあきたよユーノ君。)

(なのは、でも昨日みたいに危険な目に合うかもしれないだよ。)

(大丈夫だつて俺だっているし、一人でやるより三人の方が効率がいいでしょ?)

(困っている人がいて、助けてあげられる力が自分にあるならその時は迷っちゃいけないって、これ家のお父さんの教え。)

(……………うん、ありがとう。)

ユーノがようやく折れた瞬間、ジュエルシードの気配がした。

「……………意外と近そつだ。

行こうなのは!!」

「うん守!!」

(僕も行くから後で合流しよう!!)

そして、守となのははジュエルシードの気配があつた場所に向かつて行った。

そこは神社だつた。

そしてそこにいたのは犬のような形をしたジュエルシードの暴走体だつた。

「現住生物を取り込んでいる。」

実体がある分手強くなってる二人供気をつけて!!」

ユーノが守となのはに注意を呼び掛ける。

「大丈夫……たぶん」

なのはが身構えながら言う。

「なのは、たぶんとか言うな何か自信無くなるから。」  
守が溜息をつきながら言った。

「なのは! レイジングハートの起動を!!」

「えっ!? 起動って何だっけ?」

「あ、そう言えばどうやってオルフェウスを呼ぶんだろう?」

「え?」

ユーノがなのはと守の発言を聞いて一瞬固まった。

「GURAAAAAaaaaaa!!」

そんな二人と一匹(?)の反応をよそにジュエルシードの暴走体は守となのは目掛けて向かって来ていた。

「我は使命をからの起動パスワードを」

ユーノがレイジングハートの起動の仕方を教えようとするが

「間に合うかバカヤロー!？」

守の言う通りもうジュエルシードの暴走体との距離はかなり近づいていた。

そしてぶつかる瞬間、再び“ソレ”は現れた。

守の体から浮き出るように再びオルフェウスが現れて、ジュエルシードの暴走体の体当りを受け止めた。

「よし!―そのまま弾き飛ばせ!―」

守のその言葉と共にオルフェウスがジュエルシードの暴走体を弾き飛ばした。

「なのはこれで時間を稼げるさっさと起動させる!―」

「うっ、私お姉ちゃんなのに。」

なのはが言つと

「はあ!?!なのはは何言ってるんだ!―この状況じゃあ完全に俺の方が先に戦ってるから俺の方がお兄ちゃんだな。」

守がやや勝ち誇ったように言う。

「え、えっと二人供そんな場合じゃあ」

ユーノがなのはと守を静めようとするが

「ユーノ(君)は黙って(て)!?!」「」

「……………はい」

二人の怒りにあっさり負けた。

しかしそんな二人をジュエルシードの暴走体は待つてくれる筈もなく、

「GURAAAAAaaaaaa!」

無防備なのは向かって飛び出して行った。

「え?」

「しまった!」

言い争いをしていた二人の反応は少し遅れてしまった。

「キャ!」

そしてジュエルシードの暴走体がぶつかる瞬間、レイジングハートが光だした。

「レイジングハート?」

「Stand by ready」

レイジングハートがそう言うと、レイジングハートが宝石の状態から杖に変わった。

「なのは！防護服を！！」

レイジングハートが杖に変わって安心しているなのはにユーノが注意をした。

「え、ええ！？」

しかし昨日、魔法に触れたばかりのなのはには何の事を言っているかわからなかった。

「barrier jacket」

レイジングハートなのはにバリアジャケットを装備した。

この時、服変わる意味があるのかと不信そうに守が呟いたのをユーノは聞いていた。

そうしてレイジングハートとバリアジャケットを起動したなのはに向かってジュエルシードの暴走体はぶつかつた。

そしてその衝撃でできた砂煙によってなのはとジュエルシードの化身は見えなくなった。

「「なのは！！」」

守とユーノなのは無事を思いながら呼ぶと、

「にやははは、思ったより痛くないかも」

もといた位置からかなり吹き飛ばされたものの、怪我一つなかった。

「GURAAAAAaaaaaa！！」

なのはを倒せなかった事が気にさわったのか再び、なのはに襲いかかる。

「キヤ!？」

なのはが悲鳴と共にレイジングハートを前にかざしジュエルシードの化身はオルフェウスの火球で致命的なダメージを受けたらしく、そのまま倒れた。

「す、すごいね守」

「俺は封印出来ないから、早く封印しろなのは。」

(あの衝撃を完全に防いでしまうのはも凄いけど、あの守のあのペルソナとは何なんだろ? 魔力は感じないのにしっかりした実体を持っていてジュエルシードを倒してしまうだけの力を持っている。守 君は一体何者なんだ?)

ユーノがなのはと守の二人を見ながら思っていた。

「う、うん。」

レイジングハートお願いね。」

「Sealing mode set up」

レイジングハートから翼が現れてジュエルシードの封印の準備が整う。

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアルXVII封印!！」

「Sealing」

そして光の帯がジュエルシードの暴走体を包み込み封印した。

「これで一件落着だな。」

なのはがレイジングハートにジュエルシードを入れている様子を見ながら言った。

「こんな感じでいいのかな？」

「うん、これ以上はないってくらい」

なのはがユーノに聞いてユーノがなのはを誉めるが

「過程が果てしなく、大変だったがな。」

守がやや呆れたように言った。

「にはははは、それは今後注意しようよ」

なのはがフォローをする

「まあお腹すいたし、とりあえず家に帰えろ。」

「そっだね」

後、守。「」

「ん？」

帰ろうとすると守をなのはが呼び止める。

「ご飯食べたら“お話し”したい事があるからね」

どこか桃子と同じ威圧感を漂わせながらなのはが言った。

「わ、わかった。」

何となくなのはと桃子が血が繋がっている事をはっきりと自覚した  
守だった。

## 第二話(2)(後書き)

なんだろう？

書くのは楽しいのに駄文しか書けなくてしかも大学の勉強で時間が取れないでいる。

何か目から涙が出てくるんだけど

守「自業自得だな」

冷たいなお前

守「事実だ」

否定出来ないのが悲しい。

とりあえず次回は早く更新できるようにがんばるので、皆様感想とか書いてくれたらありがたいです。

オマケ

夕食後………高町家道場、そこは処刑場になっていた。

「何で話しも聞かずに寝ちゃったの？」

そこにいたのはなのはと、

「いや、呼んだのはイゴールとか言うジイサンだから俺は関係ない

し」

正座をしている守だった

「人の話はちゃんと最後までこつよ。

私何か間違った事言っている?」

なのはが守を見下ろして言う。

「いいえ、言っておりません。」

守が冷や汗をかきながら言う。

「守、少し頭」

「はいそこまで。」

「(お)母さん」「

なのはが守に制裁を与えようとした瞬間、桃子が二人の間に入った。

「なのはも守が悪い事をしたのならしからなきゃいけないけど、わざわざ道場を使ったらお父さん達に迷惑でしょ?」

「うん、お母さん」

なのはが素直に桃子に謝るが守は何か壮大な嫌な予感に襲われていた。

「だから二人供、オハナシ シマシヨ?」

「「は、はい!?!」」

後に守は語る。

「俺はたぶん一生母さんに勝てない。」

### 第三話 (前書き)

本当に待たせてしまってすみませんでした!!

ちよつと一気に書いてしまったのでミスがあるかもしれませんが、楽しんでくれるとありがたいです。

## 第三話

夜、そこはどこか古い建物だった。

そんな建物の前に、二人の子供と一匹のフェレットがいた。

「なのは!!」

急にフェレットが二人の子供の内の少女の方の名前を呼ぶ。

「うん!!」

リリカルマジカル、ジュエルシードシリアルXX封印!!」

少女の言葉と共に少女の持っている杖の形が翼のある形態へと変  
し、光の帯が何かを包み込んだ。

そして、青いひし形の宝石が現れた。

「はい、一件落着。」

少年が言った。

その少年の名前は高町守

「そうだね。」

そう答えた少女の名前は高町なのは

「二人ともホントにありがとう。」

そんな二人を労う一匹(?)のフェレット、名前をユーノ・スクラ  
イヤーという。

この二人と一匹はユーノの世界の古代遺産であるジュエルシードを集めていた。

その帰り

「はあはあはあ」

なのははレイジングハートを杖の状態で引きずりながら歩いていた。

「なのは、大丈夫？」

ユーノが心配して声をかけるが、

「大丈夫なんだけど、ちょっと疲れた。」

その言葉とともになのはが倒れそうになるが、

「はい、キャッチ」

守がなのはを掴んだそして守がなのはをおぶった。

「守、大丈夫なの？」

ユーノが心配する理由は体力的に守が余裕がありそうだが、守の方が若干なのはより身長が小さい（なのはが姉だと主張する理由の一つである）ので支えきれないのではと思っている。

「何を言っている。」

俺はなのはの兄だから問題ない。」

そう言いながらも守の顔は辛そうなので意地を張っているのはまるわかりだが、

「……………分かった。」

このどちらが上かという事に関しては触れてはいけないと学んだユ一ノはスルーすることにした。

しかし、家に二人が帰った後、守が力尽きて廊下に倒れている様子をユ一ノは見ていた。

翌日の朝、なのはが疲れてしまった事と予定があるという理由でジュエルシード集めは休憩という事になった。

なのははアリサとすずかと一緒にサッカーの試合を応援しに、守は家でゆっくり休む予定だったが、

「何で俺はここにいるんだ？」

「だって折角の日曜日に家にいるなんてもったいないよ。」

守はなのはに拉致されて、サッカーの試合を応援することになってしまっていた。

「なのはの言う通りよ。」

あんだ、こんな天気がいいのに家にいる方がおかしいわ!!」

「ハイハイ、でもだからってサッカーの応援に連れていく必要性は

ないと思っけど?」

アリサの指摘を守は軽く流しながら質問する。

「なのはちゃんが来るなら守君も来ると思ってた?」

「なにその、間もなく守もつきます、みたいな感じ。俺はなのはのオマケじゃないぞ。」

すずかの根拠を守が否定するが、

「何言ってるのあんた、あんたとなのはってそんな感じじゃない?」

アリサがすずかに同調した。

「アリサ、お前は何を根拠にそんな事を言っただ?」

守が少し呆然としながらアリサに聞き返す。

「根拠ってあんた自覚してなかったのね?」

「何を?」

守がやや不安そうに聞く。

「あんた最初の頃、右も左もわからないからとりあえずフォローしてくる、なのはにくっついて行動していたじゃない。」

「……………あ〜」

守にも思い当たる所があるらしい。

「今でもそんな感じで守はなのはにくつついてるって思っていたけど。」

「俺ってそういう風に見えてたんだ。」

守がかなりへこんでいると

「だから、守は私の弟なの!!」

なのはがかなり強く言いながら会話に入ってきた。

「いや、それ関係なくない!!」

守が反射的に反応する。

「関係なくないの!!」  
「だって守は…」

「はい。二人供そこまでだよ。」

「(お)父さん」

やや修羅場となりかけたサッカー場の空気を士郎が納めた。

「二人供これから試合だから応援頼むよ。」

「うん!!」

「え！？俺も!？」

「なのはと一緒に来たんだから守も応援するんだろう?」

なんだかんだでなのはプラス守論は高町家にも浸透しているようだった。

結局、守も含めて、なのはとアリサとすずかで応援をする事になったが、守はどちらかというボンヤリと見ているという感じだった。

(守はスポーツは嫌いなの?)

ボンヤリと見ている守を暇と見たのかなのはと念話で話していたユニノが念話で守に話しかけた。

(別に嫌いじゃあないんだけど、どこが面白いかわからないって言う感じが近いかな?)

(守って運動神経良いのに、不思議だよね。)

そこになのはも混ざり出した。

(でも守ってジュエルシードを集めている時って楽しそうにしてない?)

(……そう見える?)

(何となくだけ)

ユーノの指摘に守が黙り込んだ。

確かに守自身が感じていた事である。

ペルソナを使う時に感じる万能感それが守の精神を刺激する。

その感覚がとても心地よいと思う反面、“力”に引き込まれてしま  
いそうになるのを怖がる自分もいる。

そしてだんだん、どちらが本当の自分か分からなくなりそうになる。

（守！守！？）

（何、ユーノ？）

そんな風に思考の泥沼に浸かっていた守をユーノが呼ぶ。

（試合もう終わったけど大丈夫？）

そのユーノの言葉で始めて守は試合が終わった事に気づいた。

（守、本当に大丈夫？）

（大丈夫、少し考え事をしていただけだ。）

ユーノの言葉を軽く流してから守は士郎の所に向かった。

「守、お前も翠屋に行かないか？」

「うっん、父さん。」

俺は散歩に行ってくるよ。」

と守は士郎の誘いを断った。

「そうか……夜までには帰ってくるんだぞ」

どこか士郎が守の事を心配そうに見ながら言った。

士郎達と別れた守は、一人で歩いていた。

（分かってはいる。

確かにジュエルシード集めをしている時、楽しいと感じる。）

守はユーノに指摘された事を悩んでいた。

（それが良くないっていうのも分かってはいるんだけど…）

守が考えていると、ふと守の目に道の溝に引っ掛かって動けなくなっている車椅子の少女が映った。

普段の守ならどうでもいいと流すだろうが、なのは達と同年ぐらいの子だったので何となく無視したらなのはから「お話し」「される予感がしたため、助ける事にした。

「うーん、やっぱ動かへん」

「あの、手伝いましょうか？」

守が車椅子の少女に話かける。

「ええんか!？」

少女が守の言葉に反応する。

「別にいいよ。」

守がその言葉と共に車椅子を溝から外した。

「おおき」。

「別にお礼をされるような事じゃないから。」

少女の言葉を守が流すと

「アカンで、そういう言い方。」

そう言えば名前はなんて言うん？うちは…」

少女が名乗ろうとした瞬間地震がおきた。

「ひゃあ!?!」

少女が悲鳴を上げていたが、守は別の事に驚いていた。

(ジュエルシードが発動した!?)

何時もジュエルシードの暴走体が何かしらの災害をおこすのはよくある事だったが地震が起きたのは始めてだった。

「またね。」

「え?...あ、ちよう待って!?!」

守がジュエルシードの気配の方向に向かって行く事を優先して少女

の静止を無視して向かっていった。

「行ってしまった。

………また会えへんかな？」

少女は呟く。

この半年後彼らは会うことになるのだが、それはまだ先の話である。

（何なんだ！？

今回のジュエルシードは！？）

守はジュエルシードの気配がする方向に向かって行ってきながら町に生えている巨大な木の根を見ながら考えていた。

（ジュエルシードって願いを叶える石だよな。

こんな大きな木が現れるって何をどう願ったらこうなるんだよ！？）

とか考えていたが、

「っ！？」

守が通ろうとしていた道が巨大な根でおおわれていた。

（困ったな、いくらオルフェウスでもこんな大きな木は焼き消すことは出来ないし、かといって遠回りをするのも無理そうだし、どうしようかな？）

と守が考えていると、守の意思と無関係にオルフェウスが現れて守の身体が浮かび上がった。

「はっ、えっ、えー!？」

守が驚いている間にも上昇し、飛んでいるという領域に入った。

「と、飛んじやったよ。

けど、まあとりあえず問題解決だからジュエルシードを見つけなきゃな。」

そう守が考えていると、一つのビルからさくら色の砲撃が見えた。

「あれって……なのはの魔力光だよな？」

守が見ている中、その砲撃は木の一部を撃った。

それと同時に巨大な木が消えていった。

「うわ、俺今回何もしてないし。

せっかく飛べるって事がわかったから何かしたかったな。」

守はそんな事を愚痴りながらさくら色の砲撃が放たれた所へと向かっていった。

守がビルにつくとなのはが膝を抱えてしゃがんでいた。

その表情はどことなく陰があった。

「なのは、あのさくら色の砲撃ってお前？」

守が暗いのはに向かって少し軽い口調で話しかけるが、

「うん」

帰ってきた返事は無機質な声だった。

（ユーノ、何があった。）

（分からない。でもジュエルシードを封印してからこんな感じ）

守がユーノに聞くが、なのはが落ち込んでいる理由は分からなかった。

「ねえ守、どうして守はジュエルシード集めをしているの？」

なのはが急に守に聞く。

しかしその声はかなり冷たいものだった。

「それは……」

「楽しいから？」

守がなのはの威圧感を振り払うように言う前になのはがたたみかけるように言う。

「ちょっと待てよ。」

「だいたい何でそんなに暗いんだよ。」

守が痛い所を言われたからか少し声に苛立ちが入っていた。

「……………私、気づいていたんだ。」

あの子が持っているって、でも気のせいだって思って……」

「で、結果町に迷惑がかかったからいじけていますと……」

なのはが言う前に守が少し嫌みを込めて言う。

なのはが守を睨みつけるが守はあまり気にせず言い続ける。

「終わってしまった事を後悔する暇があったら、同じ事をどうやったら防げるかを考える。」

その方がぐじぐじしているよりよっぽどマシだ。」

守が言うとなのはの目に力が戻ってきた。

「で、どうするのなのは？」

守が少し挑発するように言うと、なのはの目に火がついていた。

（あちゃー、ちょっと焚きつけ過ぎた。）

守がぼんやりと思った。

「ユーノ君……」

なのはがさつきとは違った強い覇気を出しながら言う。

「は、はい……」

ユーノがなのはの覇気に押されながら答える。

「これからはユーノ君の手伝いじゃなくて、私の全力で私の意志でシユエルシード集めをするから……」

もう二度とこんな事にならないように私が頑張るから!」

なのはが強い口調で言う。

(あーあ、エンジンついちゃったな。)

(えっとなのははどうしちゃったの?)

守が呆れたようにユーノに念話で伝えようとユーノから質問が来る。

(ん〜なのはって物事を色々と深く考えて動けなくなるタイプなんだけど、逆に決めてしまえばもう一直線に進んで行っちゃうだね。………なんて言うか暴走ロケット?)

(な、なるほど)

守の説明を受けてユーノは納得したらしかった。

(何て言うか、ジュエルシード集めが楽しいとか悩んでいた自分がアホらしいな。

ただなのはって妙に他人のために自分の事を気にしない癖があるからな、俺がフォローしないとな)

守はひっそりと思った。

### 第三話（後書き）

テスト終わりに一気に書くってかなりいいストレス発散だったけど長時間、頭をフル回転させてたから何かぐだつとした疲労感が……

守

「……………ドンマイ」

それ何か励ましになってないし、てか何か書き方忘れたかも（感覚的に）どうしようこの先

守

「てかオルフェウスで飛ぶとかどんだけだよ!？」

叫ばないで頭が痛くなるから、いいじゃんペルソナトリニティソウルでは飛んでるし、それに飛ばないとこの先いろいろと辛いし、むしろ問題は何か書き方が分からなくなってるっぽいという事だ。

守

「駄目人間め」

辰巳の方角の愚者に9999ダメージ

守

「弱っ!？」

どんだけ弱っているんだよお前は!？  
ん?カンペ。なににない?

……………今は死んでますが、頑張って書くので感想とかくれると嬉しいです。

自分で言えよ。

え〜とまあ次回には復活すると思いますのでよろしくお願いします。

┌

閑話 1 恐怖のお留守番なの(前書き)

最近何か調子が悪いので軽く(?)遊び心で閑話を書いてみます。

## 閑話 1 恐怖のお留守番なの

今日、守となのはは家で留守番をしていた。

彼らの親である土郎と桃子はペアの日帰り旅行券を手に入れたためそれに行き、恭也と美由紀はそれぞれサークルや部活の予定で家にいなかった。

かつての高町家だったらなのはを一人でお留守番させる事に強い抵抗を感じていたが今は守がいるので安心して任せる事ができた。

そんな家の中、守となのはは一匹のフェレットと共に話し合いをするという端から見ればシュールな光景を作り出していた。

「それにしてもなのはの魔法ってスゴいな。

あの砲撃も威力スゴイし」

「そう？

でも私的には空を飛んだりする守の方が羨ましかったりするんだけど、」

「僕にして見れば二人共スゴイと思うよ、なのはは魔導師としての才能がスゴイし、守は能力自体はよくわからないけどジュエルシードの暴走体と普通に戦えるだけスゴイよ。」

守となのはとユーノ・スクライヤと名乗るフェレットは互いの能力について話し合っていた。

すると急にカサカサっという音が聞こえた。

「ん？」

その音にまず気がついたのは守だった。

「どっしたの守?」

守の反応が気になったのかユーノが聞く。

「いや、今何かがそこにいたような?」

守がそう言いながら音がした所を見ると

カサカサ…

「うっ!?!」

そこにいたのはいわゆる虫である。

長い触覚に黒く平べったい身体を持ち、約三億年前の古生代石炭紀の地球に出現し、熱帯雨林を中心に世界中に分布するといわれる。

有名な害虫…名前をゴキブリという。

「にゃああああ!?!」

なのはいきなり現れたゴキブリに悲鳴をあげるしかなかった。

「Stand by ready」

しかし、なのはの恐怖心に反応したのか急にレイジングハートが起動する。

そしてなのはレイジングハートを構えた。

「ふふふふふ」

もう逃げるだけの私じゃないんだよ。」

( (なのはが壊れた!?) )

なのはの急な変化にユーノと守は恐怖を感じていると、

「守、ユーノ君今すぐアレを見つけて

見つけたらすぐに私に知らせね。

ワカッタ?」

なのはから文句を一切言わせないという威圧感を放ちながら指示を出した。

「わ、わかりました。」

そのなのはの指示に今の守とユーノは従うしかなかった。

それからゴキブリを見つけては逃げられてを3回ほど繰り返し続けた。ちなみなのはが魔法を使ってゴキブリ退治をしようとするのでユーノがすでに少ない魔力を使って封鎖空間を作っている。

(ユーノ、大丈夫か?)

守がユーノに結界を維持できる時間をきくと

(……………ま、守できるなら後10分以内に見つけてほしいかも)

かなり弱々しい声でユーノが返した。

(ユーノ、その…頑張つて)

守がユーノにその言葉しか送れなかった。

「いたよ！守！！」

(ラストチャンスかな？)

なのはの発見の報告を受けて守は思った。

守がつくと、なのはが砲撃でゴキブリを撃つタイミングを狙っていた。

「守！“アレ”を追い詰めて！！」

なのはが守に指示を出す。

「名前も口にしたくないのかお前は！？」

なのはの発言に守がツツコムがオルフェウスを呼び出して、ゴキブリを追い詰め始める。

オルフェウスと守の動きによって徐々にゴキブリの動きが制限され始めた。

そして、

(今だ！！)

ゴキブリの動きが鈍くなった瞬間を守は見逃さなかった。

「なのは！ヤツは3時方向の1m先！！」

「うん！レイジングハート！！」

守がなのはにゴキブリの位置を知らせる。

「all light shooting mode set u  
p」

なのはの指示に従いレイジングハートが射撃に特化した音叉型の形態に変わる。

「デイベイーン」

そのままなのはが砲撃を放とうとしたゴキブリは、己の不利を悟ったらしく最後の抵抗に出た。  
艶やかに光る羽を広げてゴキブリは守となのはに向かって飛んできた。

「うわああああ！？」

「にやああああ！？」

守となのはは悲鳴を上げパニックに陥ったなのはは、

「バスタアアアアア！！」

涙混じりの表情でデイベインバスターを“全力”で撃った。  
そのデイベインバスターは“たまたま”ゴキブリに命中し、ゴキブリを消し去り、守に向かっていった。

「ええええええ！？」

守が驚きつつオルフェウスを呼び戻した瞬間オルフェウスにディバインバスターが命中し爆発音が響いたがユーノの結界によってその音は近所には聞こえなかった。

「お、終わった。」

その言葉と共にユーノは結界を解き、倒れた。

ユーノが結界を解いてから数時間後

「なのは、守、ただいま。」

美由紀が帰って来た。

「アレ？二人共いないの？」

しかし、本来帰ってくるはずの返事が帰ってこない事に疑問を持ちながら美由紀がリビングにつくと、

「……………な、何コレ？」

美由紀は絶句した。

リビングは物が散乱し、守となのはが倒れていたからである。

「なのは、守、二人共起きて！」

とりあえず美由紀は守となのはの一人から事情を聞いた方がいいと  
考え二人を起こそうとした。

「ん〜？美由紀姉さん？」

守が起きた。

「守、何があったの？」

美由紀が聞くと、

「ゴキブリ退治」

守がそう言つと再び寝た。

「……………お疲れさま守、なのは  
けど、どうやったらかこまで物が荒れちゃうの？」

美由紀は守となのはに同情しつつ派手に荒れてしまっているリビン  
グを一人で片付け始めた。

結果報告

高町 守

ディバインバスターの命中によりノックアウト

高町 なのは

パニックの中撃つたディバインバスターに全魔力を注ぎ込み、魔力  
エンプティ

ユーノ・スクライア

無理をした封鎖空間の生成より魔力エンブテイ

その後、二人と一匹（？）が口を揃えて言った事は

「『ゴキブリ何でも二度と見たくない』」

果たして、その願いは叶うか？

それは誰にもわからない。

閑話1 恐怖のお留守番なの(後書き)

いや〜やっぱりゴキブリは人類の敵だよね〜

守

「どついう流れでこんな話つくつたんだよ!!」

まあまあ、怒らない怒らない。

いや何か文章が思い付かないからアスラクラインを気分从一开始から読んでいたんだけど、9巻見て“これだ!!”とやってつい書いてやった(苦笑い)

守

「おい!?!」

いや〜これが見事にツボでさ、学校編を頭の中でイメージ中

守

「横道それるのもいいけどまず本編書こうな?」

え〜

守

「なのはに頼んで“お話し”してもらつぞ」

全力で本編を書かせてもらいます!!

守

「それでよし」

## 第四話

今日は、なのはがずかの家と呼ばれて、恭也がその付き添いという理由（言い訳）でずかの姉の月村 忍に会いに行こうとしていた。

そして守は……………

「なのはー、守ー準備はできたか？」

恭也がなのはと“守”に聞く、

「もうちょっとー」

「やはりこうなるのか。」

すぐに答えるなのはと少し諦めた感じで呟いた守がいた。

この前のサッカーの試合の時点で気づいていたがなのはプラス守論が親しい人間の中では当たり前前の事に成りつつあるという事である。

(…守、そのドンマイ…)

ユーノが念話で励ますが、

(悪いユーノ、その言い方は遠回しに俺に諦めろという風に言っているようにしか聞こえない)

逆に守に止めをさすことになっていた。

その後、守となのはと恭也は月村家へと向かって行った。

月村家に着いた守達を最初に迎えたのは

「恭也様、守様、なのはお嬢様いらっしやいませ。」

月村家のメイド長のノエルである。

なのは曰く、

“無口な人だけど、美人でかつこいい人”らしい

「どうぞこちらへ」

そして、恭也達はノエルにすずか達がいる部屋に案内された。

「恭也さん、守くん、なのはちゃん、いらっしやい」

恭也達が案内された部屋にはすずかとアリサとすずかの姉である忍そしてメイドのファリンがいた。

ちなみにこのファリンというメイドはすずかの専属メイドでなのは曰く、

“明るくて優しいお姉さん”らしい

「恭也、いらっしやい」

「ああ」

恭也に挨拶をした女性はすずかの姉の忍で恭也とは高校の頃からのクラスメイトでも仲が良い。

「お茶をご用意いたしましたしょう。  
何がよろしいですか？」

とりあえず挨拶が終わった所でノエルが恭也達に聞く。

「任せるよ。」

と恭也が答える。

「守様となのはお嬢様は？」

「私もお任せします。」

「俺もお任せします。」

恭也と同じようになのはと守が答える。

「かしこまりました、ファリン。」

恭也達の答えを聞いてノエルはファリンを呼んだ。

「はい、了解ですお姉さま。」

すぐにファリンが敬礼と共にノエルの元に向かう。

「じゃあ私と恭也は部屋にいるから」

忍が恭也の手を取りながら言う。

「はい、そちらにお持ちします。」

ノエルが答え、フアリンと共にお辞儀をしてからお茶の準備をするために部屋から離れて行った。

なのはと守が猫をどけながら椅子に座った。

「相変わらず、すずかのお姉ちゃんとなのはのお兄ちゃんはラブラブだよね〜」

なのはと守が座ってからアリサがからかうように言う。

「うん。」

お姉ちゃん恭也さんと知り合ってからずっと幸せそうだよ。」

すずかが恭也と忍を見ながら嬉しそうに言った。

「家のお兄ちゃんはどうかな？」

でも昔に比べてなんだか優しくなったかな。

よく笑うようになったかも」

なのはも恭也と忍の方を見ながら言った。

「守、アンタから見てどうなのよ!？」

今までの会話で関係なさそうに守がしていたのでアリサが守に聞く。

「特に無い、普通？」

少し投げやり気味な返事がきた。

「普通ってアンタ!？」

他に何か言うこと無いの!？」

守の言い方にアリサがキレると

「いや、別に忍さんと仲良くなる前の恭也兄さんの事は知らないの  
に何か言えといわれてもねえ」

と守から説明があつたがアリサはあまり納得しなかつた。

「そついつ事じゃなくてアンタは興味がわかないの!？」

アリサが守に向かって叫ぶ。

「何に?」

守がアリサの質問の意味が分からなかつたらしく聞き返すと

「恋愛よ!？」

言っているアリサ自身が少し恥ずかしいのか頬を朱に染めてに叫ぶ  
が、守の返事は、

「どつでもいい」

かなり適当な返事だつた。

「何だよ!？」

あんなラブラブな恭也さんと忍さんを見てて気にならないの!？」

守の返事に今度は怒りながらアリサが言う

「いや、別に恭也兄さんや忍さんが恋仲なのはいいのは良い事だとは思っけど別にそれは俺とは関係ないじゃん。」

守が当然の事を言うように言う。

「……アンタがそういう事に興味がないという事を忘れていたアタシが馬鹿だったわ。」

アリスが呆れたように守に言うが守はたいして気にしてはいなかった。

(なのはこれはどういう事?)

ユーノがなのはのリュックから出ながら守の反応についてなのはに念話で聞いた。

ちなみに今までのやり取りを聞いて頬を少し赤くしていた。

(え、えつとね)

なのはも少し頬を赤くしながら答えた。

(守って昔から恋愛に全然興味がなくて誰かが付き合ってるとか聞いてもどうでもいいって流しちゃうんだよね。)

(な、なるほど)

ユーノはなのはの説明で納得したらしくそれ以上は追及しなかった。

「そ、そう言えば今日は誘ってくれてありがとうね。」

守によって気まずくなってしまうた空気を変えるためになのはがと  
すずかに話かけた。

「こつちこそ来てくれてありがとう。」

すずかがなのはの意図を察しすぐに答える。

「今日は二人共大丈夫そうね。」

アリサがなのはと守の様子を見て言う。

「なのはちゃんと守君最近元気なさそうだったから、もし何か心配  
事があるなら話してくれないかなって二人で話してたんだけど」

すずかの言葉はこの前のジュエルシードの回収で失敗してからのな  
のはの事をさしているのだろう。

「すずかちゃん、アリサちゃん」

なのははすずかの言葉に感動していたが

(……………いつかバレそうで怖いなあ。)

と守は別の事を考えていたりする、

「キュツ、キュ〜!？」

急にユーノの悲鳴が聞こえた。

そして、全員がユーノの悲鳴が聞こえた所をみるとユーノが一匹の猫から逃げていた。

「ユーノ君!？」

なのはがユーノの名前を呼び

「アイン、ダメだよ」

さすがアインと言う名前の子猫に静止を命じるがアインは聞かずにユーノを追う。

「はい、お待たせしましたイチゴミルクティーとクリームチーズクッキーです。」

まるで狙ったかのようなタイミングでファリンがお茶とクッキーを持ってきた。そしてやってきたファリンの足元でユーノとアインは鬼ごっこを続ける。

そして2匹を蹴ってしまったようにファリンはよけていたが自分バランスを崩してしまった、そしてそのまま倒れてしまいそうになったが

「ファリン危ない!!」

とっさに椅子から立っていたなのはとさすがファリンを支えようとし、守はトレイから落ちそうになったティーカップを取った瞬間、ポットが守の顔に命中して派手な音をたてた  
そしてその音に驚いてアインが飛び出していった。

「……………取り合えずセーフかな? 守大丈夫?」

トレイをすずかと一緒に支えているなのはが守に聞いた。

「……………ティーカップとポット“は”一応無事だ。」

目に心なしか涙を浮かべ顔を真つ赤にしながら守が答えた。確かに守が言った通りティーカップは守の手にありポットも顔に命中した時に少しこぼれたもののすぐに守が両肘で挟んでキャッチしたため無事ではあるがなのはが聞きたいのはそういう意味ではない。

「守、顔とか……………」

「はわわわー!?!」

すずかちゃん、なのはちゃん、守君、ごめんなさい。」

なのはが聞く前にファリンが目の回転が治ったようですぐに謝ったためなのはが聞く機会を逃したが守の表情は明らかに痛かったと語っていた。

その後なのは達は外でお茶をする事になり、外ですずかが飼っている猫について話していたが、  
ジュエルシードの気配を感じた。

(なのは、守)

(うん、すぐ近くだ。)

(何でこんな時にまあ近くにあるだけまだいいのかな?)

ユーノとなのはと守がとっさに念話をする。

(どじする!?)

ユーノがなのはに聞くが、

(えつと、えつと)

なのはは答えられずにいた。

いくらアリサとすずかでもこの状態で席を離れるのは余りにも不自然でしかない。

(…そうだ!!)

困っているなのはを見てユーノが何か思い付いたのか、なのはの膝から飛び出していった。

「ユーノ君？」

なのはがユーノの意図が分からなかったが

(なるほど、ユーノナイスアイデア!!)

守からの念話でユーノの意図に気づいた。

「あらら、ユーノどうかしたの？」

急にユーノがどこかにいく様子を見ていたのかアリサが聞く。

「うん、何か見つけたのかもちょっと探してくるね。」

なのはがアリサに答える。

「一緒に行こうか？」

さすがが不安そうに提案する。

「大丈夫すぐ戻ってくるから待っててね。」

なのはがさすがの提案を断る。

「飼い主の方がユーノも落ち着くと思うから俺も行こう。」

守がそう言ってなのはと一緒に向かっていった。

そして、そのジュエルシードが発動を守達が感知したと同時にユーノが結界を張った。

そして、ジュエルシードの反応が強くなった所を見ると……

「にゃおおん」

約4メートル程の大きさの先程の子猫(?)がいた。

「あ、あれは？」

「……………猫じゃね？」

なのはの呆然とした言葉に守がかなり投げやり気味に答える。

「た、たぶんあの猫の大きくなりたいて思いが正しく叶えられたんじゃないかな？」

ユーノが少し唾然としつつも真面目に答える。

「……ユーノ、そこまで真面目に言わないでくれ。何かこう虚しくなってくるから」

守がどこか達観したような雰囲気と言った。

「そっかあ」

なのはも疲れたように呟く。

「だけどここのままじゃ危険だから元に戻さないと」

ユーノが気を取り直しながら言った。

「うん、そうだね。」

流星にあのサイズだとすずかちゃんも困っちゃうだろうし。」

「いやそれ以前に食費いくらだよ?」

守となのはがそれぞれが思った事を呟く。

「襲ってくる様子は無さそうだしささつと封印を」

なのはが猫の様子を観察しながら言う。

「何この前回との激しい違い差というよりジュエルシートって単純な願いでも叶えようとするのかよ。残りもこんな感じなら楽なんだがな」

守があきれながら呟く。

「じゃあレイジングハート!!!」

となのはがレイジングハートを起動させようとした瞬間、守達の頭上を金色の“何か”が飛んでいった。そしてそれは巨大化した子猫に当たった。

「何なんだ一体!?!」

守の言葉と共になのはと守がそれが放たれた所を見ると少女がいた。なのはと守が少女を呆然と見てると少女が再び金色の魔力弾を放った。

「何でこう楽な日にならないのかね?」

守が自分に言うかのように呟く。

「レイジングハート!お願い!!!」

守の呟きを聞いて正気に戻ったのかなのははレイジングハートを起動した。

「Stand by ready Set up」

すぐになのはの服がBJに変わり、レイジングハートも杖へと変化する。

「さてと、俺もオルフェ……っ!?!」

守がオルフェウスを喚ぼうとした瞬間急に守はお腹の辺りを押さえ  
てしゃがみ込んだ。

「ど、どうしたの守!？」

なのはが守がしゃがみ込んだ事に気づかずに猫の方に飛んで行って  
しまったためユーノが守に声をかける。

「何か腹痛い。」

守はユーノに一言だけ答えた。

その頃、すずか達の所にファリンが来ていた。

「はわわわ!？」

すずかちゃんクッキー食べてないですか？」

ファリンがすずかに聞く。

「ファ、ファリン一体どうしたの!？」

すずかが急にやってきたファリンに驚いてると、

「すずかちゃんそのクッキーは賞味期限が1ヶ月前のもので私が間  
違って出しちゃったんです」  
「食べてないですか？」

ファリンが少し泣きながらすすかに問うと、

「アタシ達は話に夢中で食べてなかったけど、守が食べてたかも」  
アリサがファリンに答えた。

「はわわわ！？ま、守君は今どこに！？」

ファリンがアリサの答えを聞いて慌てながらアリサに聞くが、

「なのはと一緒にユーノを探しに行っちゃった。」

アリサが気まずそうにファリンに答えた。

「守君、ごめんなさい〜！！」

ファリンはその場に居ない守に謝っていた。

ファリンが謝っていた頃

守が腹痛に苦しんでいる間になのはと少女は……

「ロストロギア、ジュエルシード」

少女が感情を潰したような声で呟く

「Scythe Form Set up」

その少女の声を聞いて少女が持っている斧のようなデバイスが魔力による刃を持つ鎌へと形態を変える。

「もうしわないけどいただきます」

と少女が言うと同時になのはに向かって斬りかかった。

「Filler Fin」

レイジングハートが飛行魔法を発動させる。

そしてなのはが飛んで少女の鎌を避ける。

少女は特に動じず、鎌を下段に構える。

「Arc Saber」

少女が手にしているデバイスがそう発声すると同時に鎌の刃の部分のみが分離したのはに向かって飛んでいく。

「Protection」

なのはが飛んできた刃に驚いて、回避する機会を失ったためレイジングハートがプロテクションを発動する。

そして刃とプロテクションが衝突した衝撃で爆煙が発生する。

なのはが煙から出てくると同時に少女が斬りかかってくる。

それをなのはがレイジングハートで受け止める。

「なんで………なんで急にこんな」

なのはと少女がお互いのデバイスでつばぜり合いをしながらなのが問う。

「答えてもたぶん意味がない。」

なのはの質問に対して少女が拒絶をする。  
そしてお互いを飛ばし合う。

少女は木になのはは猫の側に着地する。

「Device Mode」

「Shooting Mode」

同時に少女の黒いデバイスは鎌のような形態から斧へと変わり、なのはのレイジングハートは射撃に特化した音叉のようなShooting Modeへと変わった。

「Divine Buster Stand by」

なのはがレイジングハートを少女に向ける。

「Photon Lancer Get Set」

そして少女がデバイスをなのはに向ける。  
お互いが撃つべきタイミングを図っていた。

(きつと、私と同年くらい綺麗な瞳と綺麗な髪)

少女の紅の瞳と金の髪

なのはそれらに見とれていたのかもしれなかった。

(だけど……………この子)

しかしなのははその少女から何かを感じていた。

その時、なのはの側にいた猫が動いた。  
それと同時になのはの意識が少女から猫に移る。  
しかしそれは少女に攻撃の機会を与える事を意味していた。

「ゴメンね。」

少女がなのはにそう謝って撃とうとすると

「だありゃああああ!!」

そんな声と共に守が少女に殴りかかっていった。

「っ!？」

守が殴りかかった事により少女がなのはを撃とうとしていた魔法は  
なのはに当たらなかった。

「ま、守遅いよ。」

というよりオルフェウスさんは?」

守が腹痛で苦しんでいた事を知らないのはが守に問うと

「オルフェウスさんって何だよソレ?

あれ俺の一部だぞ。

えっとね何か原因不明の腹痛が今でも続いていて、たぶんソレが原  
因でオルフェウスが呼べない。」

守が汗をかきながら辛そうな表情で答える。

「えっと、大丈夫なの?」

なのはが心配そうに聞くと

「たぶん無理かも」

かなりあっさりした答えが返ってきた。

「魔導師？」

少女の方は急に現れた守に驚いていた。

それもそうだろう今、少女達がいる空間は結界の中であるその空間にいるという事は目の前の少年も魔導師の素養はあると思われるが、少年は魔法を一切使わずただ少女に向かって殴りかかってきたただだからである。

「さてと、2対1だけどどうする？」

そんな悩んでいる少女に向かって守が聞く。

しかし今の状態では守達は少女に勝つ事が出来ない事を守は理解していた。

先程のなのはと少女の戦いを見ていたが、恐らく今のなのはは少女に勝つ事は出来ないと理解しており、今の守自身は腹痛とオルフェウスが呼び出せないという状態で勝てる訳が無いので取りあえず少女に勝ち目が無いという風に錯覚させようとしていた。

「……………」

少女がなのはと守を睨み付けている。

守はその目を見た時点で理解した。

(あの子はたぶん玉砕覚悟でくるな。)

「……………OK」

そのジユエルシードは君に上げるよ。」

「「「え!?!」「」」

守の急な言葉になのはとユーノと少女は驚いた。

「ま、守何で!?!」

なのはが驚いたように守に聞くと

(イヤ、今の俺らじゃ勝てないから下手に怪我して皆に変な心配させる訳にはいかないだろ?)

なのはを念話で説得した。

(……………うん。)

流石になのはも納得したらしくレイジングハートを降ろした。

「……………」

少女が呆けたように守達を見ていると

「いらないの?」

だったら貰っけど」

という守の一声で手にしていたデバイスを封印の形態に変えて封印

をした。

「……………」

そして、封印を終えるとなのは達を一瞬見てから去って行った。

「……………行っちゃったね。」

「うん。」

あの……………なのは、あ、後よろし……………」

その言葉と共に守はぶっ倒れた。

「え、ちよつと守!？」

その後、なのはが守を頑張つて引つ張り恭也達の所へ戻って行った。結果的に守は食中毒という事が判明した。

その夜、食中毒から一応回復した守となのはとユーノがなのはの部屋で話し合っていた。

「あの杖や衣装や魔法の使い方

……………たぶん、ううん間違いなく僕と同じ世界の住人だ。」

ユーノが少女を見た上で結論を出す。

「うん。」

ジュエルシード集めをしてるとあの子とまたぶつかっちゃったのかな?」

なのはがどこか寂しげに呟くと、

「間違いなくぶつかるとよ。」

守が断言した。

「何で分かるの?」

なのはが聞くと

「なんだろう……勘かな?」

守から曖昧な答えが返ってきた。

「勘って……」

なのはが少し呆れていると

「それでまた会うようなら倒せばいいそんなもんだろ?」

守が少し冷たい声で言った。

「それは……」

なのはは答える事が出来なかった。

## 第四話（後書き）

何とか本編が書けました！！

守

「待てコラ？」

何、守？

守

「何で俺の顔にポットが命中してあげくのはてに食中毒で苦しまなきゃいけないんだよ！？」

いや〜母がいろいろと書くの邪魔しててストレスが溜まっていてなんていうか八つ当たり？

守

「そんな八つ当たりは入りません！！」

いいじゃん全体的には面白くなっているし結果オーライだよ。

守

「納得できね〜。」

よくある事だ、気にするな

守

「……………もういいや

えっと、読んでくれた皆様本当にありがとうございます。」

次回もお楽しみにしてください。

## 第五話（前書き）

何か暑さで書きたい事が変わってしまったのですが、  
.....楽しんで貰えると思います。

## 第五話

黒い少女と会ってから一週間が経ち、日本は連休へ入っていた。

翠屋は年中無休ではあるが、連休などには店を店員に任せて家族旅行に出掛ける事がある。

今回はなのはの友達と月村家から忍とノエルとファリンと一緒に旅行をする事になった。

近場の温泉にゆっくり浸かって疲れを癒そうという高町家の旅行としては定番のものである。

なのはがまた変に考え込んでいたので守としてはちょうどいいタイミングであると思っていた。

そして、

ついた旅館で早速なのは達が温泉に入ろうとしていると

(守〜助けて〜!!)

急にユーノから念話でSOSが来た。

(はい?どうしたいきなり?)

守は急なユーノのSOSの意味がよくわからなくて聞き返すと

(な、なのはが僕を女湯の方に連れて行くことしてる!!)

ユーノの悲鳴に近いような声の訴え対して、

(そっか、お前オスだっけ?)

ちよっと待ってて)

守がユーノの訴えを聞いてなのはの方に向かっていきなのはからユーノを取り上げるに近い形でなのはからユーノを取っていった。

(守、ありがとう!!！)

(まあ、これに関してはどうしようもないな。)

ユーノの全力の感謝に対して、守がどこか哀愁が漂うような表情で言っていた。

(……………守もしかして)

守の表情にユーノがある予測をたてて守に聞くと

(聞くな思い出したくない過去は誰にだって在るはずだ。)

遠回しな回答が返ってきた。

(そっかあ……………)

ユーノがしんみりと言った。

ここに女子による被害を防ごうの会が生まれた。

現在、会員2名

取り合えずユーノをなのはから取り上げた。

守とユーノは……………

(へえー、これが温泉っていうんだ?)

(まあな、けど俺は残り長湯とかできないからすぐ上がったちゃうん

だけどね。」

取り合えず、2人でじっくりと温泉に入っていた。

（集団浴場とかなら入った事があるけどこつこつというのは初めてかも）

ユーノは初めて入る温泉を気に入っているようだった。

（日本の自慢できる文化の一つだからな）

と守がユーノに言う。

その後、2人はすぐに上がりなのは達と合流する為に女湯の入口の辺りで待っていた。

やがて、なのは達が出てきたので守がなのは達の所へ行く。

「あ、守」

「ほら、なのはユーノだぞ。」

守がなのはにユーノを渡す。

「ありがとう守でも別にユーノ君と守がこっちに来て良かったのに」

なのはが当たり前のように言う。

「別にいいじゃん男の子同士の話し合いだって大事だし、」

守がユーノを見ながら言う。

「ハイおちびちゃん達!!」

急に守達の後ろから女性の声が聞こえた。  
するとそこにオレンジ色の長い髪の女性がいた。

「君達ね、うちの子をアレしてくちゃっているのは？」

かなり軽い口調でなのはと守の方を見ながら話す。

「あんま賢そうでも強そうでも無いし、ただのガキンチョに見える  
んだけどね。」

そしてなのはにズイツと近づいて話す。

守が女性が強そうに見えないと言った瞬間目を細めた。

「え？」

なのはが戸惑っているっっているので守がなのはと女性の間に入って  
女性を睨み付ける。

「貴女が何を言いたいのか知りませんが、貴女の知り合いによろしく  
(次はぶっ飛ばす)

と言っと言ってください。」

守が女性に向けてしゃべりながら念話を混ぜる。  
その瞬間に女性の表情が少し変わった。

「なるほど〜キミは強そうだね。」

(けど忠告しとくよ。

子供はいい子にしてお家で遊んでなさいね。  
おいだが過ぎると、ガブツと行くわよ。)

女性が表情を緩めながら今度は守となのはとユーノに念話をしてきた。

「さーてもうひとつ風呂行ってこようっ」

女性はそのまま、女湯の方へ行っていた。

(なのは、俺はアイツをここで見張っておくから……)

「あっ守、なのは」

守がなのはに指示を出そうとした瞬間、守の後ろからとても聞き覚えのある声が聞こえた。

「お母さん!!」

そこにいたのは、桃子だった。

「父さんと旅館の外にいたんじゃないの？」

守が桃子に聞くと

「さっきまでね。」

これから私も温泉に入る所、なのは達は？」

「私達はさっきまで入っていて今は忍さんとお姉ちゃんがいるよ。」

「俺はユーノと入っていた。」

なのはと守が答える。

その瞬間、守としては桃子の目が光った気がした。

「守、ユーノとだけで寂しくなかった？」

桃子が守に聞く。

「いや、別に

まあ人があまりいなかったからかなり広々と入れたな。」

守は何か嫌な予感を感じながら慎重に答えた。

「守、そう言えば最近一緒にお風呂入ってなかったわね。」

そんな守の答えを聞いていなかったのかそれとも聞こえない振りをしたのか桃子が守に問う。

「……………ソウダネ、カアサン。」

桃子の発言を聞いた時点で守は自分の運命を悟ってしまった。

「一緒に入らない？」

桃子から（恐怖の）提案がきた。

「何で？」

俺もう入ったしいじゃん。」

守が無駄と知りつつ少し反論をする。

「ほら、やっぱり温泉って皆で入った方がいいじゃない？  
後、親子のスキンシップよ。」

「だったら別になのはでいいじゃないか？」

桃子の言葉を聞いて守が逃げ道を作ろうとするが

「なのはとは良く入るけど、守とはあまり入って無かったからいい  
でしょ？」

桃子が守の逃げ道を一つ一つ塞いでいく。

(なのは、ユーノ助けてくれ!!!)

咄嗟に守はなのはとユーノに念話で助けを求めるが、

(ん〜いいじゃない？)

お母さんと一緒に入りなよ〜)

天然で返すなのはと

(ゴメン守、僕じゃあどうしようもない。)

無力なフェレットがいた。

女子による被害を防ごうの会、設立早々に高町 桃子に敗北

「じゃあ、守一緒に入ろうか？」

桃子が凄く嬉しそうに守を女湯へと引つ張っていった。

守は本日2度目の温泉を女湯で入っていた。

(何でこんな事に?)

今の守は思考の大半をそれに使っていたが、悲しい事にそんな事を考えてもどうしようもなかった。

「あ、守背中流して上げよっか?」

後ろにいる元凶である桃子が守に問う。

「あの俺……さっき温泉入ったから……」

守が断ろうとすると

「そうじゃあ、私の背中を……」

「俺の背中を流してください。」

桃子が次の提案をする前に守が背中を流す事を頼んだ。

「別にそんなに照れなくてもいいのに。」

桃子が守に少し溜息をつきながら守の背中を洗い始める。

「ねえ、守?」

桃子が守の背中を洗いながら少し真面目な口調で守を呼ぶ。

「な何、母さん？」

急に桃子が真面目な口調になったので守が驚きを感じつつ聞き返す。

「そう言えば守が私達の所に来て、一年ぐらいたったわね？」

「？……そうだね。」

てつきりジュエルシールド集めのために最近夜遅くに出ている事について聞かれると思っていた守は桃子が何を聞こうとしているのかわからなくなつた。

「守自身はもしかしたら余り自覚してないのかも知れないけど、私達と少し距離を取ろうとしているって気づいていた？」

「……………」

桃子の質問に守は沈黙してしまう。

桃子に指摘されて守自身の行動を振り返ってみるとそういう節があった。

「守は私達の事が怖い？」

守が黙ってしまったためか桃子が勝手に話続ける。

「どづいつ事？」

流石に桃子の言葉の意味が気になったのか守が聞き返す。

「それはね。」

桃子が言いながら守の手に触れる。

「っ!？」

急に手に触れた事に驚いたのか守は桃子を“見た”

「ほら今、私の事を睨み付けたでしょ？」

桃子の言う通り守の目は“見る”というより睨み付けていた。

「そんな事は……」

守が弱々しく否定しようとするが守自身が理解していた。

“今、母さんの事を睨み付けていた”

「守は私達の事が嫌い？」

桃子が再び聞く。

「うっん」

守が言う。

それだけは自信を持てる。

「じゃあ、好き？」

「……………」

再びの桃子の質問に守は答えるのが急に怖くなり、俯いてしまった。

「いいのよ無理して答えなくても」

桃子が守の頭を撫でながら言う。

ちなみに頭を撫でた時に守がビクッと反応した事には触れなかった。

「いつか答えが出たら教えてね？」

桃子が守に優しく言う。

「……………はい。」

守は小さく答えた。

「はい。」

じゃあ、私の背中を流してね？」

話している間に守の背中を流し終えたので桃子が守に言う。

「え？」

今までの会話が続きと思っていた守はキョトンとしていた。

「さあ守、流して。」

桃子が守に言う。

「あ……………はい。」

守がそのまま桃子の言う事を聞く。

「……………」

桃子の背中を洗い始めて段々思考が戻ってきたのか、守の顔が赤くなっていた。

「あ、あの……………母さん!？」

恥ずかしさから逃げるためか守が桃子に話題を振ろうとした。

「何、守?」

そんな守の雰囲気を感じたのか桃子が聞き返す。

「えっと……………何で俺を養子にしたの?」

守がさっきまでの話を聞いて思った事を聞いた。

「ん〜そうね〜。」

守をたまたま見つけたからって言うても守は納得しないわよね。」

桃子の言葉に守が頷く。

「初めて見た時に何となくあの人と重なって見えたからかな?」

桃子が切なそうに言う。

「父さんと?」

守が聞き返す。

守が初めて高町家と会った時に覚えている事といえば怪我だらけだった自分の応急処置をしていた事だけだった。それと士郎がどう繋がるか守にはわからなかった。

「あの人は昔、仕事の最中に事故で大怪我をした事があるの。」

桃子が寂しそうと言う。

「父さんが……」

守が驚く。

「それが原因で私達は一時期とても辛い思いをしたわ。」

「……………」

守が沈黙する。

守が初めて高町家に来た時から今のような環境だったのでずっとそういう風だと思っていたからである。

「だから怪我だらけの守を見た時にほっとけなくなっちゃってね。」

桃子が少し笑いながら言う。

「あ、ありがとう。」

守がどこか照れたように言う。

「どづいたしまして。」

桃子が嬉しそうに笑いながら答える。

「じゃあ守、一緒に湯船に入るうか？」

守が背中を流し終えたので桃子が守にそう言いながら、守を湯船に連れていった。

その後、守は湯船で桃子と美由紀と忍のおもちゃにされてしまい、そして女湯からゲツソリした守ととてもニコニコしている桃子、美由紀、忍が出てきた。

その夜

子供グループが一つの部屋で寝る事になり、すずかとアリサはすぐに寝たがなのはとユーノと守は起きていた。

(守、ユーノ君起きてる？)

アリサとすずかを起こさないようになのはが守とユーノに念話を送る。

(うん)

(ああ起きてるよ。)

すぐに返事が返って来る。

(昼間のあの人、この間の子の関係者かな？)

(たぶんね。)

なのはの質問にユーノが答える。

（またこないだみたいいな事になっちゃうのかな？）

なのはが不安そうに聞く。

（たぶん。）

ユーノが辛そうに言う。

ユーノ自身自分が許せないのだろう本来自分が集めなければならぬものをなのはと守という本来無関係な人に集めさせて危険な目に合わせていることが許せなかった。

（？……守？）

守が特に何も言わないのが気になったのかなのはが守を呼ぶ。

（あ……えっと何だっけ？）

守がハツとした表情でなのはに答える。

（守は昼間のあの人どう思う？）

なのはが再び聞く。

（えっと、あの人が言っていたうちの子っていうのがあの黒い子の  
だとするとあの子はあの黒い子の仲間じゃないかな。）

守がどことなく上の空で答える。

(守?)

流石に不信に思ったのかなのはが守に近づくと

(大丈夫だから!!)

守が急に近づいたなのはに驚いたのか念話で叫ぶ。

“守は私達の事怖い?”

叫んだと同時に守は桃子に言われた事を思い出していた。

(ッ!?悪かった。)

すぐに守が謝る。

(本当に大丈夫?)

流石になのはが不安そうに聞く。

(…………微妙)

なのはの質問に対して曖昧な返事をする守。

(…………そっか)

守の言い方に何かを感じたのかなのははそれ以上は聞こうとしなかった。

(さてと、向こうもただの旅行って事はないよな?)

守が少し落ち着いたようで昼間の人について考え始めた。

(警告するためじゃないの?)

なのはが自分の考えを言う。

(どうだろう何とも言えないな。

ユーノ、発動前のジュエルシードを探す方法ってあるのか?)

(一応、広域探索魔法で大まかな場所なら探せるけど……結構体力を消費するよ。)

守がなのはの考えを聞きつつ、ユーノから情報を集める。

(そうすると、もし向こうがそれを使ってここに来たとしたらこの辺りにジュエルシードがあるかもしれないって事だよな。)

ユーノから聞いた情報を元に守が一つの仮説をたてる。

(だったら大変だよ!!)

早くジュエルシードを探さなきゃ!!)

なのはが慌てて起きる素振りを見せるが、

(いや、あまり無理に探すのは効率が悪いから、何時ものように発動した時に行った方がいい。)

守が落ち着いていう。

(でも、それじゃあたぶんあの子達が先に封印しちゃつかもよ。  
なのはが守の言う事に反論するが、

(別に先に封印されたとしても、その時は上手く行けば落ち着いて話をする事も出来る。  
だから取り合えずもう落ち着いて寝よう?)

守がなのはの反論を若干流すように言いながら布団にくるまった。

(……………はあい。)

少し不満があつたのかもれないがなのはは守の言葉に従って布団に入って眠り始めた。

そこはなのは達がいる旅館の近くの川の茂み、そこに“彼ら”が望むひし形の宝石は存在した。  
そしてその石は川の中へと落ちて行き、そして発動した。

「……………!!」「……………」

発動に気付いた者達はそれを求めて動き始める。  
守となのはとユーノは旅館から出てなのはは途中でレイジングハートを起動させて、ジユエルシードのある辺りへと向かうと、やはりというかなのは達が前にあつた少女と昼間の女性がいた。  
しかし女性の方は犬のような立派な耳と尻尾があつた。  
そして、彼女達は既にジユエルシードを封印していた。

「あゝあらあらあら、子供は良い子でできて言わなかっただけか？」  
女性がなのはと守に向かって言う。

「それを、ジュエルシードをどうする気だ!!  
それは危険なものなんだ!!」

ユーノが女性と少女に向かって言う。

「さあね、答える理由が見当たらないよ。  
それにさアタシ親切に言ったよね。  
良い子でないとガブツといくよって。」

女性がユーノの言葉を流して言うすると、

「ハッ、俺が良い子だったら天地がひっくり返るわ!!  
それに、そのアンタだって子供だろうが!？」

守がいきなり少女の方を指しながら叫んだ。

「「「「……………」」」」

一瞬沈黙が支配した。

「あの子は良いんだよ!!  
取り合えず倒させて貰うよ!!」

最初に立ち直った女性がそう言うと、女性の体がオレンジ色の体毛をし、額に宝石がある狼へと変わった。

「やっぱりアイツ、あの子の使い魔だ!!」

女性の正体を察したユーノが言う。

「使い魔？」

なのはが聞き返す。

「そうさ、アタシはこの子に作って貰った。

魔法生命、制作者の魔力で生きる変わり命と力の全てをにかけて守ってあげるんだ。」

狼がユーノの説明の続きをいう。

それと同時に狼が襲いかかる。

「調子に、乗るな!!」

その言葉と同時に守が狼を殴り飛ばす。

「ッ!？」

「なのは、あの子は任せた。」

守が勝手にそう言って狼の方へと行って行った。

なのはに少女を任せた守はオレンジ色の狼と対峙していた。

「アタシを殴り飛ばすってアンター一体何者なんだい!？」

狼が守に聞くが、

「さあ？

俺は記憶喪失で名前ならあるけど本名じゃないし、何者って言われ  
てもねえ」

守が少しおどけながら言う。

「まあ、分かる事があるとすればの特種な力がある事かな？  
来い！！オルフェウス！！」

その言葉と共に守から背中に豎琴を背負った青い魔人が現れる。

「な、なんだよソレ！？」

狼が叫ぶ。

「行くぞ！！」

その言葉と共に守とオルフェウスは狼に向かっていく。

「前見たときもよく分からなかったけど、キミの知り合いは一体ど  
ういう人なの？」

少女が自分の使い魔と戦っている青い魔人を従えている守について  
聞く。

「守は私の双子の“弟”だよ。」

なのはがやたら弟を強調して言う。

「……………そう、でどうするの?」

なのはの答えにあまり興味がなかったのか、少女は質問をする。

「話し合いで何とか出来るって事はない?」

なのはが聞き返す。

「私はロストロギアのカケラをジュエルシードを集めないといけない。」

そして、あなたも同じ目的なら私達はジュエルシードをかけて戦う敵同士って事になる。」

少女がなのはを諭すように言い切る。

「だから!!」

そういう事を簡単に決めつけないために話し合いって必要なんだと思っ!!」

なのはが少女の言っている事に反論する。

「話し合うだけじゃ言葉だけじゃきつと何も変わらない。」

……………伝わらない!!」

少女が断言して一気になのははに襲いかかる。

「Flier Finn」

なのはが飛んで少女の攻撃を回避する。

「賭けてそれぞれのジュエルシードを1つづつ」

そう少女が言いそしてなのはに襲いかかる。

なのはと少女が戦い始めた頃

「ええい、一体何なんだい“ソレ”は!？」

狼が守の従うようについてくる青い魔人を見ながら叫ぶ。

「さあ!？」

むしろ知っているなら教えて欲しい位さ!!!」

守が狼に向かって言いながらオルフェウスを向かわせる。

(アギ)

オルフェウスが唱えながら豎琴を弾くすると同時に火球を放つ。

「火の玉ツ!？」

狼が驚愕し、その分反応が遅れる。

「ツ!？」

そしてそのまま火球が命中する。

「逃がさないよ!!!」

そのまま守が火球が命中した狼を殴ろうとするが、

「させないよ」

立ち直った狼が防御の魔法で守の拳を受ける。

「チツだけど、勝たせて貰うよ!!」

「ワンコさん!!」

守が殴ろうとしている状態で狼に向かって言う。

「誰がワンコだ!? 狼だ!

そしてアタシはアルフだ!!」

守の発言に狼、アルフが名乗る。

「……思ったより素直な性格だな

それと一つ警告、オルフェウスはどこだ?」

守がアルフの発言にやや呆れつつアルフに向かって言う。

「え?

「……ッ!??」

アルフが疑問を感じた瞬間、何時の間にか後ろにいたオルフェウスの豎琴でおもいきり殴られた。

「勝った。」

守が呟くように今のアルフは気を失っていた。

「さて後は……」

守がアルフを捕まえて少女との取引に使おうと考えた瞬間、完全に油断していたのだろう。

近くで戦っている2人の事を忘れていた。

「Photon Lancer」

その後、音と同時に守に大量の“雷”を伴った魔力弾が守を襲った。

「ガハア！？」

守が一撃目の魔力弾を受けた瞬間体に急に強いダメージがかかる。そして複数の魔力弾を受けると意識が刈り取られていった。

「後1人」

少女が守が気を失ったのを見て呟く。

守を気絶へと追い込んだ魔力弾を撃ったのは少女だった。

少女はなのはとの戦闘中に自分の使い魔が倒された時になのはが守の方を向いたので能力的に脅威になる可能性が高い守を不意討ちに近い形で撃った。

「守！？」

なのはが撃たれた守を心配しつつ、前回と同じ事にならないように目の前の少女を見ていた。

しかし、少女に見ればなのはは隙だらけにしか見えなかった。

前も戦った時もそうだったが恐らく素人なのだろうと、少女はなのはを評価する。

そして、なのはに対する戦法はもう決まっていた。

「Thunder Smasher」

少女のデバイスが砲撃魔法を唱えると、

「Divine Buster」

なのはもそれに合わせて砲撃魔法を撃つ。  
そしてその砲撃は中心でぶつかり合う。

「レイジングハート、お願い!!」

「All right」

なのはの頼みにレイジングハートが答え、ディバインバスターの出力を強くする。

そうして破壊力が上がったディバインバスターがサンダースマッシュヤーを撃ち抜くいて少女に向かっていく。

そして、ディバインバスターは少女に命中したように見えた。

「ふう」

なのはが安心していると

「Scythe Slash」

その声と共に上空から一気に少女がデバイスを鎌の形態へと変えて  
なのはに斬りかかっていったそして、

「……………」

鎌はなのはの首筋のギリギリの部分で止まっていた。

「Put out」

なのはの敗北を感じたのかレイジングハートがジュエルシードを1つ出す。

「レイジングハート、何を!？」

なのはがレイジングハートの行動に驚くが、

「きつと主人思いのいい子なんだ。」

少女がなのはに言う。

そしてそのまま少女がジュエルシードを取る。

「ああ!？」

なのはが叫ぶが負けたなのはにはどうしようもないだろう。  
そして2人はそのまま地面へと降りていく。

「起きて、アルフ。」

少女はアルフの元へと向かいながら呼ぶ。

「待つて!？」

なのはが少女に向かっていう。

「出来るなら私達の前にもう現れないで、もし次があったら今度は止められないかもしれない。」

少女がなのはに警告をする。

「名前………あなたの名前は!？」

なのはがそれだけでも聞こうとすると

「フェイト………フェイト・テストロッサ」

少女、フェイトが答える。

「あの私は………」

なのはも名前を言おうとするが、

「あ、フェイト!」

「行こうアルフ」

その前にアルフが起きたので少女は去って行った。

「守、守!？」

「うくん? ユーノ?」

ユーノが守を起こす。

「あの2人はどこに行ったの？」

守が気を失っていた間の事を聞く。

「……………そっか、面倒な事になったな。」

守が一人呟いた。

## 第五話（後書き）

守

「何か、俺の扱い酷くない!？」

不意討ちという形で落とされているからね

守

「いや、それもあるけどさ………何で母さんと風呂に入らなきゃいけないんだよ!？」

いやゝ暑さにやられて手が滑っちゃった（テへ）

守

「テへじゃねえよ!？」

しかも何かかなり真面目な話してるし!？」

うん何かね暑さにやられて思考がぐちゃぐちゃになっちゃってさ。  
結構大変だったんだよ、この後のストーリーの修正が

守

「………自業自得じゃん。」

否定はしない

でも結果的には面白そうだからいいじゃん。

守

「………納得できね」

あんまり文句言つともつと酷い目に合わせちゃつて。

守

「理不尽だ」

次回も楽しみにしてください。

## 第六話

「いい加減にしないでよ!？」

私立聖祥大付属小学校の一つの教室からその声は聞こえた。皆がその方を見るとアリサがなのはの机を叩いて怒っていた。

「この間から何話しても上の空でボーとして!！」

アリサがなのはを怒鳴り付ける。

「ごめん、アリサちゃん。」

なのはが弱々しくアリサに謝る。

「ごめんじゃない!!」

アタシ達と話しているのがそんなに退屈なら一人でいくらでもボーとしてなさいよ!!--  
いくよすずか。」

そのまま、アリサが一気に怒鳴りながら去って行った。

「アリサちゃん」

すずかがアリサを止めるために呼ぶがそのまま行ってしまった。

「なのはちゃん」

すずかがなのはをフォローしようとするが

「いいよすずかちゃん、今はなのはが悪かったから」

なのはがそれを断る。

「そんな事はないと思うけど、取り合えずアリサちゃんも言い過ぎだよ。」

少し話してくるね。」

すずかがそう言い、アリサの後を追いかけて行った。

「怒らせちゃったな。」

「ごめんねアリサちゃん」

なのはがポツリとアリサに向かって謝罪した。

そうアリサが言う通りなのはは前回のフェイトという少女に負けてからずっとフェイトについて考えていた。

( なのは、悩む気持ちは分かるが切り替えはきちんとしろ。 )

( ……………うん。 )

守がなのはに向けて念話で伝えるが、なのはの返事はあまりはつきりしなかった。

( ……………まあこうやって考え込んでるじゃうやつなんだがな。

その内答え出して突っ走るだろうから問題ないだろ。 )

守が少し投げやり気味に思ってから、一人の男子生徒に近づいて行った。

「樋口」

「おう守！どうした？」

守が読んだ少年は樋口順平といい守の友達である。

趣味が野球とオカルト研究という不可思議な組合せだが、悪い人間ではない。

「調べて欲しい事があるんだ。」

守がそう言って、樋口にフェイトとアルフの容姿を伝える。

樋口はオカルト研究の過程で様々な人との繋がりがあり、そのツテを使って人の秘密とかを調べていたりする。

しかもその情報はかなり正確な物であったりする。前にアリサやすずかにその事を話して見たら、アリサが才能の無駄遣いとあきれていた。

「ふーん、その子を探してくれね。」

「そうか守、お前に春が来たのか！？」

樋口が勝手な考えを膨らましていくが、

「春？……別に今は春だろ？」

というよりなのはの悩みと関係していてな、頼むよ。」

守が天然であった為、流されてしまった。

「……オーケー分かった。」

あの3人が喧嘩しちまう位深刻な状況だしな、手伝ってやるよ。」

先程のなのは達のやり取りを直接見ていたためか樋口が真面目な口調になって守の頼みを受け入れる。

「頼むな。」

「わかってるよ。」

守の念押しを樋口はしっかりと答えた。

（さてと、見つかるかな？）

守は一人呟いた。

結局、放課後になってもアリサが怒ったままでなのは一人で帰る事になりそうだったので、守がなのはと一緒に帰る事にした。

「……………悪かったな、俺も何かしらフォローするべきだった。」

守がなのはに謝るが、

「うっん。」

あれは私が悪かったから。」

なのはが少し聞き流すように言う。

そこに何か歪な物を感じたが守は深く追求はしなかった。

「……………」

再び、沈黙が二人を支配したが、

「お久しぶりですな。」

守にとってどこかで聞いた事がある声が聞こえ守となのはがそこを  
見ると、

「ふっふっふ、外でお会いするのは始めてでしたね。」

前に守の夢に出てきたイゴールと名乗る老人がいた。

「……………」

いきなり現れたイゴールに守が呆然としていると、

「え、え、ええええええ！？」

なのはが守の隣で悲鳴を上げた。

「おや、そちらの方もいましたか？

これは興味深い。」

なのはが叫んだ事はあまり気にせずにイゴールが言う。

「……………何の用ですか？」

なのはが叫んだ事で正気に戻ったのか守がイゴールに用件を聞く。

「これは失礼しました。」

このような事はあまりなかったので私も驚いてしまいました。  
では本題に移りましょう。」

イゴールが守を見て話し始めた。  
ちなみになのはイゴールの外見が怖いのか守の制服の袖をちゃっ  
かり握っていた。

「あなた様の“力”について一応警告をしておきましょう。」

「警告？」

イゴールの言葉に守が聞き返す。

「さようあなた様は自覚をしておりますが、あなた様には世界を  
歪めるほどの強力な力をお持ちです。  
使い方を間違えぬようお願いしますぞ。」

「「……………？」」

イゴールの警告の意味がよくわからなかったらしくなのはと守は不  
思議そうな表情をした。

「では、じぎげんよう。」

イゴールがそう告げるた瞬間イゴールの姿が消えてしまった。

「「……………え？」」

なのはと守は同時に呆けてしまった。  
数分後、正気に戻ったなのはが守からイゴールについて聞き出した  
結果、なのはにとってイゴールは謎の存在と化した。

その後、2人は一回家に帰った後、ジュエルシード探しに出て行った。ただ途中からなのは表情が吹っ切れた感じになっていたのでフェイトについては心の中で何かしら整理はついたのである。そして、なのはと別行動で守はジュエルシードを探していた。

（守、そろそろタイムアップかも？）

ふとなのはから念話がある。

そうして近くの時計を調べると確かにもう夕食の時間が近付いていた。

（分かったじゃあ俺も帰るから……）

「あら守君、元気だったかしら？」

守がなのはに返事を変えそうとした瞬間、一人の女性の声が聞こえた。

そうして声が聞こえた方へ振り返り女性をはっきり見る。

そうして女性を見た守の表情は急に強張ったものになった。

「……………潮泉さん。」

守が少し警戒した表情で女性を呼ぶ。

「律都でいって言ったでしょう？」

その女性は潮泉律都といい、翠屋でたまたま守に会って何故か気に入られてしまいよく話す事があるが、何となく守はこの女性が苦手だったりする。

ちなみに前、樋口に律都について調べるように頼んだら、“お手上

げ侍”と言われてしまいかなり謎の多い女性だったりする。

「で、何の用ですか？」

守が少しムスツとしながら聞く。

「冷たいわねえ。」

男の子なんだから女性にはやさしくしないとモテないわよ。」

律都がからかうように言うが、今の守にしてみれば早く帰って夕食を食べてジュエルシード探しに出て行く方が重要である。

「そろそろ門限なので失礼します。」

守が律都の言葉を無視してそのまま帰ろうとすると、急に魔力の流れを感じた。それと同時に天気が荒れていく。

「あら？雷かしら？」

律都が呟くが守はそれ所ではない。

恐らく今の魔力が原因なのだろう、ジュエルシードが発動したのを感じた。

そしてユーノが広域結界を発動し始めた。

「じゃあね律都さん！！」

「あ、ちよつと守君！？」

守は適当に言ってジュエルシードの発動地点に向かって走って行った。

守が律都から離れてジュエルシードの発動地点に向かっていている間に  
なのはとフェイトはジュエルシードの封印を同時にしていた。

(ユーノ！！今、状況は！？)

咄嗟に守がユーノに念話をする。

(今、なのはがあの子と戦っていて、僕も使い魔方と戦っている。  
守はすぐ来れる！？)

ユーノから状況を聞きつつ守は思考する。

(二手に別れたのが不味かったな。  
後、5分位かかるかも、取りあえず急ぐから粘ってくれ)

(……………分かった。)

守の言葉にユーノが答える。

ただ守にしてみればこの前の戦闘で気付いたが守のオルフェウスは  
雷の攻撃に弱いようなので守が合流しても戦力的には微妙かもしれない。  
ない。

しかし今の二人だけでは恐らく荷が重いであろう、と守は判断して  
急いで行った。

守が走っていた頃

荷が重いと思っていた守に反してなのははフェイト相手に奮闘して  
いた。

「フェイトちゃん!!」

その途中、なのはがフェイトに向かってフェイトの名前を呼ぶ。

「話し合うだけじゃ言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど、  
だけど話さないと言葉にしないと伝わらない事もきつとあるよ!!」

なのはの言葉にフェイトは驚く。

確かにそれは前にフェイトがなのはに向かって言った事ではあった  
がそれ以上にまだ自分と話し合おうとしているなのはに驚いた。

「ぶつかり合ったり競い合う事になるのはそれは仕方ない事かもし  
れないけど、だけど何も分からないままぶつかり合うのは私、嫌だ  
!!」

フェイトの表情がさらに驚きに染まり、心は揺れる。

「私がジュエルシードを集めるのはそれがユーノ君の探しものだから、  
ジュエルシードを見つけたのはユーノ君で、ユーノ君はそれを  
元通りに集め直さないといけないから私はそのお手伝いで、だけど  
お手伝いをするようになったのは偶然だったけど、今は自分の意志  
でジュエルシードを集めている。」

自分の暮らしている町や自分の回りの人達が危険が降りかかったら  
イヤだから、これが私の理由!!」

そのままなのはが自分の理由を一気に言い切ってしまう。

「私は…」

なのはの思いのこもった言い方にフェイト自身が己の理由を言おう  
とすると、

「フェイト！答えなくていい！！」

狼形態のアルフが叫ぶ。

「優しくしてくれる人達の所でぬくぬく甘ったれて暮らしているよ  
うなガキンチョになんか何も教えなくていい！！」

アルフにとってなのはの理由はただの綺麗事のように聞こえたのだ  
ろう。

そんな風な綺麗事が言えるのはなのはが普通の家庭で過ごしている  
からこそその考えだろうと判断したのだろう。

「え？」

なのはがアルフの言葉を聞いて驚く。

「アタシ達の最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！！」

アルフが叫ぶと同時にフェイトが鎌の形態のバルディシュを構えて、  
戦闘の意志を示す。

「なのは！！」

ユーノがなのはを心配して呼ぶ。

「大丈夫！！」

なのはがユーノに心配させないように答える。

そうして、なのはとフェイトが睨み合いを続けた後、一瞬の隙をつ

いてフェイトがジュエルシードに向かって飛んでいく。

「あ!？」

一瞬驚いた後すぐに追いかける。

守が着いたのはその時だった。

すぐにジュエルシードの場所を確認して守もジュエルシードに向かつて急ぐ。

守に封印する方法はないが何となく嫌な予感を感じた。

そうして守がジュエルシードにたどり着く前になのはのレイジングハートとフェイトのバルディッシュがジュエルシードを挟んで衝突する。

そして、ジュエルシードを中心に巨大なエネルギーの放流がおきた。

「きゃああああ」

「うっ」

その爆発はなのはとフェイトを弾き飛ばした。

そして守が放流に飲まれる瞬間“何か”が守の意識を奪っていった。

「守!？」

ユーノはなのはとフェイトが吹き飛ばされたのを見ていたが守が爆発に飲まれたままである事に気が付いた。

すると周囲に奇妙な現象が起きた。

さつきまで拡がり続けていた放流が急に縮み始めたのだ。

まるで何かの力に引き込まれているようだった。

そして爆発が消えた所にいたのは奇妙な雰囲気を漂わせている守と左手に巨大な剣を握り右手に闇の色のエネルギーの塊のような物を

持っている全身を鋼色の装甲に身を包んだ背丈が四メートル程の鎧人形だった。

## 第六話（後書き）

あゝ、すみませんSERAPHIM様、最後にしかアスラマキーナの出番がありませんでした。

orz

守

「しかもほとんど何もしてないし……  
これからアスラマキーナの出番ってあるの？」

ん〜一応あるけどそんなに多くはないかも

守

「……………なんで入れたんだよ？」

俺の趣味!!

守

「人はそれをワガママという。」

グズツ

守

「18歳（2010年9月9日時）の少年（青年？）がいじけるなよ!?!?」

うい、アスラマキーナの出番を増やすよう努力はしていきます!!

守

「にしても、何か俺の知り合いって変な人ばかりじゃないか？」

まあ樋口 順平についてはぶっちゃけアスラクラインの樋口 琢磨とペルソナ3の伊織 順平をベースにしています。

守

「……………手抜きめ。」

否定はしないが良いキャラになってくれると信じている。

守

「あっそう。」

冷たいヤツめ

次回、鋼が暴れます。

期待しててください!!!

## 第七話（前書き）

2ヶ月も次話の投稿が遅れて本当にすみません。

大学の勉強等でリアルで遅れました（血涙）

書くのがあまりにもひさしぶりだったため、駄文になってしまった気がするのですが皆様の大きな心で読んで頂けるととても嬉しく思います。

## 第七話

混乱、その場を支配していたのはそんな空気だった。

ジュエルシードによる爆発、そしてそれを何かしらの手段で封じた鋼色の装甲に身を包んだからくり人形を従えている守

「……守、それは一体何？」

なのはがその場にいる全員の疑問を守に聞く。

「……」

返事がなかったというより自分の名前を呼ばれているという自覚がまるでないようだった。

「守!、守!??」

無反応の守になのはが必死に守を呼ぶと、

「誰だい、守って?」

守(?)がなのはに返したのはその言葉だった。

「誰って守は守だよ!?!」

なのはが守(?)を指指しながら言う。

「……なるほどね。」

「守か、いい名前だな。」

守（？）が自分を示す名前を自覚する。

「あなたは一体誰なの？  
それにそれは何なの？」

なのはが守（？）に向かって強い口調で守（？）と鋼色のからくり人形について聞く。

「僕については秘密かな

この子自身が思いつき出さないと、意味がないしね。

まあ呼び方に困るようであれば……この子が守なら、僕は刃かな。

これはアスラマキーナ、鋼。

機械仕掛けの悪魔さ。」

刃が適当な説明をする。

「機械仕掛けの悪魔ってどういう事!？」

曖昧な説明に納得がいかなかったなのはが追及しようとするが

「何だいこの石？」

「って私の話を聞いてっばー!!！」

刃はなのはに興味を失ったらしく自分の目の前にあるジュエルシードに意識が回っていた。

「ッ!？」

……それを渡してください。」

刃がジュエルシードを取ろうとしてフェイトが正気に戻ったのかジュエルシードによる爆発で傷ついたボロボロなバルディシュを刃に向ける。

「……………ふむ、ずいぶんと無茶をする子だね。けどその状態の武器ではどうしようもないな。」

刃がフェイトのバルディシュを眺めながら言う。

「……………それを、ジュエルシードを渡してください。」

フェイトが刃の言葉を聞いても、フェイトは戦闘の意志を示す。

「こんな石ころどうするんだ？」

刃がジュエルシードを眺めながら言う。

「アンタに取ってはただの石ころでも、アタシ達に取っては必要なものなんだ!!」

狼形態のアルフが刃に向かって叫ぶ。

「……………ふーん何かの魔導生物かな？けどね僕にとって、これはただの石ころでしかないよ。それを見せてあげよう。」

鋼。

「アルフにそう返ししながら刃が鋼に命ずると鋼は左手に持った剣をジュエルシードに向かって降り下ろした。」

そうして降り下ろされた剣がジュエルシードを真っ二つに切り裂いた。

「ああ!?!」

「「え!?!」」

「嘘!?!」

フェイト、アルフ、ユーノなのはがそれぞれ驚く。

ジュエルシードはかなりの魔力を持っていてなのは達の魔法では破壊する事は到底無理な代物である。

それを剣の一振りで破壊した鋼は異常としか言い様がない。

「だから言っただろ。

これは僕にとって石ころでしかないと、」

刃が軽い口調で言うが、

「そ、そんなジュエルシードがないと……」

フェイトがまるでこの世の終わりのような呆然とした声で呟く。

「フェイト

……………お前ええええ!?!」

アルフがフェイトを気づかうように一度見た後、刃に向かって突っ込むが

「無駄だよ。」

その守の一言とともに鋼が動く。  
鋼が取った行動は至ってシンプルだった。  
ただアルフに向かって拳を振るおうとする。  
しかしその距離はまだ遠くアルフには届かないはずだった。

「がつ!？」

な、何で!？」

しかしアルフが鋼に殴り飛ばされた。

アルフが驚くのも無理はなかった。

鋼が拳を振るう直前急にアルフの目の前に現れたからだ。

(転移魔法!?)

でもアレだけの質量の物が転移するにはもっと手間がかかる。  
何が起きたんだ!?)

ユーノが殴り飛ばされたアルフを見ながら考える。

「手を抜いたから生きてると思うけど、人の話は最後まで聞きなよ。  
僕がコレをただの石ころと断言したのはこう言う事も出きるからさ、  
鋼!——」

刃がジュエルシードの破片を持って鋼に命じて鋼がジュエルシード  
の欠片に触れると、ジュエルシードが元通りになった。

「……ス、スゴい。」

ユーノが呆然と呟く。

剣の一振りでジュエルシードを簡単に破壊し、さらに直してしまう

そんなデタラメな事が出来る魔法などどこにも存在しない。

「……………それを渡してください。」

ジュエルシードが直った瞬間に急に目に力が戻ったフェイトが再び刃に言う。

その表情は救いを得たようだった。

「……………そんな欲しいのかいこの石ころが？」

そんなフェイトを刃が探るように見ながら聞く。

「はい。」

刃の視線にフェイトが少し怯えながらも答える。

「……………」

そして刃は無言のままフェイトにジュエルシードを投げ渡した。

そして刃がフェイトにジュエルシードを渡したとたんまるで役目は終わったと言わんばかりに鋼が刃の影に消えていき刃はゆっくりと倒れた。

「ええ！？刃君！？」

なのはが刃に向かって行く。

「……………え？」

フェイトはジュエルシードを渡したくれた事に混乱して刃が倒れた

事に意識が回らなかったが、

「フェイト逃げるよ!!」

いつの間にか人間形態になったアルフが殴られた所を抑えながらフェイトに言い、フェイト達は逃げていった。

「……………フェイトちゃん。」

なのははフェイト達が去って行った方向を見ていた。

フェイト達が行った後、なのはとユーノは気絶した刃の様子を心配そうに見ると、

「ZZZ……………」

刃(?)がかなり気持ち良さそうに寝ていた。

「……………ねえ、ユーノ君」

なのはが少し困ったようにユーノに聞く。

「う、うん。」

ユーノがなのはに返事を返す。

「起こしても大丈夫だよね？」

なのはがユーノに確認を取る。

「大丈夫なんじゃないかな？」

ユーノが曖昧に答える。

「……………刃君、起きてー!!」

となのはが叫ぶと、刃(?)がむくりと起き上がった。

「……………なのは、腹へった。」

一言寝ぼけた表情で呟いた。

「守だね。」

「うん、守だ。」

なのはとユーノが確信して言う。

「はい??」

守は意味が分からないという表情をしていた。

その後、取りあえず家に帰って夕食を食べてからなのはの部屋で守に今までの事を説明していた。

「それで、守はあの時の事本当に覚えてないの?」

なのはが守に聞く。

「知らないよ。」

守が本当に知らないらしく真面目な口調で返す。

「そつか、でもフェイトちゃんやジュエルシードの事が今、取りあえずやらなきゃいけない事かな？」

なのはが確認するように言う。

「そつだな。」

守が同意し、方針としては鋼と刃については放置で取りあえずレイジングハートが直つたらジュエルシードを集めるという事になった。翌朝、刃が出てきた反動か守が寝坊をし危うく学校に遅刻仕掛けていた。そうして学校に行く途中、小さな魔力の気配を感じたそれはフェイトがある所に転移するために使った魔法であった

#### 時の庭園

それは次元空間内に存在する魔法技術で作られた次元航行すら可能な移動庭園でありフェイト・テストロツサの母、プレシア・テストロツサの城である。

その時の庭園の中でフェイトはプレシアと向き合っていた。いや、向き合うというには奇妙な状態だった。フェイトは魔力で作られた鎖で拘束されておりその体には“何か”で叩かれたような傷があった。

そんな娘をプレシアは冷めた目で見つめてから言った。

「たったの4つ、これはあまりにも酷いわ。」

娘を労る言葉では無く、ジュエルシードを手に入れた個数に対する

理不尽な言葉であった。

「はい、ごめんなさい。  
母さん。」

そんな言葉にもフェイトは弱々しく答える。

「フェイト、あなたは私の娘、大魔導師プレシア・テストロッサの一人娘。

不可能な事などあつては駄目

どんな事でも、そうどんな事でも成し遂げなければならない。」

プレシアが感情の込もつてない言葉でフェイトに語りかける。

「はい」

フェイトはプレシアに何も反論せずに聞き続ける。

「こんなに待たせて置いて、あがつてきた成果がこれだけでは母さんは貴方を笑顔で向かえる訳にはいけないの。

わかるわね、フェイト。」

プレシアの発言は異常だった。

明らかに母と娘の関係の物ではない。

「はい、わかります。」

しかしフェイトが当たり前の様に答える。

まるでこれが何時もの事であるかの様に、

「だからよ、だから覚えて欲しいの。」

もう二度と母さんを失望させないように」

その言葉と共にプレシアが手に持っているデバイスを鞭へと変化させてフェイトに向かって容赦無く振るった。

「ああああああ！！」

プレシアに鞭で打たれフェイトの悲鳴が時の庭園内に響いた。そうしてプレシアがある程度フェイトを鞭で叩いてから、フェイトを魔力の鎖から解放する。

鞭で叩かれ体力が消耗していたフェイトが床に力なく落ちる。

「ロストロギアは母さんの夢を叶えるためにどうしても必要なの。」

床に落ちていくフェイトに何の興味も示さずプレシアは言う。

「はい、母さん。」

フェイトが鞭で叩かれた体で弱々しく返事を返す。

「特にアレはジュエルシードの純度は他のものより遥かに優れている。」

貴方は優しい子だから、ためらってしまふこともあるかもしれないけど、貴方の邪魔をしているあの子達はどんな事をしても潰しなさい。

貴方にならそれが出来るだけの力があるのだから」

プレシアの言葉と同時になのはと守の映像が出る。

恐らくプレシアがフェイトがジュエルシードを集めている様子を監視している時に映ったものだろう。

「ただ……出来るならこの少年は捕まえてくれないかしらフェイト。」

と同時に守がズームで映る。

「この子が使っていたこのガジェット……  
もしかしたら母さんの研究に関係があるものかもしれないの。」

プレシアが鋼を操る守の映像を出しながら言う。

「行つてきてくれるわね。」

私の娘、可愛いフェイト。」

「はい、行つてきます母さん。」

そうして、母と娘の会話は終わった。

フェイトが時の庭園にいた時、学校ではやはりアリサがなのはに對して冷たかったが、その姿はどちらかというと意地をはっているように見えた。

「オッス、守!！」

そんな中、守に樋口が話しかけた。

「おはよう。」

どうした、樋口？」

急に話しかけた樋口に驚きつつ守が聞き返す。

「ああ、お前が探してくれと言っていた少女が見つかったぞ。」

「……………へっ？」

樋口の言葉に守が呆然とした。

確か頼んだのは昨日だったが一日で見つけたコイツの情報網は一体どうなっているのだろうか？と守は驚いてしまった。

「どうも隣町の遠見市のマンションに住んでいるらしいぜ。」

ただ最近住み始めたらしいから正確な家族関係とかはわからなかったぜ。

「…さあみんなも一緒にお手上げ侍。」

と樋口が謝る（？）が住んでいる場所がという事が分かる時点で十分だと思っ。

ただ今の口ぶりからすると家族関係すらも調べる気だったように聞こえるが、

「……………樋口、おまえの情報網って一体どうなっているんだ？」

守が少し呆れた口調で樋口に問うと。

「さすがの守でもそれは秘密だぜー。」

ニヤリと樋口が笑ってごまかした。

「……………わかった。  
ありがとな、樋口。」

樋口の笑い方に何か不吉なものを感じて、守は話を切り上げて自分の席へと戻っていった。

途中、なんでオレっちの持ちネタのお手上げ侍を無視するんだよ！  
？とかいう樋口の叫びが聞こえ、うるさい！！とアリサに殴り飛ばされていたが気にしなくてもいいだろう。

放課後、まだアリサの怒りが収まってなくなのはと二人で帰る事にした。

そしていつもの停留所でバスから降りるとユーノが待っていた。  
そして、なのはにレイジングハートを差し出した。

「レイジングハート、直ったんだね。  
良かった。」

レイジングハートを受け取ったなのはがレイジングハートが直った事を純粹に喜ぶ。

「Condition green」

そんななのはの声にレイジングハートが答える。

「また一緒に頑張ってくれる？」

なのはが自分と戦ってくれるレイジングハート（大切な存在）に聞く。

「All right My Master」

レイジングハートの言葉を聞いたなのは嬉しそうにレイジングハートをゆっくりと手に包んだ。  
それは一人と一機の間で生まれつつある使用者ユザーではなく主マスターという絆を体現しているようだった。

そうしてなのはがレイジングハートを握り締めてからしばらく経つとジュエルシードの気配がした。

#### 海鳴臨海公園

ここに落ちていたジュエルシードは発動と同時にそばにあった木の中に入り込み、木の化け物に変化させていく。

「どういう願いでああなるんだよ。  
もうジュエルシードって何でもありだな。」

守が呆れた様に呟く中なのはがレイジングハートをセットアップして構え、ユーノがいつものように結界を張る。  
そうしてジュエルシードの暴走体とにらみあっていると上から金色の魔力弾が降ってきた。

それらはジュエルシードの暴走体に向かっていったが命中する寸前にバリアをはって防がれてしまった。

そして、それらを放った方向にはフェイトと狼形態のアルフがいた。

「ワーオ、生意気にバリアまで張るのかい。」

アルフがジュエルシードの暴走体について軽口をたたく。

「うん、今までのより強いね。」

それにあの子達もいる。」

そんなアルフにフェイトが答えながら、なのはと守を見て冷静に咳く。

「来るよなあ、そりゃあ。」

守がフェイト達を見てぼやくとジュエルシールドの暴走体は木の根っこを鞭のようにして近くにいたなのはと守に向かってきた。

「俺達だけかよ!?!」

なのは達にしか向かってこない根っこに向かって守が文句を言いつつオルフェウスを呼び出す。

「ユーノ君、逃げて!」

なのはがユーノに呼び掛けてユーノが少し遠くへと離れていった。

「Flier fin」

レイジングハートが唱えてなのはの靴に翼が現れなのはを空へと飛ばす、そして守はオルフェウスに引張られるような形で空へと飛ぶ。

「飛んでレイジングハート!  
もっ和高く!!」

「All right」

なのは自分がもつとも得意な砲撃を撃つために距離をとることをレイジングハートに求めてレイジングハートがそれに答える。守はジュエルシードの暴走体がなのはに襲いかからないようになるのはより低い位置からジュエルシードの暴走体の意識を自分に向けさせていた。

そしてある程度の高度を保ったなのはがレイジングハートを構える。

「Shooting mode」

レイジングハートが杖から砲撃に特化した音叉状の形に変化する。

「いくよレイジングハート!!」

そんななのはの声と共にレイジングハートが砲撃の準備を始めた。なのはとフェイトの様子をチラチラと見ながら守は根っこをオルフェウスを使って、迎撃していく。

（なのはとレイジングハートは今日は絶好調だな。たぶんレイジングハートがマスター何て言うから二人とも嬉しいんだろうな。

……てか何で俺はあのフェイトって子に睨まれてるの?）

と守はなのはについて考えながら、フェイトが守に向ける視線を気にしていた。

そんな中レイジングハートの砲撃準備が整い、

「撃ち抜いて、デイバイン！」

「Buster」

なのはがジュエルシードの暴走体に撃ち込む。

やはりバリアで防がれてしまうが、なのはの砲撃は今いるメンバーの中では一番高い攻撃能力をもっている。

そんななのはの砲撃を受ければさすがにジュエルシードのバリアも亀裂が入った。

しかし後一押し足りなかった。

なのはの砲撃が当たった瞬間、フェイトもまた砲撃魔法を発動させていた。

「貫け強雷！！」

フェイトが自分の目の前に魔法陣を発生させて、バルディッシュをその魔法陣に通す。

「Thunder smasher」

バルディッシュが唱えると共にフェイトの砲撃魔法が放たれるさすがに二人分の砲撃にジュエルシードのバリアが壊れ暴走体が耐えきれず、弱り始めると、

「Sealing mode from Setup」

レイジングハートとバルディッシュが封印形態へと変わり、

「ジュエルシードシリアル 封印」

なのはとフェイトが同時に封印をした。

そして、封印したジュエルシードをばさんでなのはとフェイトは互いに相手を見ていた。

「ジュエルシールドには衝撃を与えたらいけないみたいだ。」

昨日の事があってかフェイトがなのはに向かって言う。

「うん。」

昨夜みたいな事になったら、私のレイジングハートもフェイトちゃんのバルディッシュもかわいそうだもんね。」

なのはがフェイトの言葉を聞いてそれに答える。

「だけど、譲れないから!!」

「Device from」

その声とフェイトがバルディッシュを構え、バルディッシュが戦闘の準備をする。

「私はフェイトちゃんと話をしたいだけなんだけど、」

「Device mode」

なのはもそれに合わせるようにレイジングハートを構える。

「私が勝ったら、ただの甘ったれた子じゃないって分かって貰えたら、お話聞いてくれる?」

なのはが構えつつ、フェイトに自分の意思を伝えてから一拍置いて合わせたようになるのはとフェイト突撃を始めて、お互いがデバイスを降り下ろす直前、魔法陣があらわれて、レイジングハートを素手でバルディッシュをデバイスのようなもので受け止めた少年が現れ

た。

雰囲気からしてなのは達より少し年上の少年はなのはとフェイトの  
レイジングハートとバルディッシュを受け止めた少年はなのは達告  
げた。

「ストップだ。

ここでの戦闘は危険すぎる。

時空管理局、執務官クロノ・ハラオウンだ。

詳しい事情を聞かせて貰おうか？」

「……………誰？」

たくさん木の根っこを相手にして疲れていた守がポツリと呟いた。

## 第七話（後書き）

や、やっと書けたぜ

守

「ああ、端から見ててもお前は回りの人と比べたら真面目に勉強をやりすぎだ。

だがお前って見ていてつくづく思うんだが、努力と結果があまり結びつかない奴なんだな。」

ゲボハア!!（吐血）

じ、自覚はあるがはつきり言うな。

それでも一応頑張ったんだよ!!

????

「言い訳が見苦しいの、デイバイン、バスター!!」

ゴバアアアアアア!?

守

「……………なんているのなのは?」

なのは

「後書きだから問題ないよ。」

守

「そうか……………そうだな。」

酷いな君達!?

なのは

「愚者は黙ってて!!」

せつかくのアスラマキーナ、鋼の出番が少ないし、ユーノ君の事を忘れ気味だし、何より私とレイジングハートの部分が適当なの!? 分かってる?」

あの〜なのはさん?

なんでそんなに諸事情に詳しいの後あなたキャラ違うよね!?

なのは

「後書き特権だよ。」

……………じゃあ覚悟はできたね? (黒笑)」

え……………あの、何でレイジングハートを構えてるんですかなのはさん?

なのは

「あれで終わりな分けないじゃない〜、後9発は撃たれて貰うつもりだから」

……………「ここが僕の終わりか(哀愁)」

なのは

「ダイバインバスタアアアアア!」

守

「……………えっと、次回も頑張るので応援してくださいとメッセージをいただきました。」

## 第八話（前書き）

やっと書けました!!

というか今回は普段より長くなってしまいました。

なのは

「約一ヶ月一話更新ってどうなんだろうね（黒笑）」

何か前書きまで支配されてるうううう!?

守

「ごめん。」

俺には止められなかったよ。」

ちよっ、諦めないでよおおお!?

## 第八話

「もうなんなんだよ。」

守がなのはとフェイトを止めたクロノという少年を見ながら若干呆けたように言う。

やや距離があるため会話はよく聞こえなかったが、なのはとフェイトを止めているらしく、なのはとフェイトとクロノがゆっくりと地面に降りていつていた。

その間、守はアルフを見張っていた。

原因は分からないがあクロノが名のつてからアルフの空気が変わっていた。

………なんとというか焦りみたいだな、切迫感を感じる。

あクロノが言っていた“ジクウカンリキョク”というものはそれほど危険なものなのだろうか？

と考えているといきなりアルフがクロノがいる所に向かって魔力弾を放った。

それをクロノは驚きながらも防御する。

「フェイト、撤退するよ!!!」

アルフがフェイトにそう告げながら、さらに魔力弾を射つ。

突然のアルフの行動に守は少し呆けてしまったが、すぐに立ち直ってフェイトの方を見ると、

フェイトはジュエルシードを取りに行っていた。

それを確認すると同時に守もジュエルシードに向かって行った。

しかしスタートが遅れ、距離的に差があるためフェイトが先にジュエルシードを取ってしまうだろう。

(ダメか!?)

と守が諦めかけた瞬間、アルフが魔力弾を射って出来た砂煙から剣状の魔力弾がフェイトに向かって放たれていた。

しかし視線がジュエルシードに向いていたフェイトは魔力弾に気づけていなかった。

「この馬鹿!!」

守がその言葉と同時にオルフェウスを魔力弾の射線軸上に動かして豎琴で魔力弾を防がせようとしたが、あまりにも急な行動だったため。

豎琴で防ぐよりも先に魔力弾の一つがオルフェウスの胸に突き刺さった。

と同時に“ズプリ”と生理的な悪寒を感じさせる音が守の胸から聞こえた。

「あつ……くつ、」

音と同時に守の胸から大量の血が流れていた。

守自身も忘れていた事だったが、ペルソナとは感覚が繋がっている。つまりオルフェウスへのダメージは守へのダメージでもある。

今までののはやフェイトは相手を傷つけない純粹魔力ダメージの非殺傷設定だったためはつきりした怪我へと発展した事は無かった。しかしクロノと名乗った魔導師はどういう意思の元で攻撃したのか不明だがその魔力弾は物理破壊能力を持った殺傷設定で放たれていた。

それらの要因が重なった結果が守の怪我であった。

(……………まずっ意識が……………)

守の意識が薄れ始め、守がゆっくりと落ちていきそうになったが、守の近くにいたフェイトが守を受け止める。

守の胸から流れている血の量は明らかに生命維持に支障をきたす量だった。

(……………死ぬかも)

全員が守の出血に驚く中、守の思考はどこか冷静だった。まるでな  
んども経験しているかのように  
そして薄れていく意識の中で“ナニカ”が守の意識を支配した。

「……………」

その場にいた守を除いた全員は沈黙していた。

全員が血に見慣れている訳ではないからである。

その中でユーノは一つの違和感に気付いた。

(守が気を失ったのにオルフェウスが消えてない?)

いつも守の戦闘の意思が無くなったり、守が気絶したりすると消えていたオルフェウスが胸に魔力弾が刺さった時の体勢で硬直していた。

……………そして

それは目覚めた。

「うわあああああああ!?!」

始まりはフェイトに支えられている守が急に頭を押さえて苦しみ出

した。

それと同時にオルフェウスが苦しみ始める。  
まるで……“ナニカ”がオルフェウスを内側から引き千切るうとし  
ているようだった。

そして“ソレ”はオルフェウスを引き裂いて一つの咆哮を上げて現  
れた。

“ソレ”は全身が黒く肩に複数の棺を背負い右手に刀を持った“ナ  
ニカ”。

その場にいた誰もが一つの感情に支配された。

逃げる、逃げる、逃げる、逃げる、逃げる、逃げる、逃げる、逃  
げる、逃げる、逃げる、逃げる、逃げる、逃げる、逃げる、逃げる、  
逃げる

“アレ”から今すぐ逃げる！！

彼らの生存本能が悲鳴を上げる。

それだけの威圧感を“ソレ”は放っていた。

そして“ソレ”はクロノを見た。

「っ!?!」

それだけでクロノは鳥肌が立つ。

そして“ソレ”はクロノに襲いかかった。

『……!?!』

咆哮を上げながら“ソレ”が右手に持った刀振り上げて、クロノに  
向かっていく。

その速度はフェイトよりも速かった。

そしてそのままクロノに向かって刀を降り下ろす。

「Protection」

クロノがかるうじて“ソレ”の刀を防御魔法を発動させ防ごうとするが、“ソレ”の持っていた刀はクロノの防御魔法を紙のように切り裂いた。

「なっ!?!」

クロノは防御魔法を切り裂かれた事に驚くが、その驚きの隙をついて“ソレ”がクロノを空いていた左腕で殴り飛ばす。

「ガッ!?!」

クロノが“ソレ”に殴られた勢いで地面に叩きつけられる。

そしてクロノが“ソレ”がいた所を見ると、“ソレ”はもうクロノの目の前に移動して、クロノに刀を降り下ろそうとしていた。

「止めて!?!」

“ソレ”の持っていた刀がクロノを切り裂く直前になのはが叫んだ。その言葉に反応したのか“ソレ”が刀を止める。

そして“ソレ”がなのはを見る。

なのはも若干の怯えつつも、“ソレ”を毅然とした表情で見る。

「.....」

そのまま、なのはと“ソレ”は互いを見ていた。

その緊迫した空気に当てられてその場にいた全員が黙り込む。

「あ……」

急にフツと“ソレ”が表情のない顔で笑ったように見えた。そして“ソレ”がなのはから視線をそらす。

同時に“ソレ”の体が溶けていくように消えていった。

しばらく全員が呆けていたが、最初に立ち直ったのはアルフだった。

(フェイト、今が何なのかよく分からないけど、早く逃げよう！)

アルフがフェイトに念話で逃亡を進言する。

(あ………うん、アルフ。)

アルフの言葉にぼんやりと答えてフェイトは逃亡をする。

そんなフェイト達をなのは達は追えなかった。

さつきまで起きた出来事に頭が麻痺していたからである。

「……………あ、守。」

しばらくして、なのはがポツリと思い出したようにと呟いた。

しかし、そこに守はいなかった。

そう、“アレ”が現れたどさくさに紛れて守はフェイトに拐われて(?)しまっていた。

その事になのはが気付いた時には、クロノは空間に現れたモニターの緑髪の女性と話していた。

話の内容はよく聞いていなかったが“アースラ”という所に連れていく事になったらしい。

正直な所守の身が心配だったが、頭のどこかに守は絶対大丈夫とい

う確信のようなものがあつた。

そして、“アースラ”に転送されたクロノ、なのは、ユーノは転送ポートからクロノの案内で応接室に向かつていた。

応接室に向かう途中でユーノの正体とかでいろいろいとトラブルがあつたが取りあえず無事に応接室についた。

そして、応接室に入ったなのは達を向かえたのは、日本文化がどこか合っているような間違っているような取りあえず例えるならお茶会のような風景だつた。

そんな部屋の中に先ほどの緑髪の女性がいた。

なのはは部屋のあり様に茫然としユーノはなのはを不思議そうに眺めていた。

その後、ユーノのジュエルシード発掘から紛失、なのはと守の協力関係についてなどを話した。

「なるほど、そちらの事情は分かりました。」

緑髪の女性・・・リンディ・ハラオウンは納得したように呟き、

「ではこちらから質問です。」

急に真剣な口調でなのは達に問いかけてきた。

「なのはさんの弟の守君の使っていたレアスキルについてですが、あれは一体どういうものだったのですか？」

口調はやや優しいものだったがその眼は真剣なものだった。

(・・・というかなのはは勝手に守の事を弟としているがいいのか)とユーノが思ったのは秘密だ。

ちなみにこれが原因でアースラが崩壊の危機にさらされたのはまた別の話である。

「守はあの力の事をペルソナって呼んでいましたけど…」

とユーノが答えようとした時になのはが、

「あのう…レアスキルってなんですか？」

と会話に割り込んでいった。

「レアスキルとは特殊な固有技能の魔法の事だ。」

とリンディの隣にいたクロノが簡単に説明した。

「だけど僕の見立てではアレはレアスキルではないと思います。」

ユーノがやや自信なさげに言った。

そのユーノの言葉を聞いたリンディが空間にモニターを開いてオルフェウスと黒い右手に刀をもった“アレ”が映った映像と何かのデータをしばらく見た後に

「そうですね。」

魔力反応もほとんどないし、召喚魔法なら何らかの魔法陣が現れるはずですね。」

とリンディが納得したように呟く。

「じゃあ、あの白い豎琴を持ったヤツから黒い刀を持ったヤツに変化した事について、君達が知っている事は何かないか？」

クロノが先程の事を思い出しているのか、何となく苦い表情でなのは達に聞いた。

「…いえ、あの黒いヤツは僕達も始めて見ました。」

とユーノが戸惑ったように言った。

「わかりました。」

ではロストロギア、ジュエルシードについてですが…」

それで納得がいったのかリンディが話題を変えていった。

その頃、フェイト達は困惑していた。

それは彼女達の目の前にいる少年に起因している。

“アレ”の騒動の中で守を連れてきたが、それはフェイト達が意図的におこなった事ではなかった。

それに気づいたのは彼女達がアジトにしているマンションに戻ってからだった。

「で、コイツどうするのフェイト？」

取りあえずあの人の言う通りに捕まえはしたけど…」

アルフが対応に困りフェイトに問う。

確かにこの少年を連れていく事が母の指示ではあったがこのような形でそれが叶ってしまうとは思わなかったため、フェイトも考えがまとまらなかった。

本来ならこのまま母のいる時の庭園に連れていきたい所だが管理局が来てしまったため、不用意な転移魔法は管理局に見つかってしまうので使えなかった。

取りあえずフェイトがおこなった行動は、

「アルフ薬箱取ってきて、私はこの子の傷口を確認するから。」

フェイトは一番気にしている事から処理する事にした。

オルフェウスがフェイトをクロノの攻撃から庇って盾になった時に守の胸からの出血によって守が着ていた学生服が赤く染まっていた。幸いな事に今の守の呼吸はかなり安定しており、生命に支障がない事がわかるがその傷の様子が気になっていた。

「……………あいよ。」

わかったよフェイト。」

アルフが少し心配そうにフェイトを見るが、自分の主がこの少年に庇ったもらった結果できた傷であることに負い目を感じていることをアルフは知っていたのでフェイトの好きにさせる事を選び、部屋を出ていった。

「……………よし!」

血を見た経験があまりなかったため少し守の血に怯えはしたもののフェイトは自分に気合いを入れて守の上着を脱がした。

「……………アレ？」

傷がない？」

上着を脱がして守の出血していたはずの部分を見てフェイトは驚いた。

傷があるであろう部分には傷そのものがなくなっていた。

「やっぱり“アレ”が関係しているのかな？」

フェイトは守の胸に触れて傷がない事を確認しながら守の白い堅琴を持った“モノ”から刀を持った黒い“モノ”を変化した時の事を思い出していた。

「ん……」

しばらくして守が自分に触れられている刺激に反応して目が覚めて最初に見えたのは自分の胸を直に触って何か考え込んでいる敵(?)であるはずの金髪の少女だった。

「……へあ!?!」

その状況を理解した守が奇妙な悲鳴を上げるとフェイトが考えるのを止めて守の方を見た。

「あ!?!」

いきなり動いたら危ないよ。」

急に動こうとした守をフェイトは心配するが守としてはもっと別の事を気にして欲しいと思った。どうしてこんな事になっているのか分からないが、フェイトが馬乗りになって守の胸に触れているという状態に本能的な部分で危機感を覚える。

そしてそんな状態で顔が近づいているのもう色々ピンチ(?)だった。

「フェイト、薬箱取ってきて……」

そんなタイミングで入って来たアルフは守とフェイトを見て固まった。

フェイトは確かにアルフに傷口を確認すると言っていたが、目の前

の光景は全く予想外だった。

自分の主が怪我をしているとはいえ敵（？）相手に馬乗りになって（しかも上半身裸）直接、胸に触れていて、互いの顔が近くにあった。客観的に“無理”して見れば子供がただじゃれているように見えなくもないが、普通この状態を見て誤解する人間は多いだろう。そしてアルフもその内の一人だった。

「何してるんだあああああ！！

お前ええええええ！！」

そして悲しい事にこういう状況では男が悪いと思われる事の方が圧倒的に多い。

アルフは一気に部屋に飛び込み守を殴り飛ばした。

「……………俺が兄だ。」

色々あって混乱していた守がアルフに殴り飛ばされて、意識が再び薄れていく中、意味のわからない事を呟いた。

ちなみにこの頃、アースラでの話し合いが終わり海鳴臨海公園に戻ったのはが“違うの守は私の弟なの！！”と叫んだのはユーノしか知らない事である。

一方、なのはとユーノとの話し合いを終えたアースラのモニタールームでクロノとそのクロノの補佐官のエイミー・リミエッタがなのはとフェイトの映像を見ていた。

「凄いや、どつちもAAAクラスの魔導師だよ。」

エイミーがなのはとフェイトの映像を見て言う。

「ああ」

それにクロノが答える。

「こっちの白い服の子はクロノ君の好みっばい可愛い子だし。」

エイミーがなのはを見ながら楽しそうな口調でクロノをからかう。

「エイミー、そんな事はどうでもいいんだよ。」

クロノがやや呆れたように答えるがどこか慣れているような雰囲気があった。

恐らくこの二人は何時もこうなのだろう。

「魔力の平均値を見てもこの子で127万、黒い服の子で143万、最大発揮時は更にその3倍以上。」

クロノ君より魔力だけなら上回っちゃってるね。」

エイミーがなのはとフェイトを高評価する。

「魔法は魔力値の大きさだけじゃない。」

状況に合わせた応用力と的確に使用できる判断力だろ!？」

クロノはエイミーに少々むきになって反論する。

「そりゃあ、もちろん信頼してるよ。」

アースラの切り札だものクロノ君は」

そのクロノの反応を楽しむようにエイミィが軽い口調でクロノに返す。

「むう」

そんなエイミィに反論しても無駄と判断したクロノが悔しそうに口を曲げる。

そんなやりとりをしているとリンディがモニタールームに入ってきた。

「あ、艦長。」

クロノが入ってきたリンディに声をかけるとリンディは軽く返してモニターを見た。

「あー、二人のデータね。」

なのはとフェイトが映った映像を見てリンディが言う。

「はい。」

クロノがリンディに同意する。

「確かに凄い子達ね。」

多少の緊張感を持ってリンディが言う。

「これだけの魔力がロストログアに注ぎ込まれれば、次元震の件も領ける。」

クロノがリンディに賛同する。

「あの子達、なのはさんとユーノ君がジュエルシードを集めている理由は分かったけど、こっちの黒い服の子はなんでなのかしらね？」

リンディがフェイトをじっと見つめて自らの疑問を言う。

「随分と必死な様子だった。

何か余程強い目的があるのか。」

クロノがリンディの疑問に対して感じた事を言った。

「目的ね。

まだ小さな子なのに、普通に育っていればまだ母親に甘えていたい年頃でしょうに。」

リンディがフェイトを少し悲しそうに言う。

それは母としての彼女が言わせる事であろう。

「それにしても……」

ここで彼女はクロノとエイミーがあえて離れていた話題に触れた。同時にモニターが一人の少年を映す。

「なのはさんの弟の守君の“コレ”はなんなのでしょうね？」

そこにはオルフェウスと黒い刀を持った“ナニカ”が映った映像が出る。

「確かに変ですよね？」

魔力反応がないって事は魔法じゃないって事ですけど……魔力を使わないでこんな現象をおこせるモノがあるんですか？」

エイミイがオルフェウスといくつかのデータを眺めながら疑問に思った事をリンディに質問する。

「私はそんなデタラメなもの一度も見た事はないわ。恐らく上層部が聞いてもデタラメと思うでしょうね。」

リンディはオルフェウスを見ながら呟く。

「デタラメか……確かにデタラメな強さだったな。アレは。」

クロノは殺されかけたためかよりその力を強く実感しているのだから。

「確かにデタラメだよな。不意打ちだったとはいえクロノ君がここまで一方的にやられるなんて信じられないもん。」

エイミイが映像を黒い方に変えてクロノを見ながら言う。

「……確かにアレの戦闘能力は恐ろしいがもっと別の部分で僕は“アレ”が恐ろしいよ。」

そんなエイミイにクロノは何か思い詰めた表情で言った。

「クロノ（君）？」

クロノの表情から何かを感じたのかエイミィとリンディがクロノを心配そうに見る。

「アレ”を初めて見た時、僕は恐ろしいと思ったよ。」

「「？」」

いきなりのクロノの発言に二人は首を傾げる。

「単純に見た事がないものが恐ろしいと思っていたけど。」

落ち着いてからあの時の事を考えると僕は“アレ”からもっと何か別の“モノ”を感じてそれが恐ろしかったと思う。」

クロノ自身、何かはつきりと掴みきれていないのか曖昧な表現で伝えるが、その言葉には何か強い説得力のようなものがあつた。

「……………本当に何者かしらね。」

この少年は？」

リンディが守を見ながら、緊張感を含んで自らの疑問を呟く。その疑問に答えは帰って来なかった。

アルフから派手に殴り飛ばされて気を失っていた守が意識を取り戻した時に見えたのは、

「駄目だよアルフ。」

いきなり怪我人を殴ったら。」

「違うよー!!」

「アタシはフェイトが襲われていると思って。」

「?何で襲われていると思ったの？」

「私は傷がないか確認していたのに?」

「あ、いや……それはその?」

目の前で言い合っているフェイト（主）とアルフ（使い魔）だった。

「……………はい?」

自分の状況の把握に守が困っていると、

「あ、起きたんだ。

大丈夫だった?」

フェイトが守に話しかけた。

「……………うん、まあ一応。

えっと、ここ何処?」

守はフェイトの態度に戸惑いを感じつつ、自分の疑問を口にする。

「ここは私達の家だよ。」

フェイトが守の質問に答える。

「……………へ、へえ〜。

寒っ!?!?」

って俺の上着は!?!」

守がフェイトの返答に驚きを感じていると自分の状況に気が付いた。

「君の上着は……アレだけど、着ない方がいいと思うよ。」

フェイトが躊躇いながら守の上着がかけてある方向をさす。

「?……………」

フェイトの言葉の意味が分からず上着がかけてある方向を見て絶句した。

そこにあつたのは血でドロドロに汚れた“制服”の上着だった。ふつと守の頭に物凄く美しい笑顔の母の幻が見えた。

「……………えっと、何でこんな事になっているか教えて? いや教えてください!!」

母の幻を振り払うためか、はたまた言い訳を考えるためかフェイトに説明を求める。

「……………もしかして覚えてない?」

フェイトが少し困惑したように言う。

「何を?」

ん〜俺が覚えているのは、庇った辺りかな? という訳でなんでこんな事になってるか全部教えてください。」

守が何処と無く低姿勢でフェイトに聞いた。

「うん。」

えっとね……………」

そうしてフェイトの説明が始まった。

途中アルフが所々訂正や解説を受けて海鳴臨海公園であった事、時空管理局についてとさっきの事についてだった。

「…………だから私は傷の様子を見ようと思っていただけなのにアルフが急に殴っていった」

フェイトが説明する。

「納得。」

傷を見るためね。

でもなんで俺がテストロッサさんを襲っていると思ったのアルフさん？」

守がアルフに素直な疑問をぶつける。

「うっ！いや…その…！」

アルフが守の視線を受けてかなり動揺する。

「私も気になるんだけど、どうして私が襲われていると思ったのアルフ？」

フェイトが守に続く形でアルフに聞く。

「アタシが悪かったから二人とも勘弁してくれよ…！」

守とフェイトの純粋な疑問にアルフが悲鳴をあげる。

「「?????」」

守とフェイトはいきなりアルフが悲鳴をあげた理由が分からず首を傾げた。

無知と天然は時に恐ろしい武器へと変わるものである。

その後、いじけてしまったアルフを守とフェイトが何とかして慰めた後フェイトは守の鋼について聞いたが、

「なのにも言ってたけど俺はその時の事はあんまり覚えてないんだよね。」

の言葉であっさりと諦めてしまった。

そうしてしばらくフェイトが守にペルソナについて聞き守が分かる範囲で答えていたが、

「……………ん〜何かもう眠いから明日でもいいか?」

といきなり守が言い出した。

フェイト達は時間を忘れて話し合った結果、時刻は9時を過ぎていた。

普通の小学3年には眠気が強くなってくる時間だろう。

「なんか掛け布団とか無い?

取り合えずそれさえあれば寝れるんだけど。」

守がフェイトに頼むが、この家には一つ大きな問題があった。

「あ、ここ私しかベッド使わないから予備の掛け布団とかないんだけど。」

「……………そっか、まあ室内だし、掛け布団がなくても寝れるだろう。おやすみ。」

フェイトの発言を聞いて守があっさりと思考を切り替えて、その場で丸くなって寝ようとし始めたが、はたから見ているフェイト達から見ればあまりにも寒そうなのであって、

「あ、あの、えっと。」

フェイトが何かしようとしていたが明らかに何も思いつかないのだろう。

アタフタしているだけだった。

そしてフェイトがアタフタしている間に、

「zzzz……………」

よほど疲れていたのか守は寝てしまっていた。ただ上半身が裸という見ててあまりにも寒そうな状態である。しかしそれでも守はぐっすり寝ていた。

「……………。」

そんな守を呆然と見つめる二人だったが、やがてフェイトが決心がついたのかはつきりとした口調で言った。

「アルフ、私のベッドに持って行こう。」

「ハア……フェイト敵なのにコイツに甘いよ。」

フェイトの言葉を聞いたアルフがもはや諦めたように言った。ここで“駄目だ！”とか言う勇氣はもうアルフにはなかった。さっきの二の舞を避けたいというのもあったが、それ以上にここに守を放置するという事に大きな抵抗があった。ちなみにこの二人は知らない事だが、守は恭也と兄弟喧嘩をした後、力尽きてそのまま床で寝てたりするのでフェイト達が心配する必要はそこまで無かったりする。

「あいよ。」

じゃあアタシが運んで行くから、フェイトも寝る準備をしなよ。」

とアルフはフェイトに告げて守を抱き上げて、部屋に連れて行くこととしたが、

「あ、流石にこの格好じゃあマズイか。」

……はあ仕方がない。」

守がまだ上半身が裸である事に気づき、アルフは守に自分が持っている予備で持っているシャツの一つを着せた。

それはブカブカであった物の取り合えず服としては機能していた。そして、アルフは守をフェイトの部屋に連れて行った。

「フェイト、連れてきたよ。」

とアルフはフェイトに告げて、守をフェイトのベッドに置いた。

「うん、ありがとね。」

じゃあ、おやすみなさいアルフ。」

アルフが守をベッドに置いた事を確認してからフェイトは部屋の電気を消して、睡眠を取った。  
翌朝また色々合ったのだがそれはまた別の話である。

守がフェイトと話し合っていた頃、なのはは修羅場に立たされていた。

アースラでの話し合いが終わりなのはとユーノは色々と考えた結果、管理局に協力する事に決め、そのため家を空ける事を母に告げている。

それに対してはなんの問題もなかった。

そう………問題は、

「なのは、正直に答えてね？

守はどうしているの？」

今、目の前で守について聞いて来る母である。

はつきり言って怖い。

ただ質問をしているだけなのにプレッシャーで潰れそうになる。

なのははアースラから家に帰った時点で守がまた家出をしたと告げ、またか和高町家の皆が呆れていたが、それに同時になのはが家を空けると言えば流石に関係性を疑われてしまうだろう。

その結果が目の前にいる母、桃子である。

拉致されちゃった。

なんて言う事も出来ず、なのはは追い詰められていた。

「えっと、あのね……！」

ま、守は……。」

どもってばかりいるなのはだったが、

「はあ、分かったわ。」

桃子が溜息をつきながら諦めた。

「……………え？」

急な桃子の発言になのはが呆然としていると、

「守も何か理由が合っていないんでしょう？」

もう聞かないけど、なのは。

守によるしくね。」

桃子がなのはに告げた。

そう、何か大事な事だから聞かないけど信じているという意思があった。

「お母さん……………」

なのはが桃子の言葉に感動していると、

「けどね……………なのは。」

再び、桃子の言葉に危機感を感じてビシッと姿勢を正すなのは。

「守に会ったらでいいんだけど、

『帰ってきたら私とまた“話し合おう”ね。』  
って伝えといてね。」

「は、はい!!」

桃子の言葉にしっかりと返事をするのは。

………守は家に帰らない方が安全かもしれない。  
と端から見ていたユーノは思った。

## 第八話（後書き）

なのは

「遅いの、“多罪”方角の愚者。（黒笑）」

……多罪なんて聞こえないもん（グズツ）

それにしても後書きがどんどん浸食されているし、

なのは

「魔法少女リリカルなのは The MOVIE 1stのDVDを見た事は許すけど、イカナルに向かう某宇宙戦艦の映画を見たり、ゲーセンに行っていた事はあまり許される事じゃないの！！」

いいじゃんヤト

男のロマンじゃん！！

ゲーセンは行ったけど金がないからただ眺めていただけだし！！

てかMOVIE 1stのDVDはいいんかい！？

なのは

「MOVIE 1stのDVDは参考資料になるし、執筆意欲の維持になるからいいの！！」

でも他は却下なの！！

それに大学や家でテスト勉強やレポートに時間をかけちゃうならせめてゲーセンは止めるの。」

ちよっ！？僕の勉強と大学での人間関係のストレス発散の手段を減らさないで！！

なのは

「でもその結果、教授に  
『愚者君は授業は頑張ってるけどテストは微妙だね?』  
って言われているんだよ。  
私の言ってる事そんなに間違っているかな、“多罪”の方角の愚者  
さん?」

……………(吐血)

守

「……………生きてるか?」

……………返事がないただの影のようだ。

なのは

「自業自得なの!」

守

「……………(黙祷)」

なのは

「さて、今回はとうとう黒い棺桶様が登場で守がフェイトちゃんに  
拉致された話だけだ」

守

「俺どうなるの?」

なのは

「それより守、家に帰ったら覚悟してね。」

守

「……………うん。」

なのは

「素直でよろしい。」

流石は私の弟なの。」

守

「それは関係ねえよ!!!」

戦闘開始。

?????

「えっ、えつとここはどこなんだろう？」

アルフもいないし、アレ？なんだろうこの紙？

『ああ、後書きがカオスに……………次回もよろしくお願いします。』  
?????」

## 第九話（1）（前書き）

よっしや、新年初の投稿！！皆様遅いですが明けましておめでとう  
ございます。

今年もがんばって書きますので見ててください。

## 第九話（1）

守がフェイトに拐われてから一日が過ぎた。

朝になって起きて来ないフェイトを起こすためにアルフがフェイトの部屋に行くところには奇妙な光景があった。

気持ち良さそうに熟睡しているフェイトと“寝苦しそうな守”がいた。

別にベッドは守に半分貸したので問題はないが問題はもっと別にあった。

何がどうなればこうなるのかフェイトは守の腹の上に自分の腹を載せて直角に交差して寝ていた。

「……………ふっふっ。」

最初は目の前の光景に絶句していたアルフだったが、だんだんと笑いが混み上がってきた。

しかし、アルフの記憶が正しければフェイトの寝相は整っている方だが何故こんな事になっているのか理解ができなかった。

しかしここで問題があった。

（どっちから起こそう。）

という事だった。

フェイトを起こせばあたふたして顔が真っ赤になるフェイトが見られそうだし、守を起こせば何かイレギュラーな反応が見れるかもしれないとアルフは考えていた。

何だかんだで高町 守というイレギュラーはフェイトの家に馴染んでいた。

「……さてと。」

そうアルフが言うと、守を起こしてみた。

「ほら、起きろよ。」

フェイトを起こさないように注意しながらアルフが守を起こす。

「ん〜？」

ああ、おはようございますアルフさん。

アレ？

……… テスタロツサさんって寝相悪いの？」

守がすぐにアルフに返事を返した後、何故か腹に乗っているフェイトを見てアルフに質問する。

「アルフでいいよ。」

フェイトは寝相は悪くないはずだけど、何でだろうね？」

アルフがあまり期待したほど守が何かしらアクションがなかったのでそれを少し残念に思いつつ守の質問に答えながらフェイトを不思議そうに見た。

そんな二人に見られているとも知らずフェイトはぐっすり寝ていた。

「あー、俺は高町でも守でいいですよ。」

取り合えず俺が起き上がれないので起こしてもいいですか？」

守がアルフに聞く。

「……アタシとしては何か記録に残したいけど、………はあ仕方な

いか。  
フェイト起きてよ。」

アルフが溜息をついた後、フェイトを起こす。

「ん、ん〜。

おはようアルフ。

……………アレ？」

アルフに挨拶した後、自分の奇妙な姿勢に気づく。

「……………おはよう、テストロッサさん。」

フェイトと目が合い、守がちょっと気まずそうに名字で挨拶をする。

「……………え、ええ!？」

フェイトが状況を理解すると顔を真っ赤にして、跳び跳ねた。

「え、えと、その!!」

わた、私じゃないんだよ。」

「いや、意味が分からないし。」

フェイトが顔を真っ赤にしてテンパっているが、逆に守は冷静にやや困ったように答える。

「ぶっ、くっくっくっく。」

そんな二人を見てこらえきれずアルフが笑いだした。

「ア、アルフ!!  
笑わないでよ!!」

アルフに気づいたフェイトがアルフに笑うのを止めようとするが顔を真っ赤にした状態ではむしろ余計にアルフを笑わせるだけであった。

「……………はあ。」

と置いてきぼりを食らった守はぼんやりと溜息をついた。

アルフが笑い終わるまで待つてから、フェイト達は朝食を食べ始めた。

しかし守には気になる事が複数あった。

「アルフは一体何を食べているの!?!」

一つ目は目の前にいるフェイトの使い魔であるアルフが食べているものだ。

アルフが食べているもの、それは……

「ん?

ドックフードだけど?」

そうあのドックフードをまるでスナック菓子を食べるようにバリバリと食べているのだ。

はつきり言っつてシュールな光景な事この上ない。

狼素体であること考えれば当然なのかもしれないが見ていて違和感しかない。

それにドックフードという基本的に匂いが強い。

犬を飼って慣れている人には気にはならないが、守はそんな経験もないのでその匂いが今食べているパンに混ざってちよつと食欲が失せてしまう。

「……………はあ、もういいや。

ところで、」

アルフに対する反論を諦めて守はもう一つ気になっている事を聞き始めた。

「テストロツサさんは……………ご飯、何時もこんな感じなの？」

守が少し戸惑ったように聞く。

フェイトがご飯を食べようと言って取り出したのはパンとジャムとマーガリンで別に食にこだわらない守はそれで全く問題がないが、こっそりと冷蔵庫の中を覗いて見ると中に入っていたものはパンや冷凍食品などの適当なものばかりだった。

「うん。

……………いつもこんな感じだよ。」

守の質問にフェイトが答えるが、ちよつと後ろめたそうな雰囲気を感じる。

「そっだよ!!」

フェイトってばアタシがいくら言ってもまともに食べてくれないんだよ!!」

フェイトが動揺していると続けとばかりにアルフが文句を言う。

「ア、アルフ!？」

フェイトがアルフの追撃にさらに動揺する。

「……………なんか羨ましいな。」

守がフェイトとアルフを見てポツリと呟いた。

「え?」

「はあ!?!」

いきなりの守の言葉にフェイトとアルフが驚くと、

「他の事がどうでもなくなってしまっほど、何かに熱中できるって事がね。」

俺にはそんな事が出来ないからテストロッサさんが羨ましくてね。」

どことなく寂しそうに守が言う。

「……………」

そんな守の視線を受けて、フェイトとアルフは気まずそうに黙る。

「さてと……………まあそんな事はどうでもいいとして、

二人はこの後どうするの?」

気まずそうなフェイトとアルフに対して軽いノリで守は話題を変える。

「え、えっと私はジュエルシードを集めるつもりかな。」

「フェイト!!」

守の話題転換が自然だったのかフェイトが反射的に答えてしまい、アルフが止めるが手遅れだった。

「そっかあ、じゃあ…」

守がフェイトの答えを聞いて何か考えて、答えようとする。

「あ、」

その瞬間フェイトは自分がミスをおかした事に気づく。現在、守はフェイトに拉致された状態であり守の目的はあの白い少女の所に戻る事であろう。

そんな状態で自分達が不在になるなど知らせるなど愚の骨頂である。しかし守の口から飛び出たのは予想と違う答えだった。

「……ん〜じゃあ、行ってらっしゃい。」

昼までに帰ってきてね〜。」

……なんかやたらと日常的な単語だった。

「何で!?!」

守の発言にアルフが驚きのあまり、色々と言葉が足りない発言をする。

「？」

何か変な事言った？」

アルフの大声に守が耳を押さえてアルフに聞く。

「なんでって、普通アタシ達がいないうちに逃げようとか考えるだろ！？」

守あまりにも素で言うのでアルフが思わず怒鳴ってしまった。

「……………あゝなるほどな。」

でも今帰る方が大変なんだよなあ。」

アルフの発言に守がかなり納得したように答えるだが、急に哀愁漂う雰囲気で呟いた。

「「？」「」

急な守の雰囲気フェイトとアルフが戸惑うと、

「アレを何とかしないとなあ。」

と守が指を指したのは血で汚れた学生服の上着。

「は？」

アルフが守の言葉の意味が分からず聞き返す。

「いや、血で汚れたままもって帰ってらマズイから何とかしないと。」

「

「いや、普通は親の所に帰るべきだろ！！  
……………ごめんフェイト。」

守が解説するがアルフがすぐにツッコムがすぐにミスったとばかりにフェイトに謝る。

「大丈夫だよアルフ。」

フェイトがアルフに少し辛そうな表情で答える。

「????？」

アルフとフェイトのやり取りがわからず守が疑問を浮かべた後、

「いや、家出はしょっちゅうやってるから大丈夫だけど、制服の方がマズイって!!」

と守が叫ぶ。

しかしどう考えても家に帰って来ない方が問題がある筈だが、守に取っては学生服が血で汚れている方が重要らしい。

「……………よく分かんない奴だね、…じゃあ、フェイト行こうか。」

アルフが呆れたように守に言いつつフェイトに行くように促す。

「……………うんアルフ。」

今までの会話から本当に守が出ていかないのかやや不安に思いながら、外に出ていこうとすると、

「あ、テストロッサさん、アルフ。  
ついでに余裕があったら俺が着られるような服買ってきて。」

守が気楽に付け足す。

今の守の服装は学生服の半ズボンにアルフのシャツという微妙な格好のため頼んだ。

「……………はあ、分かったよ守。  
じゃあまた後でね。」

アルフが呆れて言葉を返してから出ていった。

「……………さてと、」  
アルフとフェイトが出ていった事を確認すると守は部屋の方に向かっていった。

「……………ホントに出ていかないのかなフェイト？」

チラリと自分達がいるマンションを見ながらアルフが不安そうにフェイトに聞く。

「……………大丈夫だよアルフ。  
それより今はジュエルシードを集めよう。」

フェイトも少し自信がなさそうに言うが、すぐに思考を切り換えて言う。

少し意味のわからない理屈だったが、守は出て行く気はないと言ったからそれを信じるしかないのだ。

「……………あいよ。」

そんなフェイトの気持ちを察したのかアルフが溜息をつきながら答えた。

そして魔導師と使い魔はジュエルシードを求めて空を舞う。

その頃アースラの会議室ではクルーに対してリンディが話をまとめていた。

「と言うわけで、本日0時をもって本艦全クルーの任務はロストロギア、ジュエルシードの搜索と回収に変更されます。また本件においては特例として問題のロストロギアの発見者であり、結界魔導師でもあるこちら。」

そうして会議室にいたユーノを指す

「はい、ユーノ・スクライアです。」

やや緊張気味にユーノが椅子から立って言う。

「それから彼の協力者である現地の魔導師さん。」

それを聞いてからリンディはユーノの側にいるのはを指した。

「た、高町 なのはです。」

自分が当てられると思っていなかったのかなのはが慌てて名乗る。

「以上二名が臨時局員の扱いで事態にあたってくれます。」

なのはが言い終わったのを確認してからリンディは二人の立場を説明する。

「よろしくお願いします。」

そしてなのはとユーノはアースラクルーにお辞儀をした。

お辞儀をした後なのははたまたまクロノと目が合いなのはがクロノに向かつて笑かけてクロノが顔を真っ赤にして照れて、そんなクロノをユーノがジト目で見るといふ出来事があつたがどうでもいい事である。

会議を終えたアースラクルーがブリッジに移動した後リンディが館長席に座りながらなのはとユーノに指示をする。

「じゃあここからはジュエルシードの位置特定はこちらでするわ。場所がわかったら現地に向かつてもらいます。」

「はい!」

となのはとユーノはリンディの言葉に答えた。

「艦長、お茶です。」

リンディが話終わったタイミングを見てアースラの通信主任のエイミーがリンディにお茶を渡す。

「ありがとう。」

そうエイミィに礼を言ったリンデイがお茶に砂糖とミルクを入れて美味しそうに飲んだ。

その光景を呆然となのはは見る。

「そう言えば、なのはさん。

学校の方は大丈夫なの？」

リンデイがふっと思い出したようになのははに聞く。

「あ、はい。

家族と友達には説明してありますので。」

リンデイのお茶の飲み方に複雑な感情を抱いていたなのははリンデイの問いかけに一瞬驚いたが、すぐにリンデイの質問に答える。

そう、なのははから話を聞いた桃子が守の分も合わせて家族や学校などに話してくれていたのである。

その頃守は、

「だああああ！！」

やっぱり血つて落ちねええええ！！」

風呂場で血がべっとりついた学生服（上着）と戦っていた。ただはつきり言ってしまうは無駄な努力である。

「はあ、なんかこう血がついていてもバッチリ落ちます的な洗剤ないかな？」

…でもそんな洗剤があつたら色物はアウトだよなあ。」

無駄な努力という事を守自身も自覚しているのか手よりも口ばかりが動いている。

「どうしようか？」

血がついた状態でかつ家に帰るのが遅かったら母さん怒るだろうなあ。

とか守が呟くが今の内に出て行くという思考は全くないようだった。

「はあ、馬鹿みたい事言っでないでなんかしょ。」

と思考を切り替えた守だったが、すぐに問題が発生した。

「…することがない。」

流石に来て（？）一日で他人の家の事情を理解できる人間など存在しない。

つまりどれが勝手に動かしてもいいものなのか全く判断が出来ないのである。

他人にとって変だと感じる状況でも本人にとって良いものだった場合いじったりすると怒られてしまう可能性がある。

そのため守は下手に家具などをいじる事が出来なくなってしまった。

「…さっき勝手に風呂場を使っただけど大丈夫かなあ。」

不安そうに守が言うが再び風呂場に戻る気力はなくなたままた見つけたソファで船をこいでいた。

「ふあああ、眠つ。」

人間、眠たい時に限って寝れないがどうでもいい時に限って眠気というものは強くなってくる。  
そうして守はそのまま寝てしまった。

その頃なのは達はジュエルシードの反応があつた所で鳥型のジュエルシード暴走体を封印しようとしていた。

ユーノが鳥型のジュエルシード暴走体にバインドで拘束する。

「捕まえた！なのは！！」

ユーノがすぐに待機していたなのはに声をかける。

「うん！！」

ユーノの声を聞いてなのはがすぐにレイジングハートを構えた。

「Sealing mode Setup Stand by Ready」

レイジングハートが唱え、レイジングハートからでたピンク色の帯がジュエルシードの暴走体を拘束する。

「リリカルマジカルジュエルシードシリアル封印！！」

「Sealing」

なのはとレイジングハートが詠唱を終えてジュエルシードを封印し

て、宝石状になったジュエルシードがゆっくりとなのはの所に向かって下りてきた。

「Received Number」

そして下りてきたジュエルシードをレイジングハートの中に収納する。

そんなのはとユーノの様子をアースラのブリッジで見っていたリンディは、

「うーん、二人共中々優秀だわ。

このままウチに欲しい位かも。」

頼もしそうに若干の本音も混ぜて呟いた。

そしてアースラモニタールームではクロノとエイミーがフェイトを探していた。

「この黒い服の子、フェイトって言ったっけ？」

エイミーがモニターに映ったフェイトを見ながらクロノに質問する。

「フェイト・テスタロッサかつての大魔導師と同じファミリーネームだ。」

クロノがフェイトのフルネームを答えそのファミリーネームから一つの意見を言う。

「へえ、そっなの？」

そんなクロノの発言にエイミーが興味を持ったらしく続きを求める。

「だいぶ前の話だよ。」

ミッドチルダの中央都市で魔法実験の最中に次元干渉事故をおこして、追放されてしまった大魔導師。」

そのエイミイの質問にクロノが自身が知っている事だけを伝える。

「その人の関係者？」

クロノの発言を聞いてエイミイが軽い調子で推測を言う。

「さあね、本名とも限らない。」

そんなエイミイの推測を曖昧な言葉でクロノが返すとフェイトを探していたモニターがNot foundと示した。

「あゝ、やっぱり駄目だ見つからない。」

フェイトちゃんてばよっぽど高性能なジャマー結界を使っているみたい。」

モニターを見ていたエイミイが少し悔しそうに呟き愚痴を言う。

魔法を使ってサーチャーにバレないようにする方法はある事はあるが、管理局製のサーチャーともなるとかなり高度な技術が必要となる。

「使い魔の犬、たぶんコイツがサポートしているんだ。」

エイミイの言葉を聞いてクロノがモニターにアルフを表示しながら言う。

いくら優秀な魔導師だとしても管理局に見つからないようなジャマ

「結果を張りつつジュエルシードの封印を一人で行う事は出来ない。そう考えた上での結論だった。」

「お陰でもう二個もこっちが発見したジュエルシードを奪われちゃってる。」

言っても無意味と分かった上でエイミィがさらに愚痴を言う。

「しっかり探して捕捉してくれ、頼りにしてるんだから。」

クロノがフェイトの捕捉が困難であることを分かった上でエイミィに頼む。

「はいはい。」

そんなクロノの言葉を軽い調子でエイミィは聞いていた。

その頃フェイト達はジュエルシードがありそうな場所でこっそりと探索するという事を繰り返していた。そしてフェイトとアルフとはある湖にいた。

「フェイト駄目だ、空振りみたいだ。」

アルフが辛そうに言う。

「そう。」

そんなアルフに対してフェイトは自分の不安感を見せないように冷静に呟く。

「やっぱり、向こうに見つからないように隠れて探すのはなかなか難しいよ。」

アルフが愚痴を言うがその口調に緊張感に満ちたものだった。

このままジュエルシードが一つも集まらなかつたらという嫌な予感すらしてしまう。

「うん。」

でももう少し頑張ろう。」

アルフの愚痴を聞きつつも、フェイトは諦めの雰囲気は一切見せず自らの不安を振り払うように言い切った。

曖昧な意識の中、守の視界に急に現れたベルベット張りの部屋。

「またお会いしましたな。」

その真ん中の机にイゴールがいた。

守は自分が寝た事は覚えていたのでこれが夢であることを何となく察した。

しかし三度目ともなるとイゴールの容姿はもう気にならなくなってきた。

「再び夢でお呼び立てしたのはあなたのペルソナについてどう思います。」

そのまま守が聞く姿勢になったのでイゴールがそのまま話を始める。

「ペルソナとはあなたが持つ別の人格の姿であります。故にペルソナはあなた自身でありあなた自身ではありません。」

そうしてイゴールが話した内容はどこか矛盾を含んだ言葉だった。

「どついう事ですか？」

イゴールの言葉の意味が分からなかった守が聞き返してしまつた。

「あなたが望む事とペルソナが望む事が違う事がありつるといふ」とです。」

イゴールが守に分かりやすく簡潔に説明する。

「なのは達が言っていた鋼の事？」

守が自分が意識を失っていた時に聞いた機械仕掛けの悪魔について聞く。

「残念ながらあのような機械仕掛けの悪魔についてはわたくしの専門外でございます。」

イゴールが守の質問に専門外だと答えた。

「じゃあ、あれって…。」

と守が鋼について聞こうとするが、

「今回、わたくしがお話したいのはあなたが持つもう一つのペル

ソナについてであります。」

それを遮ってイゴールが本題を持ち出した。

「あなたの命の危機に現れたペルソナは死を神格化した神タナトスでございます。」

イゴールが守の暴走の時に現れたペルソナの名前を告げる。

「…えっと、死を神格化した神ってなんですか？」

イゴールの説明に守が困惑しながら質問する。

「ふっふっふ、それはあなたが“知っていた”事ですよ。」

イゴールが何かを知っているような雰囲気ですに言う。

「俺の事を知っているんですか!？」

イゴールの言葉に守が食い付くが、

「確かに知ってはおりますが、それはあなた自身で見つける事であります。」

イゴールは守に答えを返さなかった。

「…そうですね。」

イゴールの答えに守が追求を諦める。

「では最後に一言。

くどいようですが、ペルソナとはあなた自身であってあなた自身ではありませんその事をよくよくお忘れ無いように。」

とイゴールが言い終わると守の風景がゆっくりと歪んでいった。

そうして守がベルベットルームから出て、（？）意識が覚めて最初に目に入ったのが、

「…あ、起きた？」

少し心配そうに見ているフェイトだった。

「ん〜寝過ぎた気がするけど何時？」

守が寝起きでぼんやりとした頭でフェイトに聞く。

「えっと、もう夕方だよ。」

ぼんやりとした守を見てフェイトは少し気まずそうに言う。

「…あー。」

フェイトの答えを聞いて守がやや呆れたように声を発する。

この睡眠も含めて守は恐らく一日の半分以上寝ていたのである。いくら寝る子は育つと言っても寝過ぎである。

「えっとご飯食べる？」

フェイトが守が完全に目を覚ましたのを確認してから聞いた。

「食べるけど………ちょっといい？」

守がニヤリと悪戯っぽく笑いながらフェイトに告げた。

台所からトントンと包丁が野菜を刻む音が聞こえる。

それを興味深そうにアルフとフェイトが見ている。

そんな視線を受けながら守が料理を続けていく。

「守はなんで料理ができるんだい？」

守が慣れているような仕草が気になったのかアルフが唐突に聞いた。

「…ふつ。」

とたんに守の雰囲気は哀愁を含んだものになった。

「な、なんだい！？」

聞いちゃ不味かったかい！？」

守の雰囲気にアルフがたじたじとなったが、

「別にアルフは悪くないよ。」

ただ當時を思い出してちよつといじけてただけ。

まあ別に変な話じゃないからいいか。」

と前置きしてから守が話し出した。

「俺の家って翠屋って言うそれなりの人気がある喫茶店をやっているんだけど、その関係でたまに家族も料理が出来るって誤解する人

がいたりしてね。

前に調理実習があった時に皆が俺をに任せようとしてきたから慌てて母さんに教わってね。

てか当日は大変だったよ。

皆が本当に俺に任せてさ一人で作り上げたさ。」

ちょっと怒りが混ざりつつ守が一気に説明した。

「……そっか。」

守の説明を聞いてアルフがちょっと引きぎみに返事を返した。

「ほい、完成。」

とか無駄口を叩いている内に料理が完成した。

メニューは

ご飯と豚肉とキャベツの炒め物、味噌汁といった一般的なものであった。

「うわ、肉少ないじゃない!」

「いや、炒め物があるじゃん!」

アルフがメニューを見てすかさず愚痴って、守がつっこむ。

「ああん!!」

アタシもつとガツツリと肉を食べたいんだよ!?  
文句あるかい!??」

そんな守の反論をアルフが怒りの表情で脅すが、

「アルフ駄目だよ。」

せっかく作ってくれたんだから食べようよ。」

フェイトがすぐにアルフを止める。

「うん。」

フェイトを止められてアルフが悔しそうに口を結んだ。

「…取り合えず食べない？」

守がフェイトとアルフに向かってちょっと気まずそうに言った。

「ああ、うんそうだね。」

えっといただきます。」

「へい。」

いただきます。」

「はい、召し上がれ。」

守がそう言ったのでフェイトとアルフが素直に座って食べ始める。それを待ってから守も食べ始めた。

「うん。」

まあ普通だね。」

食べた直後にアルフが断言した。

「人に何を期待しているんだ。」

アルフの容赦のない感想に守が呆れて言葉を返す。

小学三年生が旨い料理が作れたらはつきり言っただけでミステリーである。しかし守は後に知るそんなミステリーが本当に実在すると言っことに、

「ア、アルフそんな失礼な事言っちゃ駄目だよ。

大丈夫、美味しいよ。」

フェイトはアルフの言葉に注意してから守に美味しいと告げる。

「どういたしまして。」

と守はちよつと苦笑まじりに答えた。

「ごめんね。

ご飯作ってもらって。」

食べ終わってからフェイトが守に言っが、

「いや、ずっと家に缶詰状態だと暇だからまあ気にしないでよ。できる事なら何でもやるからさ。」

守が少し苦笑い気味にフェイトに返す。

「じゃあさ守、家の家事をしろ!!」

といきなりアルフが守に向かって宣言というか命令した。

「はい？」

急なアルフの発言に守がポカンとする。

「暇なんだろう、ならそれぐらいはしてくれていいじゃないかよ」

ポカンとした守さらにアルフがたたみかける。

「ア、アルフ！

流石にそれは……」

「……まあ良いけど。」

フェイトが再びアルフを止めようとするがその前に守が答えた。

「「え！？」「」

守の返事に意外そうに驚くフェイトとアルフ。

「え？ってまあ暇なのは事実だし」

と守があっさりとOKしてした。

「あの、いやだったらいつでも言ってるね。」

フェイトが少し控えめに言うが、

「了解。

じゃあ明日から頑張るからね。」

と守が楽しそうに言うのだった。

そして、守がフェイトに拉致されて10日が過ぎた。

その間、守はアルフが言った通りフェイトの家の家事をしてフェイト達は守の存在にどこか安らぎを覚えはじめていた。

そんな中ジュエルシードはなのは達が、の3つを手に入れ、フェイト達がとの二つを手に入れ残りは六つとなっていた。

「残り六つか。」

とアルフがフェイトに向かって言った。

フェイト達はもう夕食を食べて今は守が風呂場の掃除をしているためフェイトとアルフの二人っきりで話をしていた。

ちなみにフェイトはこれまで時間の節約のためいつもシャワーで済ませていたため、湯槽に浸かるようになったのは最近になってからだったりする。

「たぶん残りのジュエルシードは海の中だと思うんだ。」

フェイトが一つの推測を語る。

「アタシもそう思う。」

アレだけ探しても見つからないって事を考えるとたぶん六つとも海の中だと思う。」

アルフがそれに同意し、その根拠を語る。

「うん。」

でも管理局もたぶんそれに気づいているから、あまり時間はかけられない。」

フェイトが不安要素を述べる。

もし管理局がジュエルシードの場所を先に見つけてしまえばそれを管理局がフェイトがより先に手に入れてしまうし、逆にフェイトが先に見つけても一つ一つゆっくりと探索して封印しては管理局がやって来てしまう。

だからフェイトが出した結論は、

「だから明日、全部封印する!」

というものだった。

確かに管理局が来る前に六つ全てを封印できればなんの問題もないが、

「でも、どうやって?」

アルフの言葉ももつともである。

口にするのは簡単だがそれを実現するのはかなり難しい。

「それは」

そしてフェイトは自分の計画を話し出した。

それはフェイト、なのは、守を巻き込んだ大きなうねりとなっている。

## 第九話（１）（後書き）

明けましておめでとうございます。  
皆様今年もよろしくお願ひします。

祝、愚者誕生日！！

今日（2011年1月11日）に19歳になりました！！  
イエーイとテンションが高い愚者であります！！  
ああ僕も来年は20で成人式だよ。

守

「オイ。」

後書きはそういう事を書く所だっけ？」

いや最近、後書きがカオス化してて意味が分からなくなってきちゃったから普通な事がしたくて。

守

「それでも後書きに誕生日の事言つのおかしくね？」

…後書きってなに書くんだろうな？

守

「え〜。」

いやなんて言うか最近精神的に不調で文章書くのも大変でさ。

守

「それってただのスランプじゃね？」

という訳で後書き終わり！！  
皆様ぜひ次回も見てください。

守

「ちよつ、いきなりしめるな！！」

はあ、新年から大丈夫なのかよ。

皆様これからもよろしくお願いします。」

## 第九話(2) (前書き)

二ヶ月も空けてしまいすみませんでした。

最近分かった事がある。

俺の執筆が遅い最大の原因は家族であると言ったことを!!

## 第九話（2）

フェイト達がジュエルシード六個の回収を決意した朝、テストロッサ家の朝食は少し気まずい空気に包まれていた。

ただあくまでも気まずいそうにしているのはフェイトとアルフだけであり守はいつも通りであった。

その原因が、

「ジュエルシードを集め終わったら、テストロッサさんのお母さんに俺が会うの？」

守が食事を中断してフェイトの話聞く。

「うん。」

母さんが鋼だっけ？、あれに興味があつて。」

フェイトが戸惑い気味に守に告げる。

そうフェイト達が気まずいと感じている原因がこれである。

自分達の都合で勝手に拉致したあげく、母親がいる別次元に連れていくという事に後ろめたさを感じていた。

それに今のプレシアの行動はフェイトもアルフもよく分からない。

もし守がよく分からないと答えたら…と最悪の結果すら予想してしまつ。

「まあ、いいんじゃない？」

そんなフェイト達の不安をよそに守は答える。

そこにはなんの不安や驚きもない、いつも通りの口調だ。

「そういう話をしたって事はもうすぐジュエルシールドが回収が終わるの？」

フェイトとアルフが守の言葉に何かを言いたそうな表情をしていたが守がそのままの流れでフェイトに質問した。

「あ、うん。

うまくいけば今日中には集まるよ。」

フェイトは守が質問をしてくると思ってなかったようで一瞬動揺したが、すぐに答える。

しかし守にはその口調はどこか固く感じた。

「なにか心配事でもあるのかい？」

フェイトの様子が気になったのか守が聞く。

「大丈夫だよ。

ただちよつと無茶するから不安なだけだよ。」

フェイトが守に答える。

その様子をアルフは見てて、フェイトに対して怒っていた。ちよつと？ちよつと所の騒ぎではない。

フェイトが考えたプランは限界ギリギリまで頑張っても上手くいくかわからないものだ。

ジュエルシールドを管理局より先に手に入れてしまうことを目的に考えればわからなくもないがそんな無茶をしてまで手に入れようと思わないでほしいとアルフは思う。

しかしフェイトを止めることが出来ないとわかっているためアルフには何も言えなかった。

「わかった、気をつけてな。  
ご飯作って待ってるから。」

そんなアルフの葛藤をよそに守はフェイトとアルフにいつも通りの言葉をかける。

「…ああ、じゃあ行ってくるよ守。」

守の言葉にアルフが無事に帰れるのかどうか不安に思いながら返す。

「行ってらっしゃいアルフ。」

そんなアルフの不安に守は気付かずいつものように返す。

「…行ってきます。」

そんなアルフを見ながらフェイトもアルフにならって守に言う。  
その口調はフェイト自身も帰って来れるか自信がないらしくアルフ同様、不安が少し混じっていた。

「行ってらっしゃい。」

それに守はやはり気付かずいつものように返す。

そんな守を見ててフェイトは何か複雑な感情が現れたのを感じた。

それは守がフェイトの家に来て少ししてから感じていた。

守と話す度に何か足りないと感じる。

しかしそれがはっきりしないため余計に戸惑ってしまう。

そんな事を考えながらフェイトはジュエルシードがあると思われる海へと向かう。

フエイトはまだ気付かない。  
その足りない“何か”がフエイト自身の中で守の立場を曖昧にして  
いる事を…

フエイトがマンションを出た頃。

なのはとユーノはアースラの食堂にいた。

「今日も空振りだったね。」

アースラの食堂でクッキー等のおやつを食べていたなのはがポツリ  
とユーノに言う。

ジュエルシードが残り六つになってから急にジュエルシードが見つ  
からなくなってしまったのである。

そのため、なのはとユーノはアースラに待機という状態が続いてい  
た。

「うん。」

…もしかしたらけっこう長くかかるかもね。

なのは、ごめんね。」

なのはの言葉に同意してからユーノは唐突になのはに謝った。

「え？」

いきなりユーノに謝られてなのはが疑問に思うと、

「寂しくない？」

ユーノが心配している事を聞いた。

そうなのはが最初にジュエルシード集めをしていた時は家を拠点にしていたためなのははいつも家族と一緒にいられた。

しかし今ではアースラにいるため家族といることができない。

ユーノはその事を気にしていた。

「別にちつとも寂しくないよ。」

そのユーノの言葉になのはが少し悲しそうな声だがはっきりと答える。

「ユーノ君と一緒にだし、一人ぼっちでもけっこう平気。ちっちゃい頃はよく一人だったから。」

よく一人だったからと、なのはは自分の過去を思い出しながらユーノに話し出す。

「家、私がまだちっちゃい頃にね。」

お父さんが仕事で大怪我しちゃって、しばらくベッドから動けなくなった事があるの。喫茶店もまだ始めたばかりで、今ほど人気が無かったから、お母さんとお兄ちゃんがいつもずっと忙しくて。

お姉ちゃんはずっとお父さんの看病で、だから私割りと最近まで一人で家にいること多かったの。

…だからけっこう慣れてるの。」

慣れていると自分の過去をユーノに話す。

それはなのは自身にとって辛い過去であり、なのはの行動原理を作った過去でもある。

「…そっか。」

なのはの過去を聞きユーノが納得すると同時になのはの家族達の結び付きの強さの理由を理解した。

「そう言えば私、ユーノ君の家族の事とかあんまり知らないね。」

自分の事を話してふと疑問に思ったのかなのははユーノについて聞く。

「ああ、僕は元々一人だったから。」

「え、そうなの？」

そうしてユーノから帰ってきた言葉に驚く。

「両親はいなかったんだけど、部族の皆に育ててもらったから、だからスクライヤの一族皆が僕の家族。」

ユーノもなのはと同じように自分の過去を話す。

「そっか。」

なのはがそれを聞き少し気まずいそうになる。

そんななのはの雰囲気を感じてユーノも気まずくなってしまふ。そして何となく思う。

いつも一緒にいたのにお互いによく相手を知らなかったなど、

「ユーノ君いろいろ片付けたらもっというんなお話しようね。」

気まずくなった空気を切り換えるためになのはがユーノに話しかける。

その言葉は今まで一緒にいたのによく知らなかったユーノの事を知りたいというものが含まれていた。

「うん。」

∴いろいろ片付いたらね。」

そのなのはの言葉の意味を感じたのかユーノもなのはに言葉に同意していたが、たぶんそれが無理であろうと思っていた。

(いろいろ片付いたら、

ジュエルシードの問題が片付いたら、そうだね。

きつと私達は…)

なのはもわかつている。

ユーノはジュエルシードを回収するという目的で地球にいる。

もしジュエルシードを集め終わればユーノは自分の世界に戻るだろう。

そうすればなのははユーノと会うことは出来なくなってしまう。

(∴そう言えば私、ユーノ君だけでなく守の事もよく知らないな。)

ふとなのはは守の事を思い出す。

家族がやつと全員が集まった頃にやって来た(?)少年。

記憶がないというのものもあるが、いまだに守の事はよくわからない。

オルフェウスといいあの鋼と言うロボット(?)のようなもの、それにあの刀を持った黒い“ナニカ”。

そんな不思議な力を使う守の事を知りたいと思う。

その力だけでなくその心の在り方についても。

そうなのはが考えた時、アースラのアラームが鳴り響いた。

海鳴市の海上、そこにフェイト達がいた。

「アルカス、クルタス、エイギアス……」

そこでフェイトは詠唱をしていた。

その詠唱に反応してフェイトの足元の魔方陣も広がっていき、その付近にある金色の魔力の光球が大きくなっていく。

（ジュエルシードはたぶん海の中、だから海に電気の魔力流を叩き込んで強制発動させて位置を特定する。

そのプランは間違っていないけど、フェイト。）

そんなフェイトをアルフが見つめて思う。

確かにそのプランならばジュエルシードの微弱な反応をサーチするよりも見つけるという事に関しては簡単に見つかる。

そうアルフが考えている間にフェイトが魔法の詠唱を終え魔法を海に向かって放つ。

そしてはち切れんばかりに魔力を溜め込んだ光球から膨大な雷の性質を持った魔力が海に向かって落ちていく。

そして六つのジュエルシードが発動した。

「見つけた残り六つ。」

フェイトが息を切らせて言う。

（こんだけの魔力を撃ち込んで、さらに全てを封印してこんなフェイトの魔力でも絶対に限界だ。）

そう、先程の魔法で大量の魔力を使った後でジュエルシードを六つ

全てを封印するのは個人の出せる限界を魔力量を越えている。

「アルフ、空間結界とサポートをお願い。」

それでもフェイトは六つのジュエルシードを集めようとする。

「ああまかせといて。」

そんなフェイトにアルフは一切不安の色を見せずに言葉を返す。

（だから誰が来ようが何が起きようがアタシが絶対守ってやる。）

アルフが一人そう強く心に誓い、二人は無謀な戦いに向かった。

「なんとも呆れた無茶をする子だわ。」

アースラのブリッジでフェイトとアルフの様子を見たリンディが少し驚きを含んだ声で言う。

「無謀ですね。」

間違いなく自滅します。

あれは個人が出せる魔力の限界を越えている。」

そんなリンディにクロノが冷静に状況を分析して答える。

「フェイトちゃん!!」

クロノが答えたと同時になのはがアースラブリッジに入ってきて、モニターを見たなのはが悲鳴に似た叫びをあげる。

「あの、私急いで現場に…」

そして、なのはが何時もの様に現場に行こうとした瞬間、

「その必要はないよ。」

ほおって置けばあの子は自滅する。」

なのはの言葉を遮るようにクロノが言った。

「仮に自滅しなかったとしても力を使い果たした所で叩けばいい。今のうちに捕獲の準備を。」

「了解。」

なのはがクロノの言葉に驚いている間に、クロノがクルーに指示を出していく。

「私達は常に最善の選択をしないとイケないわ。残酷に見えるかもしれないけどこれが現実。」

クロノの指示を聞いて納得仕切れない表情をしているのはに向かつてリンディが説得するように言う。

「でも…。」

リンディの言葉を聞いて、なのはが黙ってしまふ。確かにリンディの言葉は正しい。

もし今フェイトの確保に動いてしまえばジュエルシードの封印作業も同時に行つ必要性がありあまり効率的ではない。

フェイトの捕獲とジュエルシードの封印。

これが目的であるアースラの立場で言えばクロノの指示は効率的にその目的を達成させる事ができる。

それをなのはは理解する事ができるが、何かはつきりしない感情がなのはの中に渦巻いてた。

（行って。）

すると急に聞き慣れた念話が聞こえた。

その頃海上にいたフェイト達はかなり追い込まれていた。

アルフはジュエルシードの竜巻によって拘束されてしまい。

フェイトは過度な魔力不足でバルディッシュの魔力刃維持さえできない状態だった。

そんな時だった。

急に結界内に大きな魔力が入ってきた。

その反応に該当する人間はフェイトとアルフの中には一人しかいなかった。

そしてフェイト達がそこを見るとなのはがいた。

「フェイトの邪魔をするなあー！」

すぐにアルフが反応してジュエルシードの拘束を解いてなのはに向かって行ったが、

「違う。」

僕達は君達と戦いに来たんじゃない。」

「ユーノ君!？」

そのアルフをユーノが止める。  
そんなユーノを見てなのはも驚く。

「馬鹿な!？」

なにやってるんだ君達は!！」

アースラブリッジからクロノがなのはとユーノに向かつて怒鳴る。  
そうなのはとユーノは“勝手”に転送ポートを使って現場に行った  
のである。

(ごめんなさい。

命令無視は後でちゃんと謝ります。

だけど、ほっとけないの!!

あの子、きつと一人ぼっちなの。

一人きりが寂しいのは私少しだけ分かるから!！」)

そんなアースラになのはは念話で必死に伝える。

そう高町　なのはは過去の経験から一人ぼっちという事に敏感にな  
っていた。

そのためかつての自分と似ているような雰囲気があるフェイトの存  
在がほっとけなかった。

「フェイトちゃん。

手伝って、ジュエルシードを止めよう。」

そのままなのははフェイトの目の前に移動してレイジングハートを  
フェイトに向ける。

するとレイジングハートの先から桜色の魔力がバルディッシュに向

かって注がれた。

「Power Charge」

魔力が注がれたバルディッシュから魔力刃が再び現れる。

「二人できっちり半分個。」

急なのはの行動にフェイトが戸惑っているのかなのはが言う。

なのはがフェイトに魔力を分けている間ユーノがジュエルシードの竜巻を鎖の形状のバインドで拘束しようとしていたが、六つもあり翻弄されていたが、アルフがユーノの様子を見て気が変わったのかジュエルシードに向かってバインドをかけた。

「ユーノ君とアルフさんが止めてくれる。

だから今の内！！

二人でせーので一気に封印。」

そんなユーノとアルフの様子をなのはが見てフェイトに言い、砲撃を撃ちやすい位置へと移動しながらレイジングハートを音叉型のシールドモードにする。

一方フェイトは困惑していた。

フェイトはなのはの家族である守を誘拐した人間であり恨まれてい  
ると思っていた。

そんな自分に魔力を分けてどうしたいのだろうか  
とフェイトは戸惑う。

「Sealing form Set up」

そんなフェイトの悩みを振り払うようにバルディッシュが封印のた  
めの形態に変わる。

「バルディッシュ?」

指示もしていないのに行動する事が珍しい己のデバイスにフェイト  
は困ったようになのはの方を見るとなのはは笑ってフェイトに返す。  
それを見た時、フェイトは取り合えずジュエルシードを回収しよう  
と思った。

母のため等ではなくただこの少女と協力して、

「デイバインバスター、フルパワーいけるね?」

なのははフェイトが魔法の準備を始めたのを見て、レイジングハー  
トに確認を取る。

「All right my master」

そして何時も通りに返って来る返事に喜びを感じてレイジングハー  
トを構える。

その瞬間、ジュエルシードに変化が起きた。

ジュエルシードに明確な意思と呼べるものはない。

しかしジュエルシードは目の前のなのはとフェイトという障害に対  
してこのまま封印されるといふ事を悟った。

しかしそれを嫌ったジュエルシードは封印される事を避けるために  
目の前のなのはとフェイト以上の力を手に入れる手段を模索し一つ  
の結論にたどり着きそれを実行した。

「うわぁ!?!?」

「くっ!？」

ジュエルシードの竜巻を個々にバインドで拘束していたユーノとアルフは急に強い力で吹き飛ばされた。

「ユーノ君!？」

アルフさん!？」

「アルフ!？」

なのはとフェイトが互いの仲間の心配をすると同時にジュエルシードを見て驚いた。

「ジュエルシードが引き合ってるの!？」

なのはが自分が見ている光景を呟く。

同時に気付く。

アレは自分とフェイトでも対処仕切れない程の力に満ちている事を、

「ジュエルシード六つ!!」

急速に結合していきます!!」

そしてアースラでもその様子は確認されていた。

ジュエルシードの竜巻が個々にバラバラに活動していた物が一つに集まっている様子をモニターは写していた。

「なのはさんとユーノ君が危ないわ!!」

すぐに回収を!!」

リンディが慌てて命じるが、

「駄目です!!」

ジュエルシードの暴走により座標の固定ができません!!」

クルーが慌てて返す。

結界内はジュエルシードの暴走によって激しい魔力流が発生していて転送に適したゲートの位置を固定できなくなっていた。

「クツ!!」

クロノはジュエルシードが結合していく様子を見て苦い思い出を思いうち出す。

ロストロギアの暴走が引き起こす悲劇を、

「え!？」

艦長、海上に空間の歪みが発生!!

何か来ます!!」

ジュエルシードの様子を調べていたエイミーが何かの別の反応をキヤッチしリンディにつげる。

そしてアースラクルーがモニターを注目すると空間に亀裂が発生し、そこから鋼色の装甲をした手が現れた。

その空間に亀裂が発生する少し前海上でジュエルシード六つが結合し膨大な魔力が発生する。

その膨大な魔力はフェイトのマンションにいた守にも届いた。

「っ!？」

何して……!？」

その膨大な魔力の波長に守が驚いた瞬間、激しい頭痛に襲われた。

「くっ、つああああ!？」

その苦痛から守が悲鳴を上げるそして…

「…ふう。」

なんでこう毎度毎度叩き起こされるのかな？」

守の纏う空気が別のものになった。

それは以前に鋼という機巧魔神を操っていた時の刃と名乗っていたものだった。

「さてとあのままじゃあ流石に不味いし行きますか。」

と刃は呟き、“なにもない空間”に向かって話しかけた。

「それじゃあ頼むよ。」

「……え？」

そんな事を言われても僕にはどうしようも出来ないよ。

取り合えず今はあっちの方が大事だよ。」

と何か話し合った後、刃の影が黒く染まる。

その影を引き裂くようにして鋼と呼ばれた機巧魔神の現れた。

もっとも部屋の大きさを考慮してか影からは鋼の上半身のみが現れる。

「さて行きますか。」

その一言と共に刃と鋼はフェイトのマンションから消えた。

突然現れた鋼色の装甲の手、それはなのは達には明らかに見覚えのあるものだった。

そしてその手の平には守（刃）がいた。

「やあ、えつと……。そこの白黒しろくろ&狼と……。男の子?。」

急に現れた刃になのは達が茫然としていると刃がなのは達の事を適当に呼び名をつけて呼んだ。

「白黒つて私とフェイトちゃんの事!?

私はなのは、高町 なのはだよ。

でも、……。刃君なんでここにいるの?」

なのはが刃の適当な呼び名に驚いてから自己紹介をしてから質問を返す。

「アタシはアルフだ!」

「僕はユーノ・スクライヤです!」

後、僕は男です!」

そしてなのはに便乗してアルフとユーノが自己紹介を怒り気味に行う。

「……なんで。」

その中でフェイトだけが呆然と刃を見ていた。

「うおおおお、い、いきなりだね。」

まあ特に深い理由はないけど、ただあんなものがあれば気にはなるさ。」

ユーノとアルフの迫力に刃が驚いた後なのはの質問に対して刃がジユエルシードの集合体を指して言う。

「無理だよ!!」

アレは人がどうこうできるものじゃない!!」

刃の軽い口調が気になったらしくユーノがすぐに反論する。

なのはもその気持ちはわかる。

今のジユエルシードは無限に近い量の魔力を放出することができる。その状態ではどんな攻撃をしてもジユエルシードに届くことはできない。

「まあ、まかせてよ。」

ユーノの反論を適当に聞き流して刃は鋼の腕から飛び降りていき、鋼の腕が空間の裂け目の中に戻って行く。

そのまま刃が重力に引かれて落ちていたが、

「来い、タナトス。」

ただそれだけ呟くと刃の落下が止まる。

そしてその背後からペルソナ、タナトスが現れる。

「え！？……あれって？」

その姿を見たなのは達が驚く。

それは前に海鳴公園に現れたペルソナだった。

しかし何か違和感を感じる。

力強い雰囲気は感じるが、あの時の強烈な威圧感を感じない。

「さて、タナトス。

…ブレイブザッパー。」

なのは達が違和感を拭えずに混乱している間に刃がタナトスに命じる。

その命令を受けてタナトスがジュエルシードの融合体に向かって刃を降り下ろす。

ただそれだけの単純な攻撃。

しかしそれはジュエルシードの集合体を簡単に切り裂きジュエルシードが結合を維持出来ないほどのダメージを与えた。

「……………」

その光景を見てなのは達は絶句した。

あの爆発寸前だったジュエルシードの集合体をただの刀の一振りですilentさせた刃の圧倒的な力に寒気を感じる。

「ほら封印しないの？」

しないなら憂さ晴らしに壊していい？」

呆然としているなのは達に向かって刃が悪戯っぽく笑ながら言った。

「ちょ、ちょっと止めてください!!」

その言葉を聞き、ユーノが悲鳴を上げそれを聞いたなのは達も立ち直った。

「そ、そっだよ。」

ダメに決まっているだろ。」

アルフもユーノに続いて言う。

「え、いきなり引つ張りだされる僕の身にもなってよ。」

「アタシが知るか!!」

刃がたるそうに言った後、アルフが即つつこんだ。

「……。」

フェイトちゃん早く封印しようか?」

アルフと刃のやり取りを聞いて、なのはが思い出したように言う。  
しかし刃のタナトスの攻撃によりジュエルシードは点滅する程度の事しかできなくなっており協力する必要性があるかどうかすら怪しい。

「う、うん。」

本当に一緒に封印する必要があるのか疑問に思いながらも、空気を読んで一緒に封印しようとする。

「デイベイイイイン」

そのままなのはがレイジングハートを構えて封印の準備をする。

「バルディッシュ。」

「Yes Sir」

そのなのはに合わせてフェイトが構えるが普段に比べて積極性の欠けた声だった。

そんな主の心を察してかバルディッシュの反応も歯切れが悪かった。

「バスタアアアアア!!」

そのままなのはが砲撃を行う。

「はあ！」

フェイトの掛け声と共にバルディッシュが広域殲滅魔法のサンダーレイジを発動させるが、それは本当の威力より低いものだった。しかし今のジュエルシードには十分過ぎるものだった。

「……ジュエルシード、六個全部封印しました。」

エイミーが茫然と言う。

「……ふう、最悪の事態は免れたけど彼の謎は深まるばかりね。」

エイミイの報告を聞いてリンディが一息ついた後、刃を見つめる。

「……………」

そしてクロノは何かを耐えるようにモニターを見詰めたまま拳を握りしめていた。

海上のなのは達はなのはとフェイトを中心に沈黙していた。

海上ではジュエルシードの封印が終わり沈黙がその場を支配した。

「……………友達になりたいんだ。」

その沈黙を破ってなのはがフェイトに言う。

「……………」

なのはの言葉を聞いてフェイトが戸惑う。  
友達になりたい。

どうしてそんなことを思うのだろう？

私はこの子を何度も傷付けて、この子の家族まで拐ったのに。  
そんな事をフェイトが混乱した頭で考えていると、

「ん？」

何か来るよ。」

唐突に刃が言った。

と同時に海上に雷が落ちた。  
その雷撃はなのはとフェイトと刃に向かって落ちてきた。

「母さん!？」

う、あああああ!！」

「フェイトちゃん!？」

きゃああああ!！」

「…タナトス。」

フェイトに直撃して、なのはにはギリギリ当たらず、刃は涼しい表情でタナトスを呼び戻して雷撃を防ぐ。

雷撃がフェイトに直撃して落ちて行く中アルフがフェイトを抱き上げてからジュエルシードを取りに行こうとする。

しかしジュエルシードに届く直前その手はクロノのデバイスS2Uによって防がれた。

「邪魔をするなあ!！」

「うわああああ。」

しかしそのままアルフが怒りの表情でS2Uごとクロノを投げ飛ばす。

そしてそのままジュエルシードを六つ確保しようとするが、

「三つしかない!！」

六つあった筈のジュエルシードは三つ無かった。

すぐにアルフがクロノを見るとクロノの手にはジュエルシードが三

つあった。

「あああああ!!!」

アルフがそれを悔しそうに見た後、海に向かって魔力弾を放った。その魔力弾が巨大な水柱を発生させて、視界を悪くする。

一方、アースラでも海上に雷撃が落ちたと同時に同じ攻撃を受けていた。

「逃走するわ。  
捕捉を。」

雷撃の衝撃に耐えながらリンディが指示を出す。

「ダメです。  
雷撃で全センサーが停止。」

「機能回復まで二十六秒ダメです。  
追いきれません!!!」

そのリンディの指示を実行しようとするがアースラのセンサーにダメージがあり、結果的にフェイトとアルフを逃がす事となった。

「……………機能回復まで対魔力防御。  
次弾に備えて。」

「はい。」

そして静寂を取り戻した海上を見ながら次の指示を出す。  
さらに海上にいる“なのは、ユーノ、クロノ”を見てから一つ指示  
を付け加える。

「……………それからなのはさん、ユーノ君、クロノを回収します。」

あの水柱が発生した時にいなくなったのがフェイトとアルフだけ  
はない。

いくらモニターを見ても刃の姿がどこにもない。

「はあ、本当に何者なのかしら彼は？」

そのリンディの呟きに誰も答えられなかった。

## 第九話（2）（後書き）

本当に時間をかけてすみませんでした。

しかしあえて言わせてもらいます。

僕の執筆には障害が多いと言うことを！！

大学がある時は勉強に追われ、休日では家族の用事に巻き込まれてパソコンも携帯も使う時間がなくなってしまう。

仮に時間を手に入れたとしても時間が空いてしまい前に書いた内容を忘れて……………。

ああ、世界（家族）の悪意が見えるようだよ。

## 第十話（前書き）

今更ですが今回の地震で被災された方全ての人の健康と一日でも早い復旧を祈ります。

## 第十話

海上に静寂が訪れてアースラに戻ったのはとユーノを待ち受けていたのはリンディからの説教だった。

「指示や命令を守るのは個人のみならず集団を守るためのルールです。

勝手な判断や行動があなた達だけでなく周囲の人たちもおも危険に巻き込んだかもしれないという事。

それは分かりますね。」

「はい。」

やや怒りの混ざった口調でリンディが言い、なのはとユーノが反省をした態度を見せる。

確かに正論だろう。

ジュエルシードの結合はなのはが来たことによつて始まったようなものであるから、もし刃が来てなかったらと考えるとゾツとしてしまふ。

「本来なら厳罰に処す所ですが、結果としていくつか得る所がありました。

よつて今回の事に関しては不問にします。」

「ああ。」

リンディが言った事になのはとユーノが反応する。

確かに結果的に見ると刃の事だったり、あの紫電を撃った人物がフイト達との繋がりがあると考えると得た物はあると言える。

「ただし二度目はありませんよ。  
いいですね？」

「はい。」

「すみませんでした。」

最後にリンデイがなのはとユーノに念押しをしてリンデイの説教は終わった。

「さて、問題はこれからね。」

クロノ事件の大元について何か心当たりが？」

リンデイが説教を終えると事件の捜査へと話題を切り換える。

「はい。」

エイミィ、モニターに。」

「はい、はい。」

「あら。」

クロノがエイミィにモニターを出すように指示をして現れた人物にリンデイは驚きを示した。

「そう、僕らと同じミッドチルダ出身の魔導師、プレシア・テスト  
ロッサ。」

専門は次元航行エネルギーの開発。

偉大な魔導師でありながら違法研究と事故によって放逐された人物

です。

登録データとさっきの攻撃の魔力波動は一致しています。

そしてあの少女、フェイトは恐らく……」

「フェイトちゃん、あの時母さんって、」

「親子ね。」

クロノがモニターに現れた女性、プレシア・テストロツサについて大雑把な説明をしてフェイトとの関係についてなのはの補足も追加されてリンディがはつきりとした答えを言う。

「そ、その…驚いていたっていうより、何だか恐がっているみたいでした。」

なのはがフェイトの様子から一つの疑問をリンディに発言する。

「エイミィ、プレシア女史についてももう少し詳しいデータを出せる？放逐後の足取り、家族関係、その他なんでも。」

「はいはい。」

すぐ探します。」

なのはの言葉を聞いてリンディは思考するが、プレシア・テストロツサという人物の形がはつきりしないためすぐにエイミィに調べるように指示した。

その頃フェイトとアルフは雷撃でアースラのセンサーが麻痺してい

たのでプレシアのいる時の庭園へと転移していた。

そして転移したフェイトを待っていたのは再びプレシアからの鞭打ちだった。

しかし今回は余程怒っているのか、かなり激しいものでフェイトは辛そうに息をするだけだった。

「はあ、はあ。

あれだけの好機を前にして、ただぼーとしているなんて。

おまけにあの少年まで逃がして。」

激しい鞭打ちだったためプレシア自身もかなり疲労していた。

しかしそれでもその怒りは収まりきらないようだった。

「…………ごめんなさい。」

フェイトはただ謝るしかなかった。

言い訳などなんの意味を持たないと理解しているからだ。

「酷いわ、フェイト。

あなたはそんなに母さんを悲しませたいの？」

プレシアは鞭を強く握り締めてから再び鞭をフェイトに打つのだった

一方アースラではエイミィがプレシア・テストロッサについて調べたデータを説明していた。

「プレシア・テストロッサ。

ミッドの歴史で26年前は中央技術開発局の第3局長でしたが、当時彼女個人が開発していた次元航行エネルギー駆動炉、ヒュード

ラ使用の際に違法な材料を持って実験を行い、失敗。結果的に中規模次元震を起こしたことが原因で中央を追われて地方へと移動になりました。

「ずいぶん揉めたみたいです。」

失敗は結果に過ぎず、実験材料にも違法性はなかったと。

辺境に移動後も数年間は技術開発にたずさわっていました。

「しばらく後行方不明になって、それっきりですね。」

ざっとエイミイが調べた内容をリンディに告げる。

「家族と行方不明になるまでの行動は？」

「その辺のデータは綺麗さっぱり抹消されちゃってます。」

「今、本局に問い合わせ調べてもらってますので。」

エイミイが調べあげたデータを聞いてからリンディが質問をする。

その質問はフェイトとの関係性は本当に親子なのかという事とジユエルシードを集めている目的を調べるためのものだった。

しかしエイミイの調べたデータにはその重要な部分についてはなかったようだった。

「時間はどれくらい？」

「一両日中にはと。」

本局からのデータの確認にかかる時間をエイミイから聞いた後にリンディが思考し始める。

「プレシア女史もフェイトちゃんもあれだけの魔力を放出した直後では、そうそう動きも取れないでしょう。」

その間にアースラのシールド強化もしないといけないし、あなた達は一休みしておいた方が良くいわね。」

「あ、でも…。」

そうして出た結論がなのか達を休ませると言う事だったかなのはとしては命令無視をしたと言う負い目があるので何かをしたかったのだが、

「特になのはさんはあまり長く学校を休みつぱなしても良くないでしょう？」

「一事帰宅を許可します。」

「ご家族と学校に少し顔を見せた方がいいわ。」

「…はい。」

リンデイの説得を受けてなのはは諦めたように答えた。

その頃刃はとある場所で一人の女性と会っていた。

「どうもお久しぶりです律都さん。」

「あら、その様子だと記憶は戻ったのかしら？泥棒さん。」

相手は前に守が会った律都でだった。

「そんな訳ありませんよ律都さん。」

「と言うか泥棒扱いは酷くないですか？」

「泥棒じゃない。」

「うわぁ…断言したよこの人。」

刃と律都が親しげ（？）に話す様子から何かしらの知り合いらしい。

「…で何の用かしら？」

しばらくかなりどうでもいい会話をした後、律都が本題に入ろうとしました。

「僕というより話があるのは…。」

そう言っつて刃は何もない空間を指す。

「あら珍しい事もあるのね。」

で何かしらの？」

律都が何もない空間にいるナニカを見てそれと話を始めた。

時の庭園ではフェイトがプレシアから受けた鞭打ちにより気を失っていた。

「フェイト!!」

「フェイト!!」

倒れているフェイトを見たアルフがフェイトの名前を叫びながらフェイトを抱き上げる。  
そのままフェイトの様子を見てから怒りの形相でアルフはプレシアがいる扉を睨み付けた。

「たった九つ。」

それでも次元震をおこせるけどアルハザードには届かない。」

プレシアは時の庭園の奥にある空間にいた。

そこでプレシアはジュエルシードを見つめて苛立たし気に言った。

「ゲホツ、ゲホツ。」

…もうあまり時間はないわ。

私にもアリシアにも。」

急にプレシアが派手に吐血した。

その出血量からしてかなり重度の病気を患っているようだった。

しばらく発作の傷みが収まるまでプレシアが大人しくしていると急に扉が爆発した。

プレシアがその方角を見ると、アルフが怒りに満ちた表情でプレシアを見ていた。

そんなアルフをプレシアは冷めた目で見てみるとアルフがプレシアに向かって走り出した。

そのアルフに対してプレシアが防御の障壁を張る。

しばらく拮抗をしていたが、アルフの叫びと共に障壁を破る。

そしてそのままプレシアの胸ぐらを掴む。

「アンタは母親で、あの子はアンタの娘だろ！！」

あんなに頑張ってる子に、あんなに一生懸命な子に、なんであんなに酷い事が出来るんだよ！？」

アルフは自分の怒りに任せてプレシアの胸ぐらを掴んだまま叫ぶ。そしてそのプレシアの目を見たアルフは気づくプレシアが全く興味もなく見ている事に。

アルフがそれに気づいたと同時にプレシアがアルフの腹に魔力弾を撃ち込んでダメージを与えた。

「がはあっ!!」

そのダメージでアルフが壁に吹き飛ばされる。

「あの子は使い魔の作り方が下手ね。

余分な感情が多すぎる。」

そんなアルフをプレシアが見て感情を感じさせない声で呟く。

「フェイトは…アンタの娘はアンタに笑って欲しくて優しいアンタに戻って欲しくてあんなに…ぐう！」

殺傷設定で撃たれたのかアルフは出血していた。

しかしそれでもアルフはプレシアに向かってフェイトがプレシアに求めている事を訴えた。

「邪魔よ。

消えなさい!!」

しかしそのアルフの言葉をプレシアは無視してアルフに止めの魔法を放った。

この時、アルフはとっさの判断で時の庭園からの転移をしていた。アルフに止めの魔法を放ってからしばらくした後プレシアはフェ

イトに鞭を打った部屋に戻っていた。

「フェイト、起きなさいフェイト。」

そしてフェイトを見下ろして声をかける。

「……はい、母さん。」

プレシアが声をかけた事より目が覚めたフェイトはまだ完全に覚醒しきつてない頭でプレシアの言葉を待った。

「貴方が手に入れてきたジュエルシード九つ。これじゃあ足りないの。」

最低でも後五つ、出来ればそれ以上急いで手に入れてきて母さんのために。」

「はい。」

そしていつものようにプレシアが一方的にフェイトに告げてただフェイトが答える。

その明らかに親子がするものではない会話をして起き上がったフェイトは自分にかけられた毛布のようなマントに気がついた。

「アルフ？」

その正体が己の使い魔の物である事を悟ったフェイトが疑問を呟くと、

「ああ。」

あの子は逃げ出したわ。

怖いからもう嫌だつて、必要ならもつと良い使い魔を用意するわ。」  
プレシアがフェイトに反論を許さないとも言わんばかりにアルフについて嘘をフェイトに言った。

「忘れないで貴方の本当の味方は母さんだけ。

…良いわねフェイト。」

最後にプレシアはフェイトに念を押すかのようにやや強い口調で言葉を付け足した。

「はい…母さん。」

フェイトも理解をしていたアルフが逃げた訳ではない事を母が嘘をついていることも。

しかし、それでもフェイトはプレシアの言葉に従う事を選んだ。きつと…いつか優しい母に戻ってくれるから。

そんな希望を胸に抱いて。

プレシアの追撃から逃れる事が出来たアルフだったが、その体には無数の傷があり出血している部分もあった。

(と、とりあえず逃げる事ができたけど…もう動けない。)

まどろんだ意識の中でアルフは自分の状況を確認する。

(あのババア、絶対にフェイトの事を娘だと思っちゃいけないよ。このままじゃあきつとフェイトは不幸になっちゃう。

…けどアタシには何もできない。)

アルフは自分に出来る事考えるが、血を流し過ぎたためアルフの意識は落ち始めていた。

(…畜生…フェイト。)

最後にアルフの意識が落ちる時に見えたのは自分を心配そうに見る老人と少女だった。

プレシアとの会話を終えたフェイトは一人で疲れた体を引きずってマンションへと戻っていた。

「っ…。」

パタンとマンションのドアが閉まると同時にフェイトは自分の孤独を強く感じた。

普段ならマンションに戻れば自分のそばにアルフがいて守が迎えに来てくれた。

しかし今はアルフも守もどこにいるかわからない。

そんな寂しさを誤魔化すようにフェイトは奥の部屋へと早足で歩いた。

「…え？」

そして奥の部屋に入ったフェイトはソファーにいたヒトを見て驚いた。

「zzzz」

そこにはいる筈のない守がソファで寝ていた。

「…ふあゝあ？」

あ、お帰りテストロッサさん。」

フェイトの気配で目が覚めた守がいつものように挨拶をする。

その姿に刃の気配は全く無かった。

その守を見ていて最初は驚きしか感じなかったが、だんだん怒りのようなモノがフェイトの中に込みあがってきた。

「…どうしているの？」

フェイトはその怒りを抑えようとするが抑えきれず少し怒りを含んだ声で言う。

「何を怒っているの？」

…あれ、でも何時から寝てんだらう？」

なんとなくフェイトの怒りを感じ取った守が戸惑ったように答える。その瞬間フェイトの中で何かが壊れた音がした。

「ふざけないで！！」

どうして君があの時勝手に現れて、勝手にいなくなったの！？

君がいれば、アルフも母さんもきつと…きつと！」

「????？」

始めてフェイトが怒る様子を見て守は混乱する。

フェイト自身も自分が言っている言葉が滅茶苦茶なのを自覚しているようだったが、止められないようだった。

「あ、あの…何の話？」

フェイトを落ち着かせようとして守が控えめにフェイトに質問する。

「…もういいよ。」

その質問を聞いてフェイトは冷静になったのかさつきとは打って変わって冷たい声でそれだけ言って、そのまま部屋に戻ってしまった。

「…えっと、始めて怒った所みたなー。」

取り残された守は困ったようにフェイトの部屋を見つめて茫然と呟いた。

一方アースラから家に帰ったなのはは翌日、何時ものように学校に行ってアリサとすずかに会っていた。

そこでアリサから奇妙な犬を拾ったとの話を聞いてその犬に覚えのあったなのははアリサの家に行った。

そして予想通りそこにいたアルフからフェイトとプレシアについて話を聞いた。

そうしてなのはは決意する。

フェイトと話し合い。

守を取り返してジュエルシード事件を終わらせる事を。

翌朝、なのはは海鳴公園に来ていた。

もちろんそこにはユーノとアルフがいた。

そこで、なのは達は待っていた。

「…ここならいいね。  
出て来てフェイトちゃん。」

人の気配を感じて、なのはがその正体に確信をもって呟く。

「Scythe form。」

その聞き覚えのある音とともにフェイトがバルディッシュを持って、電柱の上に立っていた。

「フェイトもうやめよう。」

あんな女の言う事もう聞いちゃだめだよ。

フェイトこのまんまじゃあ不幸になるばかりじゃないか。

…だからフェイト！！」

アルフがフェイトの顔を見て無駄と理解しつつもすぐに説得をする。

「だけど…それでも私はあの人の娘だから。」

そのアルフの言葉を聞いてフェイトが顔を振って弱弱しく呟く。  
その言葉を聞いて、なのはがバリアジャケットとレイジングハートを展開する。

「ただ捨てればいってわけじゃないよね。  
逃げればいってわけじゃあもつとない。  
きっかけはきつとジュエルシード。」

だから賭けようお互いが持っている全部のジュエルシード！！」

なのはがフェイトの意思を理解した上でなのはの考えを言う。

そう…なのはとフェイトはジュエルシードがなければ一生関わる事

がなかっただろう。

そのジュエルシードが今の二人を繋げている物であり縛りつけている物でもある。

「Pull out.」

そしてレイジングハートとバルディッシュが持っているジュエルシードを取りだす。

「それからだよ…全部それから。」

なのはがそのジュエルシードを見て言う。

プレシアについても気にはなるが、なのははジュエルシードについて終わらせようと決意している。

「私達の全てはまだ始まってもない。

だから本当の自分を始めるために…始めよう最初で最後の本気の勝負!」

そう、ジュエルシードを通しての繋がりではなくただ純粹に彼女の事を知るために。

戦う事で…ただ気持をぶつける事で。

…ところで彼女達は一人忘れていないのだろうか？

そう高町 なのはの家族の高町 守である。

その守は、

「zzzz…」

何時ものようにソファで寝ていた。

「ん、テストロツサさん？」

ゆっくりと目が覚めた守はぼんやりとした意識でフェイトを探す。昨日はフェイトが沈黙を貫いていたため、守とフェイトは一言も話す事も無かった。

別に沈黙している事が守にとって気まずいという訳でもなかったが、たまにフェイトが何か言いたげにこちらをチラチラ見ていたのが気にはなっていた。

そして一日たった今なら頭も冷えて何か話してくれるかも知れないと思いフェイトの姿を探すが、フェイトの姿はどこにも見当たらなかった。

「あ、あれ？」

テストロツサさん？」

ふと不安になって台所に行くと、そこには一応作って置いた朝ご飯がフェイトの分だけ食べてあった。

「…え、えつと？」

どこかに出かけた？」

…その通りである。

## 第十話（後書き）

祝！！一周年

バチバチバチ

去年の今頃から書き始めた僕の初作品。

ただ勢いに任せて始めましたがこの一年は色々楽しかったです。

（月一更新という悲劇があったがorz）

無計画に突っ走ってすぐに壁にぶつかって必死に考えた日々。

計画を練ろうとすれば詰まって無限ループに引っ掛かったり考えが

180度変わったり大変だった日々。

執筆をしようとしてしている時に限って家族が予定を入れて書けなくなる日々。

そんな事もありましたがもうすぐ無印の終わりが見えてきました。

これも読者の皆様のおかげであります。

これからも頑張っていくのでよろしくお願いします。

## 第十一話（前書き）

更新遅れて本当にすみませんでした!!

大学と執筆の両立が上手く出来ないよゝ畜生!!

もしも良い知恵があつたら教えてください!!

言い訳はこれくらいにして本編をどうぞ。

最後に急いで書いた関係上、なのはとフェイトの戦闘は少略してしまいました。

ホントにごめんなさい。

## 第十一話

桜色のシューターと金色のランサーが海鳴公園の上空で飛び交う。そしてなのはとフェイトの魔法がぶつかりあう。

その光景は今までのフェイトが優勢と言うという物では無かった。なのはがシューターを器用に扱いフェイトを攪乱していく。

フェイトも速さを生かしてなのはに攻撃していく。

互いの長所を生かして完全に五分五分の戦いをしていた。

その攻防がある程度続き、二人がある程度の疲労を示し始めた時。フェイトはバルディッシュを掲げて集中し始めた。

「Phalanx Shift」

バルディッシュが音声を発して大量のランサーが待機する。

その様子になのはがレイジングハートを構えるが、空間に発生したバインドに腕を捕えられる。

それはフェイトのライトニングバインドであった。

（まずいフェイトは本気だ。）

その一連の行動を見てフェイトが何をしようとしているかを理解してアルフが慌てる。

（なのは、今サポートを、）

アルフの言葉を聞いてユーノがなのはを助けに行こうとしたが

「ダメエエエ!!!」

なのはがそれを断る。

（アルフさんもユーノ君も手出さないで。  
全力全開の一騎打ちだから、私とフェイトちゃんの勝負だから。）

なのはがユーノとアルフを止める。

（でもフェイトのそれは本当にまずいんだよ。）

なのはの言葉を聞いてもフェイトが撃とうしている魔法の破壊力を  
知っているアルフが心配をするが、

「平気！」

となのはが気合の入った声で返す。  
その時、

「何、この状況？」

と言う声がユーノ達の後ろから聞こえてユーノ達が振り向くと、

「説明してくれない？」

拉致されていた筈の守がいた。

その光景をなのはとフェイトも見ていたが彼女達には戦闘を中断する理由にはならなかった。

「フォトンランサーフアランクスシフト。  
撃ち碎け、ファイア!!!」

フェイトの言葉と共に待機していた大量のランサーがなのはに向か  
つていき、そしてなのはに命中した。

「なのは!」

「フェイト!」

その攻撃を見てユーノとアルフが互いの相方を心配する。

「あの説明を…。」

守が困惑気味にその様子を見る。

そしてフェイトが撃ち終わると残ったランサーの残骸を集めて一つ  
のランサーを作る。

大量のランサーによって煙が発生していたのでなのはの姿は見えな  
かったが、なのはがいた辺りをフェイトが見ていた。

そして煙が晴れるとそこには…

「痛ったあゝ。」

撃ち終わるとバインドつても解けちゃうんだね。」

やや疲労の色はあるもののなのはの無事な姿があった。

「今度はこっちの、」

「Divine」

「番だよ!」

「Buster」

その事にフェイトが驚愕している間になのはは砲撃魔法を撃った。それを打ち消すために手元に残ったランサーを撃つが元々、魔力の放出に優れているなのはの砲撃には焼け石に水のようなものだった。あっさりとしてフェイトのランサーを消し飛ばしフェイトに向かってきた砲撃をフェイトは防御した。その砲撃は命中したと同時に大量の魔力を削っていく。

（直撃：でも耐えきる。

あの子だって耐えたんだから）

フェイトはなのはと違って防御に特化していない。

それでも理屈ではない感情的な思いがフェイトを支えていた。

そしてなのはのデイベインバスターの放出が終わる。

その事にフェイト安堵の息をつく。

耐えきる事が出来たがかなりギリギリの所までフェイトは追い詰められていた。

「はあはあ…？」

しばらく息を整えていたフェイトだったが頭上に集まっていく光を感じて頭上を見ると、

「受けてみて、デイベインバスターのバリエーション。」

其処にはこの戦い、最後の切り札を発動させようとしていたのが居た。

「Starlight Breaker」

そのレイジングハートの声と共に戦闘空間に散らばっていた魔力が

集まって巨大な魔力の塊へとなっていた。  
もちろんそれをただで見ているフェイトではなくすぐに行動を起こそうとしたが、

「バインド!？」

今度はなのはのバインドがフェイトを拘束した。

「これが私の全力全開!

スターライトブレイカーアアア!！」

そのままなのはが全力でフェイトに向かってスターライトブレイカーを撃ちこんだ。

その魔力はフェイトを一瞬で包み込みそのまま海に命中して水しぶきを上げた。

「…うわあ、フェイトの乱れ撃ちも酷いけどなのはの方が危ないな。」

なのはがフェイトが戦っている理由を調べるのを諦めた守がなのはのスターライトブレイカーを見て若干引き気味に言った。

そしてなのは達の所へと向かった。

スターライトブレイカーを撃ち終えたレイジングハートは廃棄ダクトから圧縮魔力の残滓を排出する。

なのははスターライトブレイカーを撃った反動で疲労の色を見せていたが、スターライトブレイカーを受けて気を失ったフェイトが落ちていくのを見て慌ててフェイトを追いかけようとしたが、

「よいしょ…と。」

「「守!?!」」

なのはより先に背後にオルフェウスを従えた守がフェイトを受け止めた。

その事にその場にいた皆が驚く。

「え、不味かった!?!」

皆の驚いた声の意味を取り違えた守がフェイトをあっさりと離れた。

「ちよつと守!?!」

再び落ちていくフェイトを見てなのはが守に注意をする。

「まぎわらしい声をあげないで…よつと。」

なのはの注意で今度はオルフェウスにフェイトをキャッチさせた。

「うっ…。」

「気づいたフェイトちゃん?」

意識を取り戻したフェイトになのはが声をかける。

フェイトが自分の状況を確認していく。

そして自分を抱き上げているオルフェウスを見て驚くのは仕方なかった事なのかもしれないが、その悲劇は起きた。

「きゃ!?!」

そんなかわいらしい声と共にオルフェウスに向かってフェイトはラ

ンサーを飛ばした。

「がはあ!？」

そしてオルフェウスにとってフェイトの持つ電撃の特性は弱点でありダメージを受けた守は悲鳴とともにオルフェウスによる飛行能力を失い海へと落下していった。

因みにフェイトはオルフェウスが手放した瞬間、慌てて飛行魔法を発動させてその場にとどまる事が出来ていた。

「あ…ご、ごめんなさい。」

落ちていく守を見てフェイトが申し訳なさそうに謝る。

「守なら…きつと大丈夫だよ。」

えっと…私の勝ちだね？」

一連の流れを呆然と見ていたなのはがフェイトにフォローをしてから話を進めるためにフェイトに聞いた。

因みに落下した守はアルフとユーノによって助けられたが、着ている学生服は濡れの状態だった。

「…うん。」

そうだね。」

なのはの言葉をフェイトは認めてバルディッシュがジュエルシードを取りだす。

なのはがジュエルシードを回収しようとした時、

それは前に海上でなのは達を襲った物と同じ雷がその場にいたフェイトと守に向かって襲ってきた。

「うああああ!!」

「つつ…。」

その雷撃にフェイトは悲鳴を上げて、守は一瞬で意識を失う。

そして雷撃を受けて破損したバルディッシュから放出されたジュエルシードと守が空中の転移魔法に飲み込まれていった。

「『守!?!』」

その事に驚いていたなのは達だったが、すぐにクロノからアースラに戻るように通信がありなのは達はフェイトを連れてアースラへと向かった。

一方アースラでは物質転送によって判明したプレシアがいる時の庭園に武装局員を送っていた。

「ゲホッ!?!」

プレシアは次元跳躍攻撃とジュエルシードと守の物質転送の魔法によって大量の魔力と体力の消耗から吐血をしていた。

その疲労したプレシアに追い打ちをかけるかのように周囲のモニターは時の庭園に侵入者が来た事を知らせていた。

物資転送をすれば当然管理局がやってくる事が分かっていたプレシアにとってその警告はただ煩わしいだけだった。

(管理局がここに来るのも時間の問題ね。

…けども面白いわ。

ジュエルシードはこれじゃあ足りないけど、使えるかもしれないモノも手に入った。

あとはそれを実行するのみ。

これで私達は…。）

吐血によって疲労した体に鞭を打ってプレシアは気絶した守を見下ろして一人思考にふけていた。

たった一つの彼女の願いを叶えるために。

そしてその仕上げのためにプレシアはこれからくるであろう武装局員を迎えるために椅子にゆっくりと腰掛けた。

その数秒後、武装局員達はプレシアのいる玉座の間へとたどり着いた。

「プレシア・テストロツサ時空管理法違反。

および管理局艦船への砲撃容疑で貴方を逮捕します。

武装を解除してこちらへ。」

武装局員の言葉に椅子に座っているプレシアは特に反応もせず武装局員を見ていた。

そのプレシアの足元には気絶した守が床にうつ伏せに寝転がっていた。

そのまま武装局員はプレシアを監視する側と庭園の探索をする側に分かれた。

その時、武装局員達は気づかなかった。

庭園の探索をするメンバーが玉座の間の奥の部屋に入る時のプレシアが悪鬼のような表情をしていたことに。

そのまま奥に入った武装局員達は奇妙なポッドを見つけた。

一言で言えばそれは生き物死骸等の保管するため物でその用途通りとある“遺体”を保管していた。

その保管されている遺体はフェイトにそっくりな姿をしていた。

「…これは!?!」

保管されているフェイトに似ている少女の遺体に武装局員が驚いていると。

「私のアリシアに近寄らないで!」

その武装局員に激しい怒りを含んだ声でプレシアがその場にいた武装局員を魔法で吹き飛ばした。

残りの武装局員がその事に動揺してプレシアにデバイスを向けて攻撃をするが、プレシアにあっさりと防がれてしまい。

そのままプレシアが雷撃を返して残りの武装局員も倒れてしまう。

「…うっ?」

その雷撃の音で椅子に寝転がっていた守が意識を取り戻した。

そして守が音源の椅子の裏側の方を見てプレシアと目があった。

「…やっと起きたようね。」

守と目があったプレシアが守をどこか魅入るように見つめて言う。

その姿に守は驚きと何故か羨ましさを感じた。

「…あれ?」

そしてアリシアと呼ばれたポッドに保管されている少女の遺体を見た。

一方、アースラではリンデイが武装局員の送還を命じたり、状況を

把握しようとしたりしてパニックに落ちていた。

「アリ…シア？」

その中でフェイトがモニターに映った少女を見て困惑する

「もうだめね。

…時間がないわ。

たった九個のロストログアではアルハザードに辿り着けるかどうか分からないけど、でももういいわ…もう終わりにする。

この子を失ってから暗鬱な時間もこの子の身代りの人形を娘扱いするのモ。」

ゆったりとした歩きでプレシアはそのポッドに近づき、毒を吐くように言った。

そのプレシアの言葉の意味に気付いたなのはとフェイトが動揺する。

「聞いていて、あなたの事よフェイト。

せっかくアリシアの記憶をあげたのにそっくりなのは見た目だけ。

役立たずでちつとも使えない私のお人形。」

そんななのは達の様子をあざ笑うように続ける。

その言葉を聞いてアースラの通信室にいたエイミーが俯いてプレシアとフェイトの関係性について調べた事を話し始めた。

「最初の事故の時にね…プレシアは実の娘アリシア・テストロッサを亡くしているの、彼女が最後に行っていた研究は使い魔とは異なる…使い魔を超えた人造生命。

そして死者蘇生の秘術。

フェイトって名前は当時彼女が研究につけた開発コードなの。」

そのエイミーの説明を聞き、なのは達が動揺していく。つまりプレシアはフェイトを娘として見る気は始めからなかったのだと、プレシアにとってフェイトは…

「よく調べたわね。

そうよ、その通りよ。

…だけどダメね。

ちっとも上手くいかなかった。

作り物の命は所詮作り物、失った物の代わりにはならなかったわ。」

そんななのは達の予想通りにプレシアがエイミーの調べた事に対して肯定し、その“失敗”をフェイトに聞かせるように告げる。

「アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ。

アリシアは時々、我儘も言ったけど私の言う事をとともよく聞いてくれたわ。」

プレシアの言葉が一つ一つ告げられる度にフェイトを支えてきたモノが崩れ落ちていく。

「…止めて」

そんなフェイトを見るに見かねて、なのはがプレシアを止めようとする。

「アリシアは何時でも私に優しくかった。

…フェイト、やっぱりあなたはアリシアの偽物よ。

せっかくあげたアリシアの記憶もあなたじゃ駄目だった。」

そんななのはの声を無視して、プレシアはさらに憎むべき“失敗作”に“事実”を告げる。

「止めて、止めてよ！！」

なのはがそれを止めようと声をあげる。

「アリシアを甦らせる間に私が慰みに使うお人形…だからあなたはもういらないわ。

どこへなりと消えなさい！！」

プレシアが腕を振り払ってポットから振り向く。

「お願い、もう止めて！！」

なのはが悲鳴混じりに叫ぶ。

「ふはははは。」

しかし走り出したプレシアのフェイトに対する憎しみは止まる様子もなくなのはの叫びを笑い飛ばす。

その様子を見てフェイトは自分の中にある過去のプレシアと今のプレシアが違う理由を理解してしまった。

「ふふふふふ、良い事を教えてあげるわ、フェイト。

あなたを作りだしてからずっとね、私はあなたが…大嫌いだったのよ。」

その最後の一言と共にフェイトの瞳は力を失い、その手から落ちた待機状態のバルディッシュがフェイトの心を示すように砕けた。

そんなフェイトになのはとユーノが駆け寄ってフェイトを支える。

「さて、あの失敗作はもういいわ。

…本題に入りましょう。」

そう言ってプレシアはその狂気を含んだ瞳で守を見る。  
そんなプレシアを守は羨望にも似た眼差しで見ている。

（ああ…そうか、俺はこの人が羨ましいんだ。）

そう心の中で呟いた。

守がそう感じた理由はアリシアというたった一つの存在に自分の全てをかける事に何の躊躇も見せないプレシアの姿だ。

守にはプレシアのようにたった一つのモノを守りたいという感情はない。

拾ってくれた高町家に感謝の気持ちはあるものの守りたいという対象にはならなかった。

そんな守にとって例え死んでしまっても愛おしく思う事が出来るプレシアは理解出来ないモノであると同時に自分に無いモノを持っているその姿に感動のようなモノを感じていた。

「…俺にどうしろって言うんですか？」

気が付いたら守の口が勝手に動いていた。

その守の言葉を聞いてプレシアが笑みを浮かべる。

「聞きわけの良い子は嫌いじゃないわ。

私の要求は一つよ。

…貴方の使っていたガジェットを私に渡してもらえないかしら？」

そしてプレシアが己の要求を守に言った。

「ガジェット？

プレシア・テストロッサー一体何の事!？」

プレシアが守に向かって言った要求の意味が分からずリンディがモーター越しに言った。

「…貴方達、管理局は直接は見ていなかったわね。

この子はどんな魔法の形質にも当てはまらない特種なガジェットを持っているのよ。」

プレシアが若干興奮をした様子でリンディに返す。

「…あ!？」

もしかして刃君が言ったた鋼の事？」

プレシアの言葉にすぐに思い出したなのはが呟くと、リンディがどうして知らせなかったのかと責めるような視線でなのはを見た。

「あ、あの守自身がそれを使った事を覚えてないみたいで自由に使えないみたいだったから僕達もすっかり忘れていて…。」

そのリンディの視線に驚いたなのはかわりのユーノが申し訳なさそうに言う。

「え〜と、使い方とか知らないんですけど、何に使うんですか？」

守がアースラでの会話を聞きながら守が答える。

「ええ、貴方があのガジェットを貴方自身の意思で使う事が出来ないのは知っているわ。けれど貴方があのガジェットを使うのは貴方が命の危機にさらされた時でしょ？」

プレシアがそう言うと同時に守は反射的にその場から移動した。と同時に守がいたその場には大量の雷撃が落ちた。

「ちっ…思ったより反応は良いわね。」

「…マジ…みたいだな。」

プレシアがかわした守を見て悪態をつき、守はプレシアを見て疲れたように呟いた。

因みに守がいた場所に落ちていた雷撃はその場に大量の破壊の痕跡を残しており、もし命中していたら確実に命を落としていただろう。そして守が一呼吸すると庭園内から微弱の揺れが発生して大量の機械の人形が庭園を埋め尽くし始めた。

「プレシア・テストロッサ、何をするつもり！！」

庭園から大量の人形が発生したという報告を受けたリンディがプレシアに聞いたです。

「私達の旅を邪魔されたくないのよ。」

私達は旅立つの忘れられた都、アルハザードへ！！」

プレシアがリンディの質問に答える。

その声は歓喜に震えていた。

「さあ、貴方のガジェットを渡しなさい!!」

そしてプレシアは背後に大量のランサーを待機させて守に最終警告を言い放った。

「…状況がいまいち掴みきれていないんですけど、何でアレが必要なんですか？」

守が命の危機をひしひしと感じながらプレシアに聞く。

今の守は海鳴臨海公園でのプレシアの雷撃でボロボロの状態でオルフェウスを召喚するだけの精神力も無い。

プレシアがその気になれば抵抗することも出来ないだろう。

「あら、まだ分からないかしら？」

プレシアが守をさげすむように見下ろして言う。

「だから俺はアレを使った事が無いから何も知らないし。」

そんなプレシアを守が困ったように見て無駄と分かりつつ反論する。

「…何かしらの手段で記憶改竄でもかけているのかしら？」

守の言葉を聞いてプレシアが何か考えるような仕草をする。

守がそんなプレシアを見て少し気を緩めたのが失敗だった。

「まあいいわ、貴方のガジェットの使う魔法は完全に異質だわ。

恐らくそのガジェットはアルハザードに繋がる何かを持っている。

…だから渡しなさい!!」

そうプレシアが結論を勝手につけていきなり守に向かって雷撃を放った。

そしてその雷撃は吸い込まれるように守の胸へと進み貫いた。

「う、そ…。」

「ま、守？」

「…。」

その光景を見てなのはとユーノが茫然と眩き、フェイトは感情の籠らぬ眼でただ見ていた。

そして守の体は放物線を描いて床へと落下してピクリとも動かなかつた。

「…残念ね。」

まあいいわ、最初の計画に戻りましょう。」

守が動かなくなったのを見てプレシアがつまらなそうに眩き、再びジュエルシールドに魔力を注いで次元震を発生させる。

「どちらにせよ計画は変わらないわ。」

私とアリシアはアルハザードへ行つて全てを取り戻すのよ。」

アーハッハッハッハ。」

そうしてプレシアは狂気と歓喜を含んだ声で笑う。

その笑い声は庭園中に響き渡り、プレシアを後押ししているかのようだった。

## 第十一話（後書き）

今までの後書きを見直してみると遅れた言い訳ばかりで惨めとい  
かなんか上手く表現できないのですがイラツと（？）したので、普  
通（？）にやります。

…守がまさかの死亡！？

こんな風を書くつもりは無かったのですが気が付いたら手が動い  
ましたね。

これどうやってまとめよう？

でもこうやって考えるのって楽しかったりします。

さらに読者の皆様それですが喜んでもらえるかとさらに嬉しい。

そのためには…書かなきゃいけないですね。

…ああこういう事を書きたく無かったのにorz

えっと…が、頑張ります。

とか言いながらこの先一ヶ月、毎週一回ペースでテスト&レポ一

ト祭。

つまり実は今、首が半分絞まっているような状態…（哀愁）。

## 第十二話（前書き）

さあ、テストもスッキリして落ち着いて夏バテも何とか克服して執筆を始めて完成した12話。  
ラストまで後一息です。

## 第十二話

守が撃たれてプレシアが大量の魔力をジュエルシードに注いだ事により事態の早期解決をするためにクロノが時の庭園への突入を始めたがそのクロノになのはとユーノと一緒に突入を志願してその三人で突入し、ユーノ達に言われてアルフはフェイトを抱えて医務室に向かつて行った。

そして入口に着たなのは達はプレシアが召喚したゴーレムと睨み合っていた。

「クロノ君、この子達って？」

なのはがゴーレムを見て人が入っていないかクロノに聞くと。

「近くに来た相手を攻撃するだけのただの機械だよ。」

「そっか、なら安心だ。」

そのクロノの返事を聞いてなのはが一息ついてからレイジングハートを構えるがそのなのはをクロノが止める。

「この程度の相手に無駄弾は必要ないよ。」

クロノが止めた事になのはが疑問を感じていると、クロノがそう言っただけのデバイスS2Uを掲げてステインガースナイプを発動させる。

発動したステインガースナイプは鞭のようなしなりを見せながらゴーレムを次々と破壊していく。

「は、速い!!」

そうなのはが言う通り素早い動きで的確に貫いていた。そうしてクロノが入り付近のゴーレムを一掃してしまった。その事になのは達が茫然としていると

「ほら、ぼつっとしてないで行くよ。」

「う、うん。」

クロノに呼びかけられてなのはとユーノが慌ててクロノを追いかける。

そうして庭園内に侵入すると庭園内には奇妙な穴がたくさん開いていた。

「その穴、黒い空間がある場所は気をつけて。」

その奇妙な穴を見ていたなのはがクロノの言葉を聞いてクロノの方を向く。

「虚数空間、あらゆる魔法が一切発動しなくなるんだ。」

そのクロノの言葉にユーノがなのはに説明するようにその穴の名称とその意味を伝える。

「飛行魔法もデリートされる。

もしも落ちたら重力の底まで落下する。

二度と上がって来れないよ。」

そのユーノの説明に警告を加えるようにクロノがもつとも恐ろしい事実を伝える。

帰って来る事が出来ない。  
それはどれだけ恐ろしい事か。

「き、気をつける。」

その警告を聞いてなのはが気を引き締めるように答える。

その後、なのはとユーノは庭園の駆動炉の封印にクロノはプレシアの逮捕のために二手に分かれた。

その頃、アースラの医務室にフェイトを運んだアルフはなのは達が心配になり時の庭園へと向かった。

そしてアルフが医務室を出てから数秒後、茫然としていたフェイトの瞳にゆっくりと色が戻り始めた。

ただその動きはゆったりとしたもので立ち直れているわけでは無かった。

そのままフェイトは顔だけ動かして医務室のモニターに目を向けて思考の海に沈んでいた。

（母さんは最後まで私に微笑んでくれなかった。

私が生きていたと思ったのは母さんに認めて欲しかったからだ。

どんなに足りないと言われても、どんなに酷い事をされても……だ  
ど笑って欲しかった。

あんなにはつきりと捨てられた今でもまだ私、母さんに縋りついでる。）

今までの自分を確かめるように考える。

（アルフ。

ずっと側にいてくれたアルフ。

言う事を聞かない私に、きつと随分と悲しんで。

何度もぶつかつた真つ白な服の女の子。

始めて私と対等に、真つ直ぐに向き合つてくれたあの子。

何度も出会つて戦つて、何度も私の名前を呼んでくれた。

何度も何度も。

私があの子の弟までさらつたのにそれを責めたりもしなかった。

あの子の弟も私の事を責めたりもしなかった…。(

モニターに映つたアルフやなのはを見てさらにフェイト・テストロツサの在り方を思考する。

(生きていたいと思つたのは母さんに認めてもらいたいからだった。それ以外に生きる意味なんか無いと思つた。

それが出来なきゃ生きていけないんだと思つていた。)

フェイトがベッドから飛び起きて瞳に涙を浮かべながら今までの自分の在り方を嘆く。

そんな時、フェイトはなのはに言われたとある言葉を思い出した。

(捨てればいいて訳じゃない。

逃げればいいて訳じゃ…もつとない。)

その言葉から今の自分がしなければならぬ事を掴みかけていた。

そのまま、フェイトはベッドから出てきて医務室の隅に置いてあつたバルディッシュをとる。

「私の…私達の全てはまだ始まつてもいない?」

そう涙声でバルディッシュに問いかけてバルディッシュをデバイスモードにする。

しかしそのボディはボロボロで今にも壊れてしまいそうだった。

「そうなのかな、バルディッシュ。  
私、まだ始まってもないなかったのかな？」

「Get Set。」

さらに弱気なフェイトの声を聞いてバルディッシュはそれでも主のために起動をかける。

「うう、そうだよねバルディッシュもずっと私の側にいてくれたんだもんね。

お前もこのまま終わるなんて嫌だよね。」

「Yes sir。」

そんなバルディッシュの姿に今の自分を重ねたフェイトがバルディッシュに語りかけ、バルディッシュが何時もと同じように答える。  
しかしその言葉はいつも以上にとても頼もしく感じフェイトにさらに力を与えていく。

「上手くできるか分からないけど一緒に頑張ろう。」

「Recovery。」

フェイトがバルディッシュにそう告げ、破損したバルディッシュに治癒魔法を使ってバルディッシュを修復する。

「私達の全てはまだ始まってもない。」

その完全に修復したバルディッシュを持って新たな気持ちを確認す

るように呟きながらフェイトはバリアジャケットを構成していく。  
「だからホントの自分を始めるために、」

そしてその気持ちを大事な人に告げるためにフェイトは時の庭園に行くための転移魔法を展開していく。

「今までの自分を終わらせよう。」

その決意の言葉と共に転移魔法が発動した。

なのは、ユーノ、アルフは時の庭園の一区画でゴーレムと交戦していた。

なのはとアルフがゴーレムを直接破壊していきユーノがバインドで拘束していく。

一見なのは達がゴーレムを圧倒しているように見えるがだんだんとゴーレムの数が増えていき少しずつ戦力のバランスが拮抗し始め危険な状態だった。

そんな状態で一体のゴーレムがユーノのバインドの拘束から脱出してなのはの死角からなのはに向かって斧を振り降ろそうとした。

「なのは!!」

すぐにユーノがなのはにその警告をするが、なのはが防御の姿勢を取るよりもゴーレムの斧がなのはに当たる方が早いだろう。

ゴーレムの斧がなのはに当たる直前、なのは達の耳にとある声が聞こえた。

「Thunder Rage」

その聞き覚えのある声と共に見覚えのある金色の魔力光の雷がなの

はに斧を降り下ろそうとしたゴーレムに命中する。

「Get set.」

更なる追撃をかけるため漆黒のデバイスが本命の一撃の準備をする。

「サンダーレイジ!!!」

その準備ができた事を確認した主がその本命の一撃を放つ。

その魔法は広域殲滅のための魔法であり、なのは達の周囲にいたゴーレムの全てを破壊する。

「フェイト?」

アルフが急に表れた魔導師の名前を呟く。

何故、自分の主がここに来たのか?

そんな疑問を浮かべながらフェイトがなのはに近付いていく様子をただ眺めていた。

なのはとフェイトが顔を合わせて何かを言おうとした瞬間、今まで出会ったものよりはるかに大型のゴーレムがなのは達の目の前に表れた。

「大型だ。」

「バリアが強い。」

「うん。」

「それにあの背中の。」

そのゴーレムの乱入により思考が戦闘時のものになったのはとフェイトが大型ゴーレムの分析をする。

大型になったことで出力が強化され強力なバリアと背中に巨大な二門の砲頭を背負っていた。

強力なゴーレムになのはが苦戦するの予感を感じていると、

「だけど二人でなら。」

フェイトからそう言葉をかけられた。

「うん、うん、うん!！」

始めてフェイトからの共闘のお願いになのは嬉しそうに頷きながら答える。

「いくよ、バルディッシュ。」

「Get set。」

フェイトが砲撃魔法の準備を始めバルディッシュがチャージをする。

「こつちもだよ、レイジングハート。」

「Stand by ready。」

なのはもそれに合わせてレイジングハートを音叉型のシューティン  
グモードにして構える。

そんな二人に危機感を覚えたのかゴーレムも砲頭を構えるがなのは  
達の方が早かった。

「サンダアアアア、スマッシュアアアアア!！」

先にチャージが終わったのはフェイトだった。  
放たれた砲撃が大型ゴーレムのバリアに命中して大型ゴーレムは砲撃のチャージを止めて防御に徹する。

「ダイバイイイン、バスタアアアア！」

フェイトの後にチャージが終わったのはが大型ゴーレムに砲撃を放ち、大型ゴーレムに二人分の砲撃の不可を与えていく。

「セーの。」

それでも耐えていた大型ゴーレムになのはとフェイトが声を合わせて砲撃の威力を上げて大型ゴーレムのバリアは耐えきれず碎けて大型ゴーレムを破壊した。

しかし砲撃の破壊力はそれだけに止まらずそのまま時の庭園の壁を貫き巨大な穴を作った。

何も無い漆黒の暗闇。  
そこに守はいた。

（…あれ？  
俺って確か…フェイトのお母さんらしい人に雷撃くらったんだっけ？  
てか何処だよここ？）

意識を取り戻した守が状況を確認するが、回りはただ闇に包まれているだけである。

（まいったなあ。

何も見えないし、何も触れない。  
どうするのコレ？)

普通であれば完全な闇に不安感を感じるだろうが守には何処か安心出来るような感覚があった。

(…他に誰かいたりするのかなあ？)

「おーい、誰かいますか？」

闇の中やや気が抜けた守の声が響き渡る。  
すると闇が守に答えるように揺れる。

「…？」

え〜と、どちら様？」

守が闇の揺れから“ナニカ”の気配を察して恐る恐る呼び掛ける。

(…「ココダヨ。」)

再びの守の呼び掛けに闇が揺れながら守の意識に直接飛び込んで来るような“コエ”を返してきた。

その“コエ”に不気味さを感じつつ守がその“コエ”が返って来た方向を見ようとしたが、

『駄目だよ。』

そんな澄んだ少女の声が守の耳に届き、“誰か”が後ろから守の目を手で覆った。

「だ、誰ですか？」

守が闇の中その聞き覚えのない声の主に向かって問い掛ける。

『それはナイシヨ。』

少し動揺している守の反応が面白かったのか少し弾んだ声で誰かが答える。

『それじゃあ…後は私達が済ませちゃうから、またね。』

守が困惑から立ち直る前に誰かがそう言い、守の意識は完全に失われた。

大型ゴーレムを破壊したなのはとフェイト、ユーノとアルフはある程度一緒に行動したあと、なのはとユーノが駆動炉の封印。フェイトとアルフがプレシアの元へと行くために別行動を取っていた。

その頃、プレシアはジュエルシードに魔力を注ぎ込み続けて次元断層の発生を待っていた。

それも後少しである。

これでアリシアとの約束が守れるとプレシアが安堵を見せた時、時の庭園の振動が収まった。

振動が収まると同時に次元震も収まる。

その事にプレシアが苛立ちを覚えるとプレシアに念話が送られてきた。

「プレシア・テストロツサ、終わりですよ。次元震は私が抑えています。

駆動炉もじき封印。

あなたの元には執務官が向かっています。

忘れられし都、アルハザード。

そしてそこに眠る秘術は存在するか曖昧なただの伝説です。」

その念話はリンディからのモノだった。

リンディは時の庭園でディストーションシールドを発動させてプレシアの次元震を抑えてプレシアに投降することを求める。

「違うわ。

アルハザードへの道は次元の狭間にある。

時間と空間が砕かれた時、その狭間に滑落していく輝き、道は確かにそこにある。」

そんなリンディの呼びかけを鼻で笑い、プレシアは自分の求めるモノへの希望を呟く。

「ずいぶんと分の悪い賭けだわ。

貴方はそこに行つて何をするつもりなの？

失った時間と犯した過ちを取り戻す？」

そのプレシアの非論理的な話を聞いてリンディは冷静な口調でプレシアに聞く。

「そうよ、私は取り戻す。」

私とアリシアの過去と未来を。  
取り戻すのこんなはずじゃなかった世界の全てを！！」

冷静なりンディと違い、熱の籠った声でプレシアが叫ぶように言い  
きる。

それと同時に部屋の壁が砲撃によって破壊されそこからクロノが飛  
び込んで来た。

「世界は何時だってこんなはずじゃない事ばかりだよ。  
ずっと昔から何時だって誰だってそうなんだ！！」

なのは達と違い一人で戦闘をしていたために苦戦したのか、額から血  
を流しているクロノがプレシアに向かって言う。

そんなクロノを鬱陶し気にクロノを見ると同時に視界の隅からフェ  
イトとアルフがやって来る様子が眼に入った。

「こんなはずじゃない現実から逃げるかそれとも立ち向かうかは個  
人の自由だ！！  
ただ自分の勝手な悲しみに無関係な人間まで巻き込んでいい権利  
はどここの誰にもありはしない。」

フェイトとアルフがプレシアの方に向かって行くのを視界に捉えな  
がらクロノが言う。

そのままフェイトとプレシアが見つめあって沈黙が流れた。

「うっ、ゲホッゲホッ。」

「母さん！？」

急に咳込んだプレシアにフェイトが驚きプレシアに駆け寄ろうとす

るが、

「何をしに来たの？」

その冷たいプレシアの声を聞いて立ち止った。

「消えなさい。」

もう貴方に用はないわ。」

そのまま告げられた言葉にフェイトがほんの一瞬顔が悲しみに染まったがすぐに立ち直る。

そして自分の伝えたい“思い”を伝え始めた。

「貴方に言いたい事があつて来ました。」

「!?!」

急に語り始めたフェイトを見てプレシアが驚く。  
今までのフェイトならプレシアが強く言うだけで何も言えなくなるはずなのに…と知っている間にフェイトが話していく。

「私は…」

私はアリシア・テストロツサじゃありません。  
貴方が造ったただの人形なのかも知れません。  
だけど…私はフェイト・テストロツサは貴方に生み出してもらって  
育てて貰った貴方の娘です!!」

ほんの少しだけ最初は自信がないように見えたが、だんだんその口調は強くなりはつきりとした口調で宣言した。

「ふふふふ、アハハハ。  
だから何？  
いまさら貴方を娘と思えというの？」

最初はポカンとした表情をしていたプレシアだったが、フェイトが言った言葉を聞くとそれを笑う。

「貴方がそれを望むなら。  
…それを望むなら私は世界中の誰からもどんな出来事からも貴方を  
守る。」

プレシアの皮肉にも近い言葉にフェイトは一切ひるまずに真剣な表情で言う。

「私が貴方の娘だからじゃない。  
貴方が私の母さんだから！！」

そしてそう言い切り、フェイトはプレシア（母）に向かって手を差し出す。

「…くだらないわ。」

「え？」

そんなフェイト（娘）の決意の言葉をプレシアは拒絶して、まるで躊躇いを振り払うようにジュエルシールドに魔力を注ぎこみ暴走させようとする。

急に注ぎ込んだためそれがリンディの不意をつきディストーションシールドの破壊にも成功したが、駆動炉がなのはに封印されていたため次元断層に至る程のモノにはならなかった。

しかし今までの次元震による虚数空間の発生により時の庭園そのものの崩壊は免れないようであった。

「私は向かうアルハザードへ、そして全てを取り戻す。  
過去も未来もたった一つの幸福も！！」

最後にプレシアはフェイトにそう告げて虚数空間へと落ちていった。

「一緒に行きましょうアリシア。  
今度はもう離れないように。」

虚数空間という死の空間へ落ちていく中、プレシアはアリシアの入っているポットを愛おしそうに見つめてそう呟いた。

## 第十二話（後書き）

あれ、守（？）がなにもしてない（汗）。

まあ伏線ばい事書いたから大丈夫だろう。

というか段々書いてて思うのがキャラが独立して動くなあ。

ノリで始めてしまって勉強や親の妨害を受けてやっとここまで書けた。

始めた時はこんな事になるとは思わなかったよ。

恐るべし大学の勉強&親が無断で組む予定。

家族サービスで苦しむお父さんの気持ちは何となくわかった。（大

学生で知りたくない事だなあ。）

…何かもう終わったような言い方ですね。

後一話、全力で頑張ります！！

第十三話（前書き）

やっと無印完結です！！

## 第十三話

崩壊する時の庭園、その庭園からプレシアを除いた全員が無事に脱出をすることがそこで一つの謎が浮上した。

「誰も守を見かけてないの？」

アースラの一室に集まっている主要メンバーを代表してなのはが聞く。

「ああ、後でアースラのサーチャーでも確認してみたが、彼がプレシアに撃たれてからの後の詳細は完全に不明だ。」

なのはの質問にクロノが答える。

そうプレシアの元に突入している時は必死だったので忘れていたが、守はプレシアに撃たれてから完全に行方不明だった。

普通に考えれば虚数空間に落ちたか死んでしまったかという可能性が高いが…。

「でも…何故、アースラのデータバンクから守のデータが消されているのかしら？」

そう、アースラのデータバンクは時の庭園への突入の時のドサクサに紛れてハックされ守のデータのみが完全に消されていた。

一体誰が、何の理由で守のデータを消したのか？

多くの謎が残る。

しかしただ一つ言える事は守は此処にはいないという事である。

「…守。」

なのはが小さく不安な口調でその名前を呟いた。  
生きていて欲しいそんな願いを込めて。

虚数空間、そこは魔法が一切発動しない魔導師にとって恐怖の空間。  
そこにプレシアとポットに入ったアリシアがいた。  
虚数空間にいるプレシアの表情は憑き物が落ちたように穏やかなモノだった。

その表情でアリシアの入っているポットを愛しく見つめる。

「さあアリシア、後少しよ。  
アルハザードさえ見つかれば遊園地でもピクニックにでも連れていってあげるわ。」

虚数空間という死の空間へと飛び込んだというのにプレシアには絶望というモノは一切なかった。  
ただただアリシアとの約束を叶えたい。  
それだけしか思考になかった。

「やれやれ、これだけ一つの存在に自らの全て注ぎ込む事が出来る  
とは守が羨ましく思う訳だ。」

そんなプレシアに急に声をかけた存在がいた。

「…ああ、貴方ね。」

アレで死んだとは思ってはいなかったけど、何のようかしら?」

プレシアがはつとアリシアが入ったポットを守るように立ち塞がっ

てから彼を見て言う。

「僕？

いや、ドタバタしていたら逃げそびれて虚数空間に落ちただけだよ。

」

そうプレシアに話かけるのはなのは達に刃と名乗っていた少年だった。

「…ふざけた嘘は止めてくれないかしら。」

刃の口調が軽いモノだったためかプレシアが怒りを含んだ声で言う。もしここが虚数空間でなければ刃に向かって雷撃を飛ばしていただろう。

「はあ、ユーモアのない人だなあ。

…まあいいか、貴方は過去をやり直したいと願っていた。

それは本心かい？」

刃が一息ついてから真剣な表情をしてからプレシアに問う。

「あ、当たり前でしょ！！

私はアリシアに私の全てを捧げる。

そのためになら何でもするわ！！」

急な刃の変化に動揺をしつつプレシアは自分が過去に決意した誓いを言う。

「ふむふむ、その決意は素晴らしいねえ。

まあ守が羨ましく思うならそれだけの決意はあったとは思ってたけ

どね。

…でフェイト・テスタロッサはいいのかい？」

刃が納得するように頷いてから確認するようにさらに問う。

「…あんな失敗作なんてどうでもいいわ。」

刃の問いにプレシアが限り無く平坦な声で答える。

「…まあその反応ならいいかな。」

刃が少し苦笑しながら呟く。

「何が言いたいのかしら？」

刃の苦笑に引つ掛かりを感じてプレシアが突っかかる。

「いや、それは貴方自身が分かっている事じゃないかな？」

まあ僕から言えるのは憎しみと愛情は根源を突き詰めれば同じという事ぐらいだよ。」

そんなプレシアに刃が飄々とした態度で答える。

「…。」

もういいわ貴方と話す事は無いわ。」

刃の言葉が気にさわったようでイライラとした口調でプレシアは話を終わらせようとする。

「…まあいいや。」

さてと、たった一回切りの過去への片手切符だ。  
受けとるかい？」

そんなプレシアの様子を見て刃が対して気にもしないで質問をする。

「問題ないわ。」

私とアリシアはこのままアルハザードへ向かう。

そしてアルハザードで全て取り戻すわ。」

刃の質問にプレシアがそれを拒む。

「…この虚数空間で移動する手段を持たない貴方がアルハザードに  
辿り着ける可能性は低いと思うけど？」

それよりも目の前に入る自他共に認める規格外な僕の方が可能性は  
高いと思わないかい？」

プレシアに刃がやや冷たい声で事実を突きつける。

「…本当にやり直せるの？」

プレシアがチラリとアリシアが入っているポットを見てからすが  
るように刃に聞く。

「もちろん、鋼なら問題なく出来るよ。」

ただし移動した先でその子を救う事が出来ても、もっと過酷な対価  
を支払う事になるかもしれないけど貴方はアルハザードと僕のどち  
らを選択する？」

刃がプレシアに二者択一<sup>オルタナティブ</sup>を求める。

そうしてプレシアが少し悩むような様子を見せた後に一つ大きな溜

め息をついて選択した。

「…いいわ。」

貴方に賭けさせて貰うわ。」

「…それが貴方の選択か。」

さあ、来い鋼。」

プレシアの答えを聞いて刃が溜め息をついてから鋼を呼び出す。

「虚数空間でも魔法が使える何て本当に規格外ね、貴方は。」

プレシアが鋼を呼び出す刃を見て脱力したように呟く。

「まあ機巧魔神は元々異世界を探索するためのモノだからね。そういう意味での汎用性は高さは僕としても助かるんだよね。まあ“魔力”の概念も違うからそこら辺も大きいかな？」

プレシアに投げやり気味に刃が答えて鋼が魔力を放出しはじめた。その光景をプレシアが見ていると刃の手がプレシアの額に触れた。

「ッ!？」

一体何を!？」

「騒がないで座標がわからないとこっちだって上手く跳ばせないんだから。」

ちよっと探らせてもらっているだけだから安心して。」

プレシアに刃がそう言い、ぼんやりと刃の手が光りプレシアの記憶を探っていく。

「…なるほどね。」

さて後は貴方しだいだよプレシア・テストロッサ。その選択をすることによって辛い思いをすることも貴方は過去をやり直したいかい？」

鋼が魔法陣を発動させ準備を整えていく中、刃が最終確認をするようにプレシアに聞く。

「ええ、私は過去をやり直すわ。」

プレシアが覚悟を決めたように言う。

その言葉はとても純粹で力強いものだった。

「…そう、じゃあ頑張ってねプレシア・テストロッサ。鋼！！」

『闇より熱き融炉より出でし、其は科学の槌が鍛えし玉鋼！！』

そんなプレシアに刃が寂しげに微笑み、鋼が魔力を解放してプレシアを跳ばした。

そんな刃の微笑みを見た時、最後にプレシアの頭に浮かんだのはアリシアの微笑みと何故かフェイトの微笑みだった。

アースラから海鳴市に帰ってきたなのはとユーノの心境は複雑なものだった。

久しぶりに帰ってきた事による喜びと守について知らせなければならぬという苦しむ。

それを胸に抱きながらなのは達が家に帰る。

「ただいま。」

玄関を開けてなのはが言うと、

「あ、お帰り。なのは、ユーノ。」

そこには守がいてなのはとユーノに言葉を返していた。

「……」

なのはとユーノが守がいることに呆然としていると美由紀や恭也、士郎、桃子がやって来てなのはとユーノを優しく迎えたため、なのはとユーノは守に追求する機会を失った。

ただ一つ分かることは守は無事に帰ってきたという事だけである。

後になのはが守から聞いた話によるとプレシアに撃たれた所までは覚えていたらしいがそこからは真っ白で気が付いたら海鳴臨海公園にいてなのは達が帰る一日前に帰ったらしい。

もちろん家族からは“こつてり”絞られたらしくその内容はなのはとユーノには一切教えなかった。

ただ端から見ても桃子と守のヒエラルキーの差がさらに広がっていたように見えるので大雑把な内容は分かったような気がする。

その数日後、なのはのもとにリンディからフェイトがなのは達に会いたがっているという電話を受けて、なのはは守とユーノを連れて海鳴臨海公園へと向かった。

海鳴臨海公園にある橋にクロノとアルフとフェイトがなのは達を待っていた。

しばらくすると足音が聞こえてきたのでその方向を見ると肩にフェレットのユーノを乗せたなのはが守の手を引っ張りながらやって来た。

「フェイトちゃん。」

すぐにフェイトの姿を確認したなのはが手を振りながら向かって行き、守が微妙に居心地悪そうな表情でフェイト達のいる所にたどり着いた。

そのままの勢いでユーノがなのはの肩から降りてアルフの肩に乗り移った。

「あんまり時間はないんだが、しばらく話すと良い。

僕たちは向こうにいるから。」

クロノがなのはとフェイトを二人きりにしてあげようと考えて言う。

「ありがとう。」

「ありがとう。」

「…じゃあ俺はこっちに。」

なのはがフェイトがクロノに感謝を告げて守もクロノ達の所に行くところ。

「え？」

その瞬間、フェイトに凄く驚いた表情で見られた。

「いや…え？って言われてもテストアツサさんが用があるのはのはだろ？」

フエイトの反応を珍しげに見た後、当然だと言わんばかりにクロノ達が向かっているベンチに行こうとする。

「ああと、その貴方にも言いたい事があって、」

「いや、取り合えずなのはが先だろ？」

フエイトがあたふたと慌てて言おうとすると守がスパツと一言も告げさせずに言ってしまう。

そしてさらにあたふたするフエイト。

端から見ていると微笑ましい(?)がこのままでは話が進まないの守が勝手にすたこらとクロノ達の所に歩いて行ってしまった。

「…君は馬鹿か？」

クロノ達がいるベンチについて開口一番にクロノにそう言われた。

「え、何で？」

それを本気でよくわからないという表情をして守が首を傾げる。

「…まあいい。」

僕も君には言いたい事と聞きたい事がある。」

クロノが呆れたように言ってから真面目な表情になって守に質問を始める。

ちなみに守が行ってしまいなのはとフエイトの間に気まずい沈黙が

訪れたがなんとかきこちなくだが二人も話始めていた。

「ペルソナとか機巧魔神の事だったら僕は知りませんよ。」

守が同じ事を聞かれるのは面倒なので先に先手を打つ。

「いや、それなら気にしないでくれ。」

僕と艦長で話し合った結果、君の力というより君自身の事について上層部には一切知らせない事にしたんだ。」

クロノが苦笑い気味に守に向かって言う。

ペルソナや機巧魔神に対する危機感は拭えないが、あまりにも不明な点が多すぎて上層部の混乱を招きかねないと考えて知らせない事を最善と判断した結果である。

幸いにして守のデータは完全に削除されてしまっているので問題もない。

「それでこれは僕個人の話なんだが、すまなかった。」

「はい？」

クロノがその言葉と共に頭を下ろす。

急に頭を下ろされて守は驚く。

守にしてみればクロノというより管理局との関わりは薄かったため謝られる理由に心当たりはなかった。

「君が僕と初めて会った時に君に怪我を負わせた事だ。」

クロノがちょっと苦い表情で守に言う。

海鳴臨海公園でクロノが放った魔力弾によって守が致命傷を負った

事をクロノは気にしていた。

犯罪者の確保が職務とは言え管理局員が殺傷設定で攻撃をすることはある。

犯罪者が殺傷設定で攻撃してくる時に非殺傷設定で戦っていると犯罪者の増長を招く事がある。

それを防ぐために殺傷設定で相手の致命傷にならない程度に怪我を負わせ戦意を削ぐことが主な目的で殺傷設定を使う事がある。

しかしクロノのような高レベルの魔導師の執務官だと扱う任務も危険な物が多く、始めの攻撃が殺傷設定による威嚇であることが多いなりつてしまいその習慣によってクロノはフェイトを殺傷設定の魔力弾で撃った。

この時、守が急にフェイトを庇ったためフェイトの肩を掠める筈だった魔力弾は守に致命傷を与える事となった。

この出来事はクロノにとつてとても大きな衝撃を与えていた。

例え掠めるつもりであっても殺傷設定の魔法には人を傷付けるの危険性を秘めている事をクロノに思い出させた。

そのため守に対してクロノは責任を感じていた。

「あー、え〜と。」

別にそんなこと気にしないで良いですよ。」

そんなクロノに守が困った表情でいう。

「ッ!？」

君は何を言っているんだ!!」

クロノが驚愕の表情で守に問い詰める。

どんな人間であっても自分に害を及ぼされると例え事故であっても不快感を感じる事はある。

自分が死にかければなおのことである。

守はそれを対して気にしてないと言った。

「いや、結果的には何もありませんし、むしろ大丈夫でしたか？あの黒いペルソナに襲われて？」

守がクロノに申し訳なさそうに聞く。

守にしてみればあの制御不能なペルソナがクロノを襲った事の方が自分が致命傷を負った事より重要だった。

あのペルソナが現れる時のオルフェウス以上の万能感と高揚、そして一体感。

一度しか自分が使った（？）事がないがああ感覚は危険だと感じる。刃と言われている人はあのタナトスをどう制御しているのか気になる。

「いや、あの場合は君の正当防衛だ。僕の責任だよ。」

守の言葉を聞いてもクロノは反省の様子を崩さなかったのである。事を守は思った。

「…優しいんですね。何か羨ましいです。」

守が思った事をそのまま言つとクロノが慌てて言った。

「はあ！？

ちよつと待て！！

何故そんな結論になるんだ！！」

かなり不意打ちだったのか、声はテンパっていた。

「いや、俺がそこまで気にしていないって言っているのに自分の責任だと言うから何となく。」

急にテンパったクロノに守が驚きを感じながら言う。

そのクロノは「兄弟だから思考が似るのか。」とかぶつくさ呟いていた。

「…あ、そう言えば自己紹介してなかったですね。

俺は高町 守です。」

ぶつくさ呟いているクロノに話題を振ろうとしてヤケクソ気味に言う。

「ああ、僕はクロノ、クロノ・ハラオウンだ。

よろしく。」

声をかけられて落ち着いたのか。

クロノもすぐに立ち直って自己紹介をする。

ちなみに俺ってこんなキャラじゃねえー！！と守が内心羞恥に悶えていたのはどうでもいい事である。

「さてと、そろそろ時間かな？」

自己紹介を終えてクロノがそう呟き、なのはとフェイトの方を向き声をかけに行く。

なのはとフェイトは話し合いが上手くいったのかその表情は多少涙を浮かべていたものの笑顔だった。

守は何を話していたのか興味がなかったのでベンチの方でなのは達を他人事のように眺めるつもりだったが、なのはが急に守に向かっ

て手招きをした。

守が疑問を浮かべながら渋々なのは達の方に行くと、フェイトが守を見て言った。

「あ、あの自己紹介をさせて下さい。」

「?????」

フェイトが守に向かって言う。

守はフェイトの意図が全く分からず混乱しているが、フェイトの好きにさせる事にした。

「フェイト、フェイト・テストロッサです。

わ、私と友達になってください!!」

「はい?」

フェイトが自己紹介と共にした発言で守の思考は完全にフリーズする。

(にゃははは。

守、フェイトちゃんが自己紹介してくれたからちゃんと返してあげないといけないでしょ。)

そんな守になのはから念話が届いて何となく状況を把握する。

フェイトがなのはと友達になったから守とも友達になりたいのだから。

「いいけど、テストロッサ、」

「フェイトです。」

守がやや呆れ気味に言いながら許可をして何時ものようにフェイトをファミリィネームで呼ぼうとするとフェイトがバツサリと名前を強調する。

「いや、別にテスト、」

「フェイト。」

「あのテ」

「フェイト!!」

守が困ったようにフェイトの事をファミリィネームで呼ぼうとしますがすぐにフェイトに名前を呼ぶように修正されてしまう。心なしかその姿に必死さが見えてなんだか怖い。

(早速、友達“なのは”の影響が出てる!?)

守が驚愕すると同時に自分の負けを感じた。

「あ、はい。」

フェイトさん。」

「うん。」

守が諦めて名前を呼んでフェイトがそれを聞いて満足そうに頷く。そして守の方を期待した視線で見る。

「あー、うん。」

高町 守です。」

フェイトの視線の意味を理解した守が自己紹介をする。

「よろしく守。」

フェイトがその響きを確認めるようにして守の名前を呼ぶ。

「…時間大丈夫なのかクロノ？」

そんなフェイトを見て用件が済んだと思った守はクロノに時間の心配をする。

「…守、君はもう少し人を思いやるべきでは？」

クロノが守を見て呆れたように言う。

「いや、時間厳守だと思って時間をかけた方が失礼かなと？」

守がクロノの言葉にそう返す。

どちらの言い分もあっているため反論が見つからなくなる。

「フェイトちゃん!!」

守の言葉を聞いてなのは何か思い付いたのか急に髪を留めていたリボンをほどきはじめた。

「思い出に出来るものこんなしかないけど。」

なのは自分が使っていたリボンをフェイトに差し出す。

「じゃあ、私も。」

フェイトもなのはの言葉を聞いてリボンをほどいてなのはに差し出す。

「ありがとうなのは。」

「うん、フェイトちゃん。」

「きつとまた。」

「うん、きつとまた。」

互いに感謝をしてまた会う約束をしてリボンを交換する。

「ありがとう。アルフさんも元気だね。」

「ああ、色々とありがとうな、なのは、ユーノ、守。」

アルフがなのはの肩にユーノをのせてなのはがアルフに挨拶をする。そしてアルフがなのはとユーノ、守に感謝をする。

「それじゃあ僕も。」

クロノもなのはと守に挨拶をする。

「クロノ君もまたね。」

「またな。」

なのはと守がクロノに返す。

そうして挨拶が済みクロノ、アルフ、フェイトが転移魔法陣の上に乗りアースラへの転移が始まる。

（バイバイ、またね。

クロノ君、アルフさん、フェイトちゃん！！）

なのはが今までフェイト達とあつた出来事を思い出しながらゆつくりとフェイト達を見ているとフェイトがなのはに向かって手を振ってくる。

すぐになのはが嬉しそうに手を振り替えて転移魔法が発動してフェイト達はアースラへと転移した。

こうして彼らの物語は一時の終結を向かえる。彼らがまた会うとき新たな物語が始まるのだがそれはまだ先の事である。

それまで彼らはほんの少し今までと違う日常を過ごすだろう。

なのはには魔法が混ざった日常。

守には魔法と謎だらけの力と…

『帰っちゃったね。

寂しい？

お姉さんが慰めてあげようか？』

守にそう呼び掛ける声。

そして守の後ろにうつすらと浮かび上がる少女。

しかしその声は守にしか聞こえず守にしかその姿は見えない。

「…。」

守はその少女の事を無視する。

ふわふわ浮いている割りに何も出来ないヘンテコな幽霊(?)である。

守がその少女に気が付いたのは海鳴臨海公園に帰って来たときだった。

その少女は当たり前のように守の後ろにいて普通について来た。

魔法とかペルソナとか機巧魔神とか死にかけた筈なのに生きていたりしてもう滅茶苦茶な経験をして色々と吹っ切れた守はあっさりとその存在に慣れてしまった。

取り合えず周りの人には見えないらしいし、本人(?)も特に何か幽霊っぽいことが出来ない無害な幽霊(?)なので問題はない。

その名前は…

『ちよつとく守聞ってるの？

…また無視。

ああ私の可愛い弟が反抗期に入ってしまった。

どうしましょお父様(土郎)、お母様(桃子)?

琴奈は心配で仕方ありません。』

お前は母さん達と話す手段がないだろ!!とツッコミたいのを我慢して自称姉の少女、琴奈を見る。

まあ姉を自称しているので何となく顔は似てはいるが、正直こんな幽霊(?)みたいなのが姉(?)と言われると自分の記憶は思い出してはいけないモノなのかと不安に思うが、なるようになれと開き直る。

守の日常…それはもう色々と碎けてしまっているのかもしれない。

## 第十三話（後書き）

やっと無印が書き終わった。

達成感があるんだけど…ここまで色々時間がかかるとリアルSTS  
まで書き終わるまでどれくらい時間がかかってしまうのだろう。

まあ無理に早く書いて駄文になるのもいやなんで…まあ早く書ける  
ように努力しますのでこれからも温かく見守って頂けると嬉しいで  
す。

あ、最後にちよつとした宣伝というかアンケート。

プレシアが過去へと遡った話をふつと考えたら意外と形になったの  
で面白そうであれば同時進行で書いてみようかなと思うのですがど  
うですか？

私はあの子のために全てを投げ捨てて、あの子を救う道を探してい  
た。

ただあの規格外の少年に願いを叶えてもらってあの子との幸せを取  
り戻してから思うようになった。

結局、救われたかったのは私自身だったのかもしれない。

そのために“あの子”を傷付けたのは最低だと思うけど、ここには

“あの子”は…いない。

そう、いる筈が…ない。

「これはジュエルシードです。」

「ジュエルシード？」

不屈の少女と結界魔導師を廻る21の宝石の物語。  
そこには“彼女”がいる筈がない物語。  
しかし…

「なんでこんな事を…！」

「君には関係ない。」

現れる少女。

「何で…貴方が…？」

「誰です貴方は？」

巡り会う“親子”

「時空管理局だ…！」

「私は“皆”のためにやらなきゃいけないんだ…！」

かつてと似ているようで違う理由。

「貴方の名前は？」

「私は…。」

魔法少女リリカルなのは（タイトル未定）

はじまります。

うーん。

内容は半分くらい原作ブレイクをするつもりかな？

(設定の時点で結構ブレイクしてるけど。)

ただ一つこれを書く上で解決しなければならない問題が一つ。

…プレシアって何歳？

やべえ言っちゃったよ(汗)。

まあ正確に言つとアリシアが生存すると無印の時に何歳になるのかなあ？って言う話なんですよね。

公式サイトをみたらプレシアの年齢の表記が(???)。

…怖いよ。

プレシアが怖いよ。

でももっとも怖いのはリンディさん年齢は…表記そのものがなかった。

イヤアアアアア!?

というボケは終わりにして希望があれば書いてみようと思いますので意見を下さい。

あ、でも真面目にプレシアの年齢(アリシアの年齢)を知りたい。

## 閑話2 夏の一時(前書き)

やっと残暑が終わったのかな？

取り合えず今、A・Sの構想を練っていますが(恐らく原作沿い)ゴミみたいな自分の文才がさらにレベルダウンしないためにちょっとした話を書いて見ました。

## 閑話2 夏の一時

これはなのは達を襲った夏ある日の出来事である。

「ねえ、幽霊ってホントにいるの？」

この何気ない一言が全ての始まりだった。

その日はもつとにかく猛暑日だった。

「暑いよ〜。」

「キュー。」

『うう、流石にシンドイ。』

「…。」

高町家のリビングでなのは、フェレットのユーノ、琴奈、守が完全にだらけきっていた。

もつとも琴奈がだらけている姿は守以外には見えないのだが、ちなみに士郎や桃子、恭也、美由紀は翠屋の方に行ってしまう家中はなのは達しかいなかった。

そして彼らの戦友であるエアコンはすでに壊れてしまいリビングは暑くなる一方だった。

そんな極限状況で頭がおかしくなったユーノが聞いた。

「ねえ、確かこの日本って国では怪談をすると涼しくなるって聞い

たけど本当？」

どこで仕入れた知識なのかはわからないが微妙に間違っている事を聞く。

「涼しくなるって…そんな事はないぞ。

それに怪談は知らないな。」

ユーノに守が律儀に返事を返す。

ちなみに守が怪談と言った時に琴奈にギロリと睨まれた。

守はよくわからないが琴奈はどうも幽霊とかではないらしく幽霊扱いするとかかなり怒ったりする。

「なのはは怪談キライ。」

なのはがぐったりとした声で言う。

「そっか…。」

じゃあ質問を変えてもいい？」

ユーノがなのはのぐったりとした姿を見て若干苦笑いをして、一つ前置きをしてからとある事を聞いた。

「ねえ、幽霊ってホントにいるの？」

ユーノがその質問をした瞬間、リビングに稲妻が走った。

「いないよ、絶対。」

ユーノの質問になのはが即答する。

「…さあ？」

『何で私を見るのかな、守？』

守はちよつと間を空けてから目線が琴奈の方を向きつつ言う。

「うーん、何か曖昧だな。」

幽霊って他の世界ではあんまり聞かない言葉だから興味があったのに。」

ユーノがなのはと守の反応を見て少し残念そうに呟く。

ミッドチルダなどでは人の死後に意識を向ける事があまりなく幽霊という概念は存在しないと云える。

そのためユーノは知的好奇心から聞いていた。

「ふーん、こういう所で文化の違いって分かるんだな。」

そのユーノの言葉を聞いて守が面白そうに呟く。

（マスター、私も幽霊というモノを知りませんがたまにマスターの付近で奇妙な反応を感知することがありますよ。）

守とユーノが互いの文化の違いについて知的好奇心を刺激されると唐突にレイジングハートがこの会話に入ってきた。

「え！？

レイジングハートそれってどういう事！？」

なのはがレイジングハートの発言に驚愕してする。

(「くまれに皆様という時に空間に原因不明のブレのようなものを察知することがあります。

それと同時に謎のノイズを拾う事が、)

「キヤアアアアアアアアアアアア!？」

レイジングハートが報告をしていくとなのはが悲鳴をあげてリビングの隅に逃げて頭を抱えて半分泣いていた。

「な、なのは。」

…えっともうちよっつと詳しい話が知りたいなあレイジングハート。」

なのはの新しい一面を発見したユーノが驚きつつ、知的好奇心が勝ったのかレイジングハートに続きを求め。

「…。」

「あー、そっか。」

確かにアレなら何となくでも私の事が認識出来るね。」

そんなユーノの姿を守がちよっつとひきつつた表情で見て、琴奈がちよっつと予想外の出来事に驚きつつ楽しそうに見ている。

(了解しました、では報告を継続します。)

レイジングハートがユーノの要望に答えて報告をする。

ちなみに報告を続けたレイジングハートを見てなのはが“レイジングハートの意地悪”と涙を浮かべて見ていたのは琴奈しか知らない事である。

（よく皆様といる時に奇妙な反応があると云いましたが正確には守様といる時にその反応を感じます。）

そこまでレイジングハートが報告した時にガバツとユーノとなのはの視線が守に集中した。

守といえばペルソナやら機巧魔神と言った正体不明の力を使っている。

そんな守ならあり得るといふ視線だった。

その視線を受けて守が知らないと目で合図するが、どう考えても琴奈の事である。

「オ、オルフェウスの勘違いじゃないかな？

飛んでるし透けてもいるし。」

二人の視線を受けて慌てた守が適当に思い付いた事を言う。

ちなみに守のその言い訳を聞いて琴奈はお腹を抱えて笑いを堪えていた。

「でも守、今ってオルフェウス使えないんじゃないっけ？」

守の発言を聞いてユーノが守に質問する。

そう、理由は全くわからないがアレだけ好き勝手に使っていたオルフェウスは事件が終わってから何故か喚び出せなくなっていた。

一度危機的状况になれば喚べるのではないかとなのはにディバインバスターを撃ってもらったら、危うく三途の川を渡ってしまいそうになった。

（ユーノ様の言う通りです。）

守様がペルソナや機巧魔神という力を使う時に異質な反応があるの

は認めますが、私はその反応を探知するようになったのは事件を解決してからです。」

「へ、へえ〜。」

レイジングハートの報告は守を動揺させていた。どう考えても琴奈以外にありえない。

「それって守が何かしらの手段で帰ってきてからって事だよね。…守ってまさか幽霊じゃないよね。」

「ユーノそれは定義が間違っている。それじゃあ俺はゾンビだ。」

ユーノが守に恐る恐る質問して守が一蹴する。ちなみに守のゾンビ発言を聞いて琴奈が笑転がっていた。どうもこの自称姉は普通の人と比べて少し笑いのツボずれているらしい。

「えっと、ゾンビって何？」

「ああ、ゾンビって言うのはな、」

ユーノが守の発言に疑問点を見つけて答えようとした時、“彼女”が限界を越えた。

「うにゃああああああ！？」

そんな悲鳴をあげて少女、なのはがレイジングハート無しで魔力を収束させていく。

「な、なのは!?!」

「あゝあ、これじゃあ余計に暑くなるし。」

なのはの行動にユーノがテンパリ、守が諦めたように呟く。

「怖い話、禁止ー!!」

そう悲鳴をあげてなのはが守とユーノに向かって砲撃を放つ。

流石に放たれた砲撃は非殺傷設定ではあったものの、それは迫り来る壁であった。

『合掌…。』

砲撃に飲み込まれる瞬間、琴奈が守とユーノに向かって手を合わせ  
て言った。

幽霊っぽい琴奈が言う台詞ではないよなと意識を失う瞬間、守は思  
った。

何はともあれ、なのはを除いた守とユーノは暑さを忘れる事が出来  
たので結果オーライである。

ちなみにこの経験からユーノが幽霊の定義をアースラメンバーに伝  
え、それが全次元世界に幽霊という概念を与えたのはどうでもいい  
話である。

## 閑話2 夏の一時（後書き）

何でも、なのはがドーンみたいなオチにしちゃうんだろうなあ。  
取り合えずA'sに向かって頑張るべし。

あゝペルソナ4とかfate/zero色々楽しみだな。

…前途多難である。

その前に勉強やらないと危ないかも（どんより）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6666k/>

---

魔法少女リリカルなのは2体の魔神を従えし者

2011年9月28日23時07分発行